

# 南園會報

第十二號



山西縣立蕪荊女學校

南園會



Educational work among women has been greatly improving in our country for the last few years. There are many reasons to account for it. There were first of all a great many women who have been working in the educational field as hard as men, and the results of their work begin now to show themselves. Besides, there is the social movement, which is gaining ground in Japan year by year, and which has succeeded in touching young hearts and kindling in them an aspiration for liberty and spiritual independence. There is also in our rising generation an ardent desire, awakened chiefly by the recent revolution, to do their best for the future of their country.

These as well as various other causes have contributed towards the progress of educational work in our days.—Let however those who read this little magazine remember that even the best methods of education will be of no use without our own exertions, and that the final result will be proportional to the effort and energy with which we try to apply those methods to our own needs and conditions.—

C. C. Kuba



目次

△表紙▽

一、薔薇……………(石版二度刷)……………

△口繪▽

一、本科第四回卒業生……………(コロタイプ)……………

一、實科第十二回卒業生……………(全)……………

一、同窓會記念撮影……………(全)……………

△巻頭▽

一、偶感……………みつは……………一

△教の園▽

一、國本の培養……………中野 貞介……………二

一、嫁ぎ行く妹……………安永 スエ……………一六

一、禁酒と女子……………上利 テイ……………一九

一、萩へ来てから……………柳原 貞助……………二〇

△文の園▽

一、作 文……………二四一六八

一、和 歌……………六九一七四

一、詩……………七五—八〇

一、修學旅行の記……………八一

一、ひよつこの日記……………田總 ゆき……………九二

一、菊の花咲く頃……………倉田喜代子……………九七

一、時雨する頃……………神原 幸……………一〇一

一、他郷の朝に……………須子美登里……………一〇三

一、詩六篇……………倉田喜代子……………一〇四

一、眞紅のぼら……………陽陰の花……………一〇六

一、詩二篇……………羽仁 素子……………一〇八

一、秋風抄……………鈴川ヒナ子……………一〇八

一、秋……………つばな……………一〇九

一、こすもす……………陰陽の花……………一〇九

一、和 歌……………羽仁 素子……………一〇九

一、助川だより……………平島 緑……………一一〇

一、支那だより……………有馬 淑子……………一一〇

一、朝鮮だより……………横山ひな子……………一一一

△由縁の園▽

一、ひよつこの日記……………田總 ゆき……………九二

一、菊の花咲く頃……………倉田喜代子……………九七

一、時雨する頃……………神原 幸……………一〇一

一、他郷の朝に……………須子美登里……………一〇三

一、詩六篇……………倉田喜代子……………一〇四

一、眞紅のぼら……………陽陰の花……………一〇六

一、詩二篇……………羽仁 素子……………一〇八

一、秋風抄……………鈴川ヒナ子……………一〇八

一、秋……………つばな……………一〇九

一、こすもす……………陰陽の花……………一〇九

一、和 歌……………羽仁 素子……………一〇九

一、助川だより……………平島 緑……………一一〇

一、支那だより……………有馬 淑子……………一一〇

一、朝鮮だより……………横山ひな子……………一一一

△校外通信▽

一、助川だより……………平島 緑……………一一〇

一、支那だより……………有馬 淑子……………一一〇

一、朝鮮だより……………横山ひな子……………一一一

- 一、本會文庫記事……………一三二
- 一、同窓會寄附芳名……………一三二
- 一、同窓生の方に申します……………一三三
- 一、會 告……………一三四

△秋の園▽

一、體育大會の記……………一三六

一、運動會の記……………一三七

一、卒業生送別會の記……………一三八

△會員名簿▽

- 一、特別名譽會員……………一三九
- 一、名譽會員……………一三九
- 一、特別會員……………一三九
- 一、舊特別會員……………一三九
- 一、校外會員……………一四一
- 一、在校會員……………一五六
- 一、編輯だより……………一七七

△本校記事▽

一、校豫定行事抄……………(本四委員)……………一五

一、私達の日誌より……………一六

一、學科受持……………二四

一、生徒數及び級監……………二四

一、勤儉強調週間……………二五

△本會記事▽

一、第十一回同窓會記事……………二六

一、第八回運動會記事……………二五

一、體育アー競技……………二九

一、體育大會記事……………三〇

一、南園會役員……………三一

一、長崎だより……………松浦 次子……………二一

一、大阪だより……………山崎 貞……………二二

一、山口だより……………中村 芳子……………二二

一、朝鮮だより……………野田 幸代……………二二

一、大阪だより……………内藤 静江……………二三

一、台灣だより……………小澤 初子……………二三

一、神戸だより……………萩の 子……………二四





(月三年三十正大)

生業卒回四第科本

掃溜の草も彌生の景色かな (鳴雪)  
 来る笑顔迎ふ笑顔や羽子の友 (射節)  
 息かけた鏡に似たり春の月 (晋水)  
 負ふた子に髪なぶらるゝ暑さかな (その女)  
 歸省人夏復せて母を泣かせけり (泊雲)  
 卵の花や動けば闇の伸縮み (楠下)  
 水底の紅葉見て居る跡かな (八木)  
 ものいへば唇寒し秋の風 (芭蕉)  
 秋雨や水さびのたまる庭の池 (子規)  
 いろくの袖口見ゆる火鉢かな (みち彦)  
 走り出て妻の手渡す頭巾かな (巴陵)





(大正三十三年三月) 實科第二十回卒業生





同會記念撮影 南園館裏 十月二十六日

8



# 南園會報

第二十號

大正三十三年十二月二十日

山口縣立萩高等女學校

## 南園會

### 卷頭詩

國危し、國難來の叫びなき、ぬ。  
 日れもすき、ぬ。  
 救はむ、救はざる可らず  
 さは誰しもいひぬ。  
 されど、  
 われ國のため、われ世のため、はた、  
 われ人の身のために盡さむと  
 たゞこぼもて、  
 たゞ思ひにて、  
 事足れりとは、なぞ思はるべき。  
 先づ汝が身を削れよ、  
 先づ汝が身を減んぜよ  
 然る後口を開けよ、  
 行はれむ  
 ならぬ、さは神の言葉にてもあらん  
 うたては  
 さかしき人の、人をせめて已に寛なる事よ、  
 わが身の幸を、わかつを得ば、忽ちにならむ  
 世の幸、人の幸、わが身の幸。  
 うれしきかな

(みつば)



國本の培養

特別會員 中野貞介

近頃國難來を叫ぶ者が漸く多くなりました。其の理由をただしましたら、いろ／＼あるでせうが、我が國の經濟上に就きまして、憂慮するこいふことも、其の中の主なる一つであります。

昨年の大震災は振古未曾有の被害を我が國に與へ、多大の物資を無くしました。爾來我が國の經濟上の信用は著しく下り、外國爲替相場は日を追ふて益々下落し、國債は非常に多くなりました。貿易は近年入超に入超を重ね、本年の如きも、十月までの入超は實に六億三千万圓の巨額に達して居ます。歐洲戰爭により贏獲た成金圓は一炊の夢、今は戰爭以前よりも、遙に／＼懷寒うなつて居るでは無いですか。然るに一面では、海外發展も米國は勿論、各地ともだん／＼逼迫し來らうとして居るし、國內に於ては、産業は萎微として振はず、物價は低落せず、人心は動もすれば奢侈放縱に流れようとして居ります。今にして我が國民が自覺することなく、徒に武陵桃源の惰眠を貪つて居ましたなら、我が國は經濟上に於て、早晚破産の運命に遭遇せねばなりません。有識の士此の點に着眼して、國難來を絶叫するのも故の無いことはありません。

試に考へてごらん下さい。我が國人の生活に必要な衣食住は何處より求めて居りますか。衣服の材料は多くは木綿でせう。尤も近來は毛織物も多くなりました。此等の原料はいづれも殆ど外國より輸入して居ります。

食糧の如きも我が國內に産出したものばかりでは足りないから、毎年々々澤山輸入して居る。住居の材料も多く輸入するやうになつてきました。これは今改めて申すまでもなく、我等の日常目撃して居る所であります。それに諸種の贅澤品まで、新を追うて買つて居るからたまらない。我が國より生絲をはじめ輸出して居るけれども間には無い、輸入超過は實に其の結果で、國民の深く思をいたさなければならぬ所です。

由來我が國民は概して經濟上について、うごい憾があります。封建の餘習未だ去らず、中には、富まか金錢どかいへば、何だかけがらはいしい事のやうに考へる人があります。富まか金錢どかを眼中におかぬを以て自ら高しとし、金錢を浪費しておいて、豪遊などといつて自慢し、又絢爛目を奪ふやうな分際不相應な衣裳を着けて外出すれば、之を見聞く人々も眼をみはつて喜び迎へるといふ風があります。第一かういふ風習や精神を根本的に改めることが肝要ださ存じます。

勿論富其のものを目的としてこれのみを追求し、其の外には何物をも認めざるが如きは卑しむべきであります。又富だけが人生全體ではありません。人生には富以外に大切なものがあります。これは後にいたつて述べる考であります。さりながら富は生活の方便として、生存の要具として、個人的にも國家的にも之を度外視することは出来ずまい。個人が社會の一員として、個人の獨立心をして眞の獨立の實を得しめるには、有形の財物の必要あるはいふまでもなく、生活難の壓迫のみを受けて居ては、自己の理想を實現することはむづかしい。昔の武士は多くは一定の俸祿を受けて居たから、金錢のことは念頭に置く必要はなかつたでせうが、今日の一般國民は多くの如き生活上の保證を得て居らぬ、さうしても生活上のことを考へなければなりません。これは我等の日常生活の實際を少しく考へて見れば明瞭なことであります。又國家に於ても同様です。國際間の競争に優勝な地位を占め、國運の發展を期するには、富國の策を講ずることが必要であります。戰闘には勝つても、物質の不足の爲に戰爭には負けるやうでは、戦線に立つて一身を犠牲にして働かれる方にすまないのみならず、時として忍ぶべからざる屈辱をも忍ばねばなりません。



かるが故に經世家は經濟といふことを決して忘れるなかつた。南園御殿を建てられました英明な藩主毛利重就公は御殿はできるだけ質素にして、産業を奨励され、大に備荒貯蓄をはかられたと申します。これが後年勤王の大義を唱へられた明主毛利敬親公の「假令防長は戦争のために焦土にあつても、王事につくしたい。」と御誓言になつた一大決心と、兩々相族つて、王政維新の大業を翼賛された一大原動力といはれて居ます。信長でも、秀吉でも、家康でも、漢の高祖でも、ウエリントンでも、ウオシントンでも、皆經濟といふことに常に意を用ひて居ました。指月公園の花は美しい。しかし根に養分がきれたら、枯れてしまふ。赫々たる國家の活動は勿論、花々しい個人の事業も、全く養分が無ければできない。山内一豊の立身出世したのは、後に良い妻が居たからだ。支那の言葉に「家貧しうして、良妻をおもふ。」といふのがありますが、味ふべき言葉であります。

孔子は聖人といはれ、御承知の通り非常に徳の高い方でした。しかし經濟の事は氣にかけて居られたらしい。聖時孔子がお弟子と衛の國にお行きになつた。ところが其の國は非常に繁華でした。孔子は思はず、「さてさて賑やかなことだ。」とおほせになつた。之を聞いてお弟子が、「此の上は何事を増加へませう。」とお問ひいたします。孔子は、「これを富まさう。」と答へになつた。「富みましたなら、さうしたらようございませう。」と答へた。これを教へよう。」とおいひになつたと申します。(論語子路第十三) 又子貢といふお弟子が政治のことをお問ひしました時、孔子は「食を足し、兵を足し、民これを信す。」と答へて居られます。(論語顔淵第十二) 其の外論語だけでも孔子の經濟上のお考が澤山出て居ます。あまり繁雜になりますから一々はあけることをおきます。要するに、専ら空理空論のみに走らないで、實際上の生活に就いても、深く思を致されたことが孔子の大聖人たる所でせう。

孔子ばかりではありません。輓近教育上に於ても、經濟といふことに就き、著しく考慮するやうになりました。獨逸の教育學者のケルシエンシュタイナー氏の如きも、「道徳は最後の目的なれども、先づ經濟的に獨立し得る人間を作ることが必要である。」といつて居られる。人格の内容として、勤勞と生産とがいふ活動的要素が益々

其の必要を認められて來るやうになりました。米國の教育の一大特色は、極めて産業的な點であります。そして最近其の特色を發揮すべく、益々刷新改善が加へられて居るやうです。さきに述べましたケルシエンシュタイナー氏の如きは、此の米國の教育風を學んだといはれて居りますが、氏は盛に實業補習教育と勤勞主義の教育とを鼓吹して居られます。

前に述べた如く、我國に於ては、封建の餘習未だ全く去らず、富と金銭とが、乃至は實業とがいへば、一寸躊躇し、若しくは幾分輕んずる傾向がありますが、しかしこれは我國固有の思想ではありません。全く世相の變遷、思想の推移の結果であります。我が國に於ては、上代は非常に實業を重んじ、經濟に就いても充分意をはらつたものです。それは我が國名までも、瑞穂國といつて居つたのを見ても、明瞭であるばかりでなく、國史が最も雄辯に之を物語つて居ます。

天照太神は特に實業に御注意遊ばしたのであります。保食神の御教により、五穀。蓋はわが愛する人民の、よつて活すべきものであるとして、農業養蠶の道を始められ、御みづからも農桑機械の業をおつこめ遊ばした。この御事蹟は日本書記卷一神代上にくはしく記述してあるのみならず、山鹿素行先生の中朝事實にも論じてあります。天照太神の天石窟にお隠れあそばしたのには、素盞鳴尊が農業機械を妨げられたことが原因になつて居ります。そして太神のお隠れあそばしたとき、善後策を講じるために、天安河原にお集りにあつた八百萬神は、封建時代の如く十分以上の神様だけが集つて居られたわけでは無い。蝦人天津麻羅と、伊弉理度賣命と、玉祖命と、かといふ各種の實業方面の神々様もお集りになつた。そして此等の人々の造られた鏡と珠とがいふものを天照太神がお喜びにあつたらしい。以上の史實にてらして、天照太神が最も意を實業方面にお注ぎあそばしたといふことが明かでありませう。素盞鳴尊が林業を奨励されたことや、火照命と火遠理命が漁業、狩獵に従事されたことなどは面白い神話を残して居ます。人代になりましたも、歴代の天皇、皇后の農業養蠶につき、最も意を用ひられたことは國史に明かなことで、改めて申すまでもありません。特に仁徳天皇が高山にのほりまして、



炊烟の立たざるをばらんとあそばして、「國皆貧し、今より三年に至るまで、悉く人民の租税工役をゆるせ。」とのたまひ、宮殿は破壊して、悉く雨もれども修理せしめず。後國中をばらんにあります。國に烟が満ちて居りますので、「人民今や富めり。」とおよろこびにありましたことは、如何に天皇の經濟に御留意あそばしたかを教へるものではありませんか。此等のことは古事記や日本書記に記載されてゐる史實であります。又この二書と共に、我が國最古の文學であります。祝詞を見ましても、實業を重んじた風はよくうかがふことができます。祈年祭、神嘗祭、廣瀬大忌祭、龍田風神祭等いづれも年穀の豐饒であるやうにと祈る祝詞でありまして、毎年天皇の御命令によつて神様に白す詞であります。

以上の考證によりて、我國上代に於ては、非常に實業を重んじ、經濟についても考慮せられてゐたといふことを了解されたらうと思ひます。特に上述の事蹟につき注意すべきは、實業と婦人との關係であります。畏くも内宮に鎮ります天照太神の女神であらせられたことは申すまでもなく、外宮に鎮ります豐宇氣毘賣神も農桑の神様で、矢張女神でわたらせられます。保食神も伊斯許理度賣命も女神であります。素盞鳴尊の林業を助けられましたのには、妹君が居られますし、火遠理命を助けられましたのには、矢張裏面に、妃豐玉毘賣命がいらせられます。これを見ても、我が國上代に於ては、婦人が非常に實業を愛好し率先して之に従事したことが明かあります。後世の如く實業を輕んじ、勤勞を卑しむといふ風は、今後に於て益々振興すべきであります。畏くも戊申

實業を重んじ經濟について、十分意をはらふといふ風は、今後に於て益々振興すべきであります。畏くも戊申詔書に「勤儉産ヲ治メ」とおほせられ、又近く御煥發になりました。國民精神作興の詔書にも、重ねて「恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ」と再びのたまひあそばしました御聖慮のほさを深く服膺せねばなりません。

特に最初に述べました様な我が國の現状ですから、此の際老幼男女貴賤の別なく一致して、實業を重んじ、經濟に留意し、富の増殖をはかり、以て國本を培養することが刻下の喫緊事と存じます。如何に巨萬の富を得ても、其の方法よろしきを得

ざれば卑しむべきであります。然らば其方法は如何にすべきかといふに、飽くまでも正義人道によるといふことです。孔子も「不義にして富み、且つ貴きは我に於て浮雲の如し。」(論語述而第七)といつて居られます。富さへ得られるならば何でもする。これは誠にあさましい考であります。そこで富と徳といふもの、關係が生じて來ます。富と徳とはいつても一致するものとは限りませんが、兩立しない事もある。富を取らうとすれば、自分の徳を傷つける事もある。萬一富と徳と一致しない場合は、聖賢はいつでも富を捨て、徳の方を取ります。こゝに聖賢の人格が輝いて居ます。

我が國の商品が、外國に於て信用の無い主なる原因は、我が國の工業家が物品を粗製濫造するといふことと、又一つは商業家が一時の利益を占めようとして、不正手段によつて輸出するといふこととである。工業道徳も商業道徳も考へないで、ただ一攫千金の利益を得ようとするやうでは、決して永久の優利は得られません。近頃我が國の製品に製作者の精神がこもつて居らないで、一圖に金錢のみを目的として製造したかの觀あるものが多くなつたやうに思はれます。歐洲戰爭の影響であらうと考へられますが、なげかはしい事でもあります。我等は自分の仕事、たとひ僅かの仕事にでも全身の精神をうちこみたいと思ふ。そしてその報酬としての金錢といふやうに考へたい。即ち仕事其のものが目的で、金錢は附隨物といふやうに考へたい。

明治天皇の御製に

おのがじし力盡して世を富ます

民こそ國の寶ありけれ。

誠に自りがたい御製であります。

我が國は經濟上誠逼迫せる境遇に陥つて居ますけれど、國民の精神さへしつかりして居れば、決して悲觀するには及ばない。國民精神作興の詔書にあります精神の剛健といふことが何よりも肝要であります。獨逸の如き戰後再び立つこと能はざるやうにゐるだらうと、一部の人は疑つて居ましたが、なか／＼さうではない。奥國の



如きは、見る影も無いやうにあらうとして居ますが、獨逸は剛健な獨逸魂により相變らず頭をあけて居る。再び一大強國となるのはあまり久しい間を待たないであらう。我が國の狀態は悲境は悲境だが、獨逸とは勿論、英佛とも比較にあらぬ。宜しく堅忍持久剛健な氣象を以て國本の培養をはかるべきであります。

國本の培養をはかるには如何にすべきか。小我をすて、大我に就き、共存共榮の精神を以て、上下一致して國利民徳をはかるために、積極的に産業の振興を企圖するにありと思ひます。勿論今の日本の經濟ですから無暗矢鱈にはできません。必ず相當の調査と研究とを要します。例へば朝鮮に於ける棉花栽培の如き相應に有望であらうと考へられます。専門家の調査によるに、朝鮮の棉花は纖維が長く、印度産や米國産に比して遜色が無く、風土も之に適して居るのみならず、丁度我が國で需要する位の棉花を栽培し得る地面があり、年額二億六千四百萬斤位は優に出来るといふことです。此の事業が成就すれば、我が國の紡績會社は原料を自國より供給し得ることが出来、従來の多額の輸入を防止することを得て、非常に仕合せです。

其の外、天然の利用といふことに一層留意したらどうかと思ひます。此等のことに就いても、述べたいことがある／＼ありますが、長くありますから省略いたします。

そして今回主として述べようと思ひますことは、我が國民が勤勉勞働を一層神聖視して之を楽しみ、又消費節約につき、より以上意をはらふべきであるといふことであります。この二つは何人でも其の意味を體得すれば直に出来る事で、而も國本を培養するに、極めて緊要なことと思ひます。

近頃朝鮮人が内地に入りこんで、諸種の勞役に従事してゐる。これは必ずしも悪いことではない。しかし勞働は彼等のすべきことで、内地人の進んではいけないとして、安逸を貪るやうになると弊害が生ずる。勞働は神聖なものである。生ある者は皆働くべきであります。鳥獸蟲魚に至るまで皆生を保つ爲に働いて居る。非常の高齡の人と、幼者と病者とを除く外の人々は、少くも自己の生活に値するだけの勞働に服するが當然であります。勿論勞働には精神的勞働と肉體的勞働とがありませう。又將來の生活の準備的勞働もありませう。生徒の

勉強は私は將來の生活の準備的勞働と申したいと思ひます。以上のいづれにしても、其の勞働に熱心忠實に従事して、立派な成果を収むべきであります。其のうちには、たゞひ充分な成果を収め得ずとも、熱心忠實に従事すれば興味も自ら生じ、やむにやまれぬやうになつて來ます。そして三者の勞働は劃然と區別して、他を全く顧みないやうではいけない。準備的勞働をして居る生徒でも日常の生活につき、肉體的勞働に服する必要もあり、又精神若しくは肉體的勞働に従事して居るものでも、其の仕事の將來の爲に、準備的勞働(素養)に服する必要がある。米國は世界中に於て、最も肉體的勞働を神聖視する所で、大學の食堂に行つて見ると、多數の學生が給仕人になつて立働いて居る。又夏期の休業には、學生が色々の所に備はれて、來るべき學期の學費金を働き出すといふ者が、決して少くないことである。我が國に於ても、精神的勞働は勿論、肉體的勞働をも神聖視し、之を愛好する美風が漸次上流の一部の人の間に、起らうとして居るのは眞に喜ぶべき現象だと思ひます。私は或寒い朝、同僚と二人で登校しようとする際、女學校の卒業生が、町中を車力をひいて、わるびれた風もなくかひなく物を運んで居るのを見たことがあります。其の人はさう貧しい身分の人ではなかつたので、私等二人は全く感心いたしました。誰でも皆かうすべきであるといふのではない、かゝいふ精神が何ともしはれぬ程嬉しかつたのです。我が日本を培養するには、かういふ心がけの婦人が大切だ。かういふ實質剛健な婦人が必要であります。常に華麗なる衣服に身をつみ、虚榮に憧れる婦人、これは此際禁物であります。

さて勞働はよいといつたことで、何のあてきもなく、しても駄目です。自己の能力資力を考へ、周圍の事情を参考とし、而して其の仕事の價値如何を察し、種々の方面より研究調査の後、必ず其の目的を定めて取りかゝるべきであります。然らざれば徒勞に終ることがあるのみならず、時としては取りかへしのつかぬ損失を招くことあります。重大なことはいふまでもなく、些細なことでも、豫め計畫を立てるといふことが大事です。およそ事あらかじめすれば成り、然らざれば敗れる事が多いものです。而して一度目的が定まつたなら、鞏固な意志を以て必ず之を遂行せねばなりません。剛健な精神はこゝにも必要です。日本の婦人は忍耐強いといはれますが、こ



それが成功の本です。少しくなしては倦み、倦みては中止するやうでは成功する期は、いつまで待つても参りませぬ。古來の成功者は悉く忍耐の結果で、忍耐力があくして成功したものは一人もありません。ナイチンゲール嬢が博愛の事業に成功したのも、コロンブスがアメリカを發見したのも皆耐の賜でした。本居宣長先生が古事記の講義を完成されるには、三十五年か、られたと申します。先生も人間です。あのむつかしい古事記を研究されるには、幾度か筆をちぎって、難解なのに長歎息されたでせう。しかし先生は鈴を鳴らしては悶を遣られ、決して挫折されなかつた。この忍耐の結果が古事記傳となつてあらはれたのです。

それから労働する時間は、専心一意其の仕事に従ふと云ふことが何より大切であります。お裁縫するにも、人と談話したり、居眠りしたり、綿をながめたり、してははかばかしない。單衣一枚が二日も三日もかゝつては困るではないか。さればとて早いばかりが無効能ではない。五針も縫はねばあらぬ所を二針ですます。それでも固る。戊申詔書に「忠實業ニ服シ」におほせられてある。忠實であれば、粗製にも濫造にもなりません。内國産でも、外國産に劣らないやうになり、外國に輸出しても決して信用を墜すやうなことはありますまい。

いつたい我が國人は模倣は上手だが、改良を加へるゝか、發明發見するゝか、創造するゝか云ふことは、どちらも不得手であるやうです。これは仕事に興味を持たないといふことから、來るかとも思はれますが、労働にしても、傳統的に繰返して工夫を凝さない。中には學校で學んだ事でも活用しないで、學校は學校、實際は實際云ふ風なやり方をする人もあります。何でも學校で學んだ事は學んだらしいが、面倒くさいから從來のまゝ、にすゝ。それでは學校に來た甲斐もなければ、生活の改善もできない。もつゝ仕事其のものに興味を持つて工夫を凝らし、労働がいきめゆくやうにしたいものであります。又學校と實地生活と結びつけたいと思ひます。

勤勉労働するには、無駄の時間をはぶくことが大切であります。やくにも立たぬ雑談に耽り、井戸端會議に大切な洗濯物や炊事のことを忘れるゝきは、自他共に無駄な時間を費すことになりすのみならず、時としては第三者の人に對しても、思はざる迷惑をかけることになります。又日本の家庭には規律がない。家族團欒はよい

けれど、規律が無ければ、勤勉労働ははかばかしない。徹底的に行きかねる。できるならば將來は家庭内に於ても大體でよいから時間を定めておく方がよいのであります。

婦人の仕事もかゝり多い。育児、炊事、裁縫、洗濯、清潔、整理整頓、奉養、看護、交際、一家の經濟等々あけるに随分多い。家族の少い家庭はさうでもないが、多い家庭では、これだけでも容易なことでは無いのであります。そこで此等のことを處理するに、相當に工夫を要する。さうでないに大切な事を落したり、無駄な時間と勞力を費したりして、仕事がいきめいかまいやうにあるからであります。しかし婦人の仕事は多いやうで昔の婦人の仕事に較べるに少くなつた。昔の婦人は綿を買つて自ら紡ぎ、自ら染め、之を織つたものである。その婦人は裁縫するだけである。都會では水を汲む世話もない、薪を取つて火を焚きつけるわすらひもない。それに較べると、昔の婦人は骨折つたものである。さういふ事を考へると、家庭によりて、婦人の仕事には、餘裕があると思はれる。これを此の際如何に利用するかが問題である。勿論前にあけた婦人の本務は充分改善を加へて行く必要はあります。之をおいてする必要はないが、それを妨げない範圍に於いての話である。私はそれを第一に生産方面、第二に讀書方面、第三社會奉仕方面にむけたら、さうかゝ考へる。其の中生産方面に最も力を注いでもらひたいと思ひますが、それには先づ家業に精勵するがよい。例へば農業家であれば其の方面に、商業家であつても同様です。それから副業及び内職の方面につくしてもらひたい。即ち養蠶、養鶏、養豚、養蜂、機械製茶、麥稈真田、蔬菜栽培、椎茸栽培、裁縫請合、紙箱張り、袋張り、麻絲つむぎ、手編レース等色々あります。埼玉縣熊谷地方では、手編レースの内職が行きわたつて、大抵皆するさうです。手編レースの全國の一ヶ年の輸出高が十餘万の内、半分以上はこの地方の産出にかゝるといふ事です。五萬圓以上の國家の利益を増したの、たしかに内職のお蔭で、なかゝあなざられませんか。又たさび如何程少額であつても、一家の經濟を助け、一國の富を増すことであれば尊いこと、思ひます。中には副業や内職は収入が少いから、馬鹿らしくてせられぬといふ人がありますが、これは考の足りないことで、如何程少額でも、徒手遊食するより遙によいことであり



ます。孟子には、「五畝の宅、之に植うるに桑を以てすれば、五十の者以て帛をきるべし。鵝豚狗彘の畜、其の時を失ふこと無くば、七十の者以て肉を食ふべし。」(梁惠王章句上)とあります。讀書方面に於ては、道德宗教藝術等につき研究して品性の修養をはかり、一層立派な人格をつくりあげるやうにしたいと思ふ。前に申した通り經濟のみに注意して他を顧みないではいけない。藝術宗教道德によりて、心を和け心を正しくしうるほひのある人生をつくるべきである。それから科學や職務に對しての研究も必要であります。これらが經濟と結びからんでほんとの國本を培養することに成るのであります。社會奉仕の大切な事は勿論です。經濟に注意するからして我利我慾に流れてはなりません。社會公衆の利益の爲には、一身を犠牲にしてもつくすといふ美しい心があつてこそ眞人間であります。從來婦人は兎角ひつこんで遠慮がすぎたやうであつた。しかし上代の婦人はかゝる活動したものである。謙遜は婦人の美德だが卑屈はいけない。自己一身のことのみ思はないで、社會公衆の爲大につくしてもらひたい。男子と共に日本の背負ふだけの元氣と義氣があつてほしい。處女會にも、同窓會にも、母姉會にも、ごし／＼出席して世話をしてもらひたい。將來は家の女たるは勿論、社會國家の女としても働いてもらひたいものであります。

勤勉労働と共に必要なるは消費節約方面のことでありませぬ。如何に主人が働いて収入を増しても、副業、内職により、如何に婦人が一家の經濟を助けても、消費の方面で節約を計らなければ駄目であります。此の故に主婦たるものは消費節約につき最も重大なる責任をもつて居ります。又一家の人々も此點につき充分なる注意をはらふことが大切であります。随つて國本を培養するには、最も關係のある事です。消費節約につき、最も留意せねばならないことは、有用な事と無用な事を分別して、有用の事には、適當に支出し、無用なことには、支出せぬといふことです。禮儀は必要であるが、虚榮の爲に無駄に支出するを云ふ事は大に改良せねばならぬことでもあります。衣食住皆其の通りです。お嫁入りには、平生いりもせぬものを三重四重にもつくつて箆筒にしまひおくなどは、第一に改善したいものです。此の點は山内一豊の妻のやうにしては、ごうかと思ふ。親からは、つくつて

やらうといはれても、教育のあり、考のあるものは、意見をたて、おく必要がある。さうなれば之を親達も必ず納得されて、むしろ悦ばれはせぬかと思ふ。勿論婚禮は一代の大事ですから、禮儀も考へ、又自分も考へなければならぬ。しかし日本は婚禮の時に、衣裳に澤山の費用をかける處は他にほんどんご無いといふことである。兎角婚禮の時のみならず、衣裳に金錢のつかひ様が多くはないかと思ふ。それに和服、洋服と二重生活をしてゐるからたまらない。今日に較べると舊藩時代は非常に質素であつたといふ事でありませぬ。近頃はそれに較べるより華奢です。大いに質素にしてよい。それには男子も女子も質素な衣服を愛好するといふ氣風をつくりたい。本年本校の同窓會や、刺烹講習會には、卒業生一同が銘仙以下の着物をせられにのは、この氣風をつくる上によいことでありませぬ。各地の處女會をめぐり、かういふ申合せをして、着物は勿論、頭髮の飾、履物まで質素にする氣風をつくるやうにしたい。婚禮の時の衣裳についての申合せもよいと思ひます。着物がよいからとて必ずしも容姿が美しく見えない。それよりも、美には調和といふことが大切ではないかと思ふ。牡丹、芍薬よりも、竹外の梅花に美を感じるではありませんか。

食物でも同様です。保健食料、蛋白質一〇〇グラム(約二十五匁) 脂肪質二〇グラム(約五匁四分) 含水炭素四八七グラム(約百二十八匁) (普通の入一十二匁より十四匁の體重を有する人を標準として) (醫學博士、額田豊氏の著書による)を得るには、高價なものからであつても、安價なものからでも充分に得られます。奈倉山口高商教授の獨逸觀察の實話によると、獨逸人は粗末なものを食つて一所懸命に働いてゐる。其のため獨逸の復興も著々と其の緒についてゐることです。國民たる吾々の大に參考すべきことと思ひます。日本婦人は、もつと食物に就いて趣味を持つて、食物の種類につき各營養價を研究して、調理するやうにしてほしい。此等につきはしく述べれば長くなりますから、額田博士の「安價生活法」政教社發行代價一、三〇、同博士の「新生活法」實業之日本社發行代價一、三〇を參考して下さい。住居してもなるべく簡單で、衛生にかなひ、而も趣味があるやうにしたものであります。高くて複雑なものには及ばない。



かくして、衣食住の三方面につき出来得る限り節約をはかるやうにしたい。日用品でも、學用品でも、外形の立派なるものよりも、實用に適するものを求め、又努めて物品の整理保存手入に留意して、粗末にしぬやうにしたいのであります。鉛筆にでも氏名を書きおいて棄てぬやうにし、短くあるまで使用するやうにするがよい萬事が皆かうあつてほしいのであります。何物でも、自分が造ると考へてみると、決して粗末にならぬ、又何物でも天物だ、國家の寶と思へば、決して無駄に棄てることは出来ないのであります。今日の日本の富豪といへば三井家を推しますが、其の先祖には、良妻が居て、非常に節約したものです。廢物利用にまで細心の注意をはらつたものです。かうして三井家の基礎ができたのであります。

消費節約によりて、得たる金銭は、貯蓄して他日の用に供すべきです。それには「入るをはかつて、出づるを制す。」で豫算を立て、必ずいくらかの餘裕があるやうにし、之を蓄積すべきであります。一家はむつみあひて、この豫算範圍内に於て、生活するやうにせねばならない。それは主婦の大なる手腕に待たなければなりません。國家のことは家であります。主婦が一家の經濟をうまくやるさいふことは、即ち國家に御奉公することでありませぬ。國本の培養には、主婦の力にまつことが大であります。單に主婦ばかりではぬい、一般の婦人の力によらなければなりません。

齋藤鹿三郎といふ方の著された乃木希典の妻といふ本を讀んで見ますと、乃木夫人の性格を題して、一番最初にかういふことが書いてあります。

一、能く働きたる娘  
一、質素なる娘

と。かういふお方であつて、乃木大將の妻として、最期まで夫と共にせられた。之を考へますと、勤勞質素といふことは、經濟上ばかりでなく、道徳上に於ても、極めて大切なことが分ります。この故に山鹿素行先生は武敎小學や士道の中に於て、此の方面から論じて居られます。燕居休暇の日多ければ、則ち其志怠りて家業を慎ま

殆ど禽獸に類す。とか、大學に曰く、小人閑居して不善を爲す。至らざる所無し云々とか、惡衣惡食を恥ぢて、居の安きを求むるは、則ち志士に非ずとか、武敎小學だけでも、いろ／＼論じてあります。

徒然草によりますと、北條時頼の母は、松下禪尼といつて、非常に偉い人であつたらしい。子の時頼を招くに障子の紙の破れた處ばかりを自ら修理されたといふことである。天下の執權もいふ人の母としては、實に勤勞を重ねられたではありませぬか、又節約を尊ばれたではありませぬか。此の精神は子に移つて、一方では時頼が來客大佛宣時に對して、酒を飲むに看が無いといふので、くりやから味噌の残つて居るのを見付けて來て、看にしたといふこととなり、一方では謠曲、鉢の木にあるやうに、晩年になつても、諸國を行脚して、民の辛苦を察するといふ勤苦もなりました。此の質實、剛健、勤勉、努力の大精神と、蓄積しておいた經濟力は、後年の一大國難、元寇に於て、遺憾なき結果をあらはしました。

嗚呼、只今の人達は、どう覺悟を持つて居るでせう？ (大正一三、一一一五夜)

母たるもの、夫のみじかき所、惡しき事などを其の子に語り聞かせて、よろこぶもの間に有り。之は正しくその子に不孝な教

ふるなり。(中江藤樹一鑑草)

士君子も困窮あれば、惡念を生じ惡事をなして、身を害し家を亡ぼすに至る。儉素にして困窮せざる様に心がくる。こと立身の道なり。(大田錦城一梧憲漫筆)



# 嫁ぎゆく妹へ

特別會員 安永スエ

きけば例のお話が纏つて、いよいよ黄道吉日を選んでのお奥入に、是非私にも姉として列席して呉れどのおたよりに接した時の私のよろこび、實にひそかに祈りに祈つたもの、成功したうれしい心持にひたる事が出来ました。其うれしみの情が、それから三日経ました今も尚ほしと胸にせまり来る高鳴りでございます。

思ふて下さい。素直さん。私共姉妹は早くに父を亡ふてからの母上の御心勞を。其一つ一つがああ血色のよかつたお顔の一皺くきにぎざまれこまれて、日一日それが深くなつて行くやうにおがまれるではありませぬか。總じてお前様は、名の如くすなをに生れられたにちがひない、それは日頃の振舞、もの、いひやうから、私の妹にしては勿体ない程心の優にやさしく同情心のふかい持主だとおもひます。

よくお前様は頑なる父に仕へて母人を勞りて、父上の黄泉の旅へ趣かる、まで其身を忘れての御孝養を盡されしこと、さては義理ある兄上へ對しては弟妹の道を守られて、いつもすが／＼しく振舞れるお前様を此の家から他家へ移すのは、いかにも惜しう思ひます。お前様といふものを奪ひ去つた母の家の淋しさは今かう想像するに余りあります。然しかう申上げたにて私は衷心お前様の結婚を祝福して居るといふことは、いはずもがな事で大讃成者の發頭人です。あ、うれしいです。安神しました。肩荷が下りた輕やかさを覺えました、それとに私はベンをえる氣に向はせられました。何故でせう。唯一向に姉の線言として無下に却けなさりはすまいと、あさい過去五六年の經驗から感じたことを、今幼な馴染のある鳳雛小富士の見ゆるお茶の間で、小さる机かこんでお話する氣持でかきながしますから其のおつもりでおよみ下さい。またしてもお前様のなやかなおたいこ帯に、櫛目も艶やかな高島田のお姿が勞働してゐます。さう思ふと歸心矢の如しの譬にもれず、一目散に母の家へ飛び込みたいような氣がします。おもひなしか、母の乳くさい感さへわき出しました。

素直さん。近き將來の令夫人。おき、下さい。姉のたのみを。女子は三界に家なしといひし昔を強ちに高唱する私ではないが、今の女はともする。乾燥浮華の弊に陥り易いさきがけ者だと思ひます。そして物事に動し易い。即ち雷同じ易くて一つの方針がない、あつたにしても時により事にあたりて只わげもなく、砂丘の小屋のやうにぐら／＼ぐら／＼つく、これは女とばかりは限らない事でも論男の中にも女に似たる男もありませんが、概して女性に多いやうに思ふのです。最も賢明に、最も忠實にあらねばならぬ女が、自由と放縱をばきちがへたものが多くありつゝ、あるやうに思はれるのは歎かましい極みです。それやこれやを思ひ合しますと、昔を今に移し植わたい感もなきにしもあらずです。されば古のみを尊しとするすね人ではないつもりです。

兎角人間は物質的傾向にさらはれ易くて、精神的修養が忘却される、殊更に家政を掌る主婦の位置に立つと、家庭に對する雑務に追はれて、此方面が蔑にあり勝になるのは痛歎に堪えない一つの事柄です。勿論夫たるべき人により、又は其職業により、或はお互間理解の有無によりて大差あるにはちがひないですが、一般婦人の修養の機を逸するは事實の證明する所です。かゝる事からして修養あるべき婦人の、住々にして世俗の噂の種となられしとは熟知の事柄で、今更蝶々するまでもありません。私は是等婦人に向つて敢へて叱論するつもりではありませぬが、一旦嫁かれしからには、先方のお家に對して従前の我家に居するが如き態度を持するは當然の事と思ひます。何もお前様に對して更めて殊更めくことを申上ぐる必要はないのです。何故なればお前様は私が女といふものに對しての期待を裏切られたいと信じて居ますから。けれどやつぱりいひたいです。老婆心どてもいふのでせうか。要するに此度嫁ぎゆかる、家がお前様の永遠の住家です。そして郷里です。永久に活くべきお家ですもの、その生を終へる、お家です。お前様は皆老の契を結ばる、夫に對して又其家人に對しては、永遠に良妻であり、良友であらねばなりません。誠意誠心の努力は必ずす花のたよりを齎さずしては置きません、安じて疑はざる態度もて感謝報恩の業を持して下さい。

然し大海の中時には暗礁なきにしもあらずの譬にもれず、お前様のふみこまる、社會てふ所も易々たるもの



ではありませぬ。いく度か袖に涙を押しかくす時も来るでせう、其時こそお前様を試練する試金石です、それは意志と思想の薄弱にして怠慢なる者には、正しき道が見出せないといはれて居るではありませぬか、お互私共は修養時代の集合者です、不満不足は世の常です、しかもこれが當然の事だと思ひます。己にのみ信ずることの過ぎたる時は、傲慢といふ最も卑しむべき不遜の態度を現象させます、これは進歩といふ大切なる芽を啄む毒虫です、よろしく自己に反省して、最善の自己本務責任を遂行せられん事を祈りに祈つて止まざる次第です。

お前様も日には幾度か鏡に面する、こと、思ひます、其度にお前様のお顔を覗して、其心持の晴れやかにあるやうおつとめ下さい。もしも鏡の面かくも其の時には、お前様のお心に悶と恐があることを證明する一つの武器とお知り下さい、そして其悶と恐はお前様の履行さるべき道を、行はれない時におこる心の作用だと思ひ下さつて、速に心の中よりその影を追放さるることにおつとめ下さい。かくてお前様の永遠の住家を清く美はしくあらしめて下さい。世をしてよろこばせて下さい。是等はみなお前様の奉仕的努力の賜物より待つ外はありませぬ。私は或所で心の入れかへといふ事について聞きました事ですが、人々はみな煩悶を抱いてゐて、常に苛々として居る。何か一つの望が達すれば、又其上に望も望は際限なく募り行くことのお話でした。最も是等は私共が常に抱く事柄です。凡て人には感情利慾心理の念の三方面を有するものとして、唯其一方に偏せず此三方面の統一されてこそ始めて價值あるもので、人生をして意氣めらしむるものに足ると、實に然りで將來あるお前様にはお聞かせしたいと思ひました、よし蝸牛のそれに似たりとも、生ある限り人として、はた女としてつとめませう。何はとまれお前様のたつた一日しかないあの日にはまゐります、そしてお前様のあるによつて、淋しき母上の笑みたまふ喜に浴するのを光榮とします。

お覺悟はもうとく十分お定めになつて居るでせう、準備もはや整つた事です、いふまでもない事ですが母上の膝下にて、今一度最後の心の準備を繕ひてみて下さい。さらば御目にかゝる日をまちつ、  
咲かば花、散らば紅葉のうるはしく、己がつとめを成しとけてまし。

## 禁酒と女子

特別會員 上 利 テ イ

アルコールの効、害は、最早研究つくされた問題で今更説く必要はない。アルコールの滋養になるや否やは只分量の問題で其最少なき時に於てのみ、酸化して尿酸と水を生じ、澱粉脂肪と同じく營養の効が有る。しかし一度其量を過さば呼吸器神経系消化機等あらゆる機關を侵し、身体の抵抗力を弱める。大酒家は到底天壽を完ふする事不可能なるのみならず、理性を失はしめ犯罪の原因となり、經濟的には財を破り、其の害は單に其人の一生に及ばず、ひいて子孫に迄も及し低能者癲癇精神病者の原因となる。

かく恐るべき毒物なる事は誰しも知りながら、しかも食糧不足をさげぶ今日多くの米を犠牲として、此百毒の長の製造にあてられるのは悲しい至である。かうして日本人がアルコールに心酔する時、隣國の米國に於ては如何。富力は數等上にあるが、斷然禁酒を實行して國民の体力増進につとめて居るではないか。しかるに思想惡化し、經濟的にも危險極る位置に居る日本人依然としてしかるべきか。

めざめよ。

しからば如何にして此惡魔の撲滅にあたるか。そは生來忍耐、愛を美德とされ居る婦人の力によるのみである。女子結婚せば誰しも夫、子供の幸福を願はぬ者は無い。しかるに其最愛なる者に、すべての幸福をうばふ惡魔を笑顔で進む事を従順なりとはもつての外の矛盾である。罪悪の至りである。しかし一度此惡魔に侵されるや、仲々それを捨てるは難い。されば眞の愛有る母は、幼き頃より其有害なるを親切に説き聞かしめ、絶對其味を知らしめざるに務めると同時に、如何にせば家人をして幸福ならしめるか、満足を得るかを常に心にいただき家庭をして何等も春の氣分を失はしめざるに心を掛べきである。

始めよりアルコールを愛好する人は無い、家庭の淋しさを忘れ、繁雜をのがれんが爲暗、所に足を向けるか又



は醉により苦痛を忘れんとするのが事の始り、されば其罪は男子のみならず婦人も過半を荷ふべきで有る。かく考へたる時國を愛し家族を愛する婦人、幸福より與へられたる愛、忍耐の力を持つて、此惡魔撲滅にあたれ。弱く見へて強きは女の力、其力によらずして他に撲滅の方法はないのである。

## 萩へ来てから

柳原良助

丁度二年八ヶ月になる。もつと經つてゐる様に思ふけれど、指を折つて見るとやつぱり二年八ヶ月、前の事はだん／＼忘れて行くので、新しい萩の印象だけが頭の中を占領して、私の今迄の大部分が萩であつたかの様に思ふのであらう。

いよ／＼萩へ来るに定まつて、おほろけを記憶の中からはつきり浮んだのは松陰神社と、夏密柑だけだ。自働車が黄色な橋の上にさしかつた時、運轉手が「これからが萩です。」といふ。横から首を突き出して見る町通りは可なり廣い。私の住む萩は、だいぶんいく町だなと思ふ間に、自動車もままつた。運轉手は私をそこに下して、丁寧に道を教へてくれて、「私の會社は電話何番と何番ですからどうぞ御頼みます。」といふ。始めから終りまで親切な運轉手だ。

手に提げて居た荷物を郡役所の前の餅屋に預けて、高い松をめぐりて女學校へ急いだ。「萩へだけは行くよ。あんな不便な所がさうなるか、外ならどこでもい。」といつて熱心に不賛成を唱へた友の期待を無にして、今此地に乗り込んで来た私は、八分の自信と二分の不安をもつて、女學校の門をくゞつた。玄關の硝子戸を明けると、「美しい學校だ。」と。廊下は漆の様に光つて居る。「と思つて刺を通じた。私の居た

學校も、郡下では美しい學校であつたけれど、此の學校とは比較にならない。靴で上つてもいゝのか知らん。」と思ひながら上りかける。給仕がスリッパを出してくれた。

翌十一日始業前講堂で新任式があつて、はじめて皆さんと顔を合して、完全に此の學校の先生となつた譯だ。二時間目に理科室で二年の生徒に鳥類の統括を教へたのが授業のはじめであつたらう。

晝食に寄宿舎の麥御飯をいたゞいて、長澄先生に誘はれて運動場に出た。驚いたのは運動の盛な事であつた。萩の女學校といふから、やつぱり城下のお嬢さんを聯想して居たのに、四年の小茅さんや三島さんや、長嶺さん達が赤い顔をして元氣に庭球をやつてゐた。あちらでも、こちらでも陣取りが始まつてゐた。私は前の學校と同じ様な氣持がして、それからといふものは、皆さんの中に入つて陣取りをしたものだ。二年の阿武さんや秋山さん達には随分追ひまはされたが、あの頃はまだ私の方が速かつたらう。

二三日して伊藤先生から萩名所を案内して貰つた。驚いたのは、到る處に燈籠がある事だ。だいぶん前に修學旅行に来て、「一錢出したら、こんな燈籠を二つくれたぞ。」とか、「笑つたら燈籠を五つ呉れた。」等いつて、同級生が燈をかかへてかへつた事を思ひ出す。あるに繼子らしなのだ。

五月の十日だつたか大聖院にお参りした、お殿様の菩提寺だけあつてすばらしいものだ。私は今迄こんな立派な御墓所を見た事はない。きこにも余り多くはあるまい。圓頂黒衣の坊さんが、今でいふ黒のスカートを、白の衣の上にあて、紅葉を集めてゐる様な詩的な場面を描いて、私自身が其の繪の中に入つた様な氣持になつた。萩の環境はい、毎日接する生徒の快活な態度もい、かうして萩の印象は美しいものばかりであつた。

二學期に入ると直ぐ十周年記念事業に着手する事となつて、中々忙がしいのださうな。私は所謂、晨に星を頂いて起き、夕に月を踏んで歸る体の仕事にはなれたものだ。其忙がしいのが寧ろ楽しかつた。それでも南園會報の印刷が思ふ様に行かなかつた事と（これは編輯は大部分は池上先生がなされたのだが、活版所等を私が照會したから）、繪葉書が間にあはず、下關くんたりをうろつきまはして居た事との二つは、最初の大きい心配事だつた



第一回の卒業式が来た。私は卒業生達がぎんな風に校門を出て行くか、卒業してからぎんな態度で學校を見るかといふ事に可なり大きい興味を持った。併し私には人間といふ事があるあまりよく解つてゐない様な氣がし出して来た。修養が足りないからだ。

新學期になつて間もなく家をかはらねばならなかつた。萩で困るのは家のない事だ。ある事はあるが氣に入らな様な家のない事だ。始め學校で御世話になつて、それから小橋筋、住宅、又小橋筋、五間町、雜賀下り、今の家に落ちつく迄六ヶ町の移轉、まるで家を探しに萩へ来た様なものだと思つた。

學校の仕事には段々なれて来る、馴れてくるに上手にゐる。上手にゐるとごまかしが出る。やつぱりなれない方が失敗はしても眞剣味はある。

夏休みになつて住吉神社のお祭りに御まゐりした。熊谷町一帯にすばらしい店飾り、岩見重太郎もあれば辨慶半若丸もある。聞いて見ると十五年とかに一度宛引受番が来るので、番があつた町がこんな催をするのださうな。お城下時代の遺物かしらん。

十一月の金谷天神のお祭りにおまゐりすると、刀をさして鞋をはいた人が、足をキツクリ／＼として、槍の頭へ髪をつけた様なものを、ハローと何かいつて投げてはゐる。郷里に近い柳井にはあんな事がある様に聞いたが、見たのは始めてだ。封建時代の武士的氣質の中の優美さが偲ばれて面白い。

二年目はかうして一年日程の強い刺撃がふくして過ぎた。馴らされたのだ。  
三年目になると一層萩の地になれて来た。馴れて来るに色々様子がわかる。私はやつぱり様子がわからぬ方がいゝ。あれやこれやと無意味の様な考慮を費して、氣兼ねのある生活をする事はいやだ。素つ裸で行く技巧を用ひぬ。無用意の様であるが、つき當る。さうするとそこに美しい道が開かれて来る。眞實の響は尊い。勿論失敗の責は自分で負ふ。さう考へると世の中が簡單で、あつさりして居て、如何にも氣持がいゝものになつて来る。私は明るい世の中がすきだ。

一學期にゐると何や彼で忙がしかつた。それに日が短いからぐ／＼して居ると直ぐ電燈がつく。私は電燈のつく前後の萩がすきだ。晝間は單調の、山と家と川と燈煙、山と家と川と燈煙の萩も、指月の左に太陽が没する頃から、たまらなくよくゐる。松本の連山が夕靄につ、まれて、明倫の松並木が余光に映れて浮き出たあたりから、新堀川一帯の家並みでも、面影山をバックにした寺々の屋根の形まで、晝間の萩は似もつかぬものになる。若し阿武川に添ふて歩を運んだらば、萩の天恵の豊にひたすら感謝したくなる。朝は一層氣持がよい。殊に雨あがりの川上の山の皺と、谷をつ、む霞の調和は北海の傑作にもあからう。さちらかといへば朝寝をする方の私は、朝に對する親みは、いくらかうすいけれど。

萩の歴史を尋ねるのもすきだ、ゆつ／＼とした身でなくても杖をひいて見たいと思ふが、環境の自然に今一つすきなものがある。それは日本海の波だ。風等ふいて居ないと思はれる夕でも、時々ドーンといふ波の音が聞ける。はるかかの女海から寄せて来た波だ。あの波の音を聞くに飛び出したくなる。渾身の勇を奮つてぶつつかる夜光虫が青色電燈の様になる。あの光景がすきだ。

晝間出て見ると、紺碧の海から、まつ白い波の花がわき出して来る。ドーンと打つて、ダア／＼と松の根頃までよせてくる。あのくるりと巻き込む波の中に飛び込むと、龍宮が見られはせぬかさへ思はれる。白い波がしらが、菊ヶ濱の松の間にバツと浮き出た時は、誰でも「波が／＼」を連呼する。

三年八ヶ月、私はさう指を折ると又小さい自分が眼についてくる。愚痴は眞理の表現だなんて、愚痴なんか並べる事は嫌ひだが、人と自然の、大きい恩恵に包まれてゐる自分を見るに限りなく小さい。歴史の大と自然の大と、それに現在に處する人心の大との調和が甘しつくりとあつた調和が、やがて眞實の大萩町の建設になるのだらう。(一九二四、一一、一九)



文の園



作文

櫻の落葉

本一 山縣ウメ

はらくくく淋しさうにお庭の櫻の葉がちつてゐる。いくらはいてもはいても、また後からおちて来る。櫻の葉の生命はみじかい。散り行く悲しみをせめての思ひやりに、下の枝に止つてゐるものもある。落ちた葉は風の吹くたびにこそく話をする。きつと木についてゐた時のたのしい思出をかたつてゐるの

であらう。

はく手をやめて、椽にこしをかけて見てゐる。せつかくはいた後に蟲喰ひ葉が、二三枚つれだつて散つてきた。私はまた箒をもつて庭に立つた。あまからく風のふく度に散つてくる。いくらはいてもはてしがない。ふと見上げる上上の枝の方は葉のついてゐない所もある。ちつてしまつたのであらう。

雨降る日

本一 廣瀬ミヨ子

灰色の空からは絹糸のやうな細い雨がしとくしと静かに降つてゐる。

向ふの山は雲繪のやうにほんやり浮いてゐる。田の稲はすつかり刈取られて、面白い形のどさかた、あちこちに点在してゐる。四方の木も大分色づいて、田のあぜ道の草さへも黄色になつた。柿の木はもう葉をみんち失つて、赤い柿の實が五ツ、六ツ淋しさうに残つてゐる。向ふに見ゆる白壁も淋しい。

こんもりとした森は此の寂寞をたへてゐる様に見える。刈り取られた田の面には人影もない。

友を慕ひて

本一 能美美都代

草葉の蔭で鳴いてゐた蟲の聲ももう聞かれぬくあつた。秋と呼ぶのも後少しばかり机にすかつてぢつと窓越しに田圃を見ると、百姓がいそがしさうに、稲こぎをしてゐる。稲の刈られた後はもう背々とした小草が青ビロウドを敷きつめた様に一面に生ねてゐる。

去年は學校の歸りに、あの田の中に入つて遊んだりはずせに上つてまわつたり、學校の裏山に登つてしじを拾つたり、寫生をしたりして、あつかしい友と過してゐたのだが、今年はまだ學校が違つてゐるし、そして

歸り道も田が少ししかないので、あんな面白いことは出来ない。あの頃のうれしかつた時の様々なことを思ひ出して見ると北の空の友があつかしい。

初秋の午後

本一 村田貞子

秋の光がお座敷一杯に入つてゐる。椽側では妹が友達と人形ごっこをして面白さうにあそんでゐる。雑誌から目を離して空を仰ぐと、一點の雲もない。お庭は白赤大小それぐの菊が咲かれて大へん美しい。名の知れぬ小鳥の二羽梅もぎきの枝にちつと泊つてゐるが思ひ出した様にヒョッと上の枝に飛びうつつた時、葉がバラ／＼と落ちたので他の一羽は驚いた様に飛びあがった。續いて一羽も飛び立つて森の彼方へ飛んで行く。.....

あたりは静か。その静けさの中に大工のかんゐの音が聞ける。

「綺麗でせう。」とお姉様が眞盛りのコスモスを片手に、片手にきばさみをもつて出られた。

「あなたのお机にさしてあげませうね。」と云ひつ、



椽にこしをかけてチヨキンく、花の枝ぶりを直して居られたが、つゝ立つて奥へ行つてしまはれた。弟が歸つたと見えて奥から賑かな笑聲が聞ける。梅もさきの葉は頼りに散る。

### 朝

本一 松田 静

日曜日云ふ嬉しさにいつもより早く起きた。障子はまだ薄暗いが揚子をくはへて裏へ出た。うすら寒い風は、大分色づいた蜜柑の枝から枝へ渡つて行く。向ふの山の端に曉の星がたつた一つ。垣根には小さな白菊が一本、折らうかしら？、いや折るまい、等しい思案をしゝながら顔を洗つたが終に其儘書齋に歸つた。私は直ぐ夜具を納めて、机、本箱、障子を綺麗に掃除して花瓶の水をかへて机の前に坐つた。何だか重荷をおろした様な氣持がした。よく眠つて居た妹は眼を覺して居た。今のお掃除で目がさめたのか。朝食にはまだ間がある。私は昨夜の読みさしの本の頁をくつた。

### 寒 日

本一 梅木セキヨ

朝から降りつゞく大雪は、夕方になつて一層はげしくあつた。けれども弟たちは「雪やこんく、あられやこんこん。」と言つてさわぎまはつてゐる。大根なますを言ひつかつて手にもつと、手がいたい瘦我慢をして一本だけ料理したが後はだめ。爐の前に立ちふさがつて思ひ出したのは、此の間習つた雪の日やあれも人の子、樽拾ひの句である。ほんたうに、今日のやうな寒い日に素足で樽なんか、拾ふ人はどんなに寒いだらう。それに引きかへ私もはちよつと冷たいと言へば、すぐ火にあたる。かゝるがへて見るまことに、はづかしい事である。さあ料理しよう、再び料理をはじめると、ふしぎにも今まで冷たいと思つてゐた大根が、少しも冷たくなくて、わけなく料理された。始めは冷たいと思つて切つたので大へん不揃ひであつたが、後のはきれいに揃つてゐた。それで私のかんがへた。私は大根に教へられたのだつた。

### 秋の夕暮

本一 小田 綾子

私は舎の椽側に腰掛けて作文を綴つて居ました。つめたい風が頬を撫でては通り過ぎます。

フト耳を澄す

きりきり〜がしや〜〜〜虫の音がかすかにきこえます、何だか訴へて居る様です、晝間はまた夏のやうに暑いのに夕方はまるで別世界です。私はあの虫の聲がきこつてなりません、尋ねて見やうかしらんと思つてゐる。月が目につきました。

空を仰ぐと松の舎の前の松の木に月が半か、つてそれは綺麗でありました。繪が下手で、とても筆にはか、れないが、何ともいへない程綺麗でした。私は神様の前に居る様な氣持になりました。

### 落 葉

本一 中村 みね

外庭のお掃除で今折角塵一つも残さず掃いたこの土

へもう二葉三葉と散つて来ました。

「ほんごにあなたのお命は短いのね此の春私共の入学した頃には青々茂つてゐたものが、蝶と共に喜び暮したのも束の間もう散つて行くのね。」

秋の紅葉の美しさは春の花にも劣らない美しさがある。野も山も麗しく色彩して私はあの色がほんごに好きでございます。

散らしてしまふのは惜いけれども散るべき時に散つてしまへば來春は又早く芽を出させよう。

### あてちがひ

本一 光國 榮

雪が降り出して大分間があるのに、この屋根を見てあまり積つてはなりません。けれども、家々は皆寒さうに戸が入れてあります。私の家もあまり寒いので早く戸を入れました。そして夜になればあるほど、寒くなつてゆきます。私は妹と云ひ合ひごつこをいたしました。私は雪が積るといひ、妹は積らぬと云ひます。私はこんな寒い晩にはきつと降ると思ひました。朝起きて見ますと、積つた様子はありません。雪も



降りさうにもありません。却つて昨日よりはよい天気でした。昨日のかけ事がすつかりくるつたので、私は妹に何かいはれはしないかと、妹の顔を見ない様にとしました。

### 雪の降る日

本一 北村敏子

あの綺麗な雪は、何處から降つて来るのでせう。雪が降ると、もう冬が来たのかと、思はれます。初雪なので、珍らしいございました。だん／＼と降つて、お庭のしばの上に、少し積りました。

寒くもありますが、私はうれしうございました。此の分なら、明日はきつと積るに相違ないと思つてみました。食事をすまして、庭の方を眺めますと、しばの上には、もう少しばかり積つてみました。

これからも、まだたくさん雪が降る事でせう。さちらを見ても、銀世界にあつた、あの美しい景色が見たいものです。

### 夜の出来事

本一 山田鷹子

店の方から番頭のいびきがグウ／＼ともれて来る。あたりは眞暗で、明り窓から僅かに月の光が投げ込まれてゐる。その時、臺所の方からミシリミシリと音がして来る。私はその音のする方に耳をかたむけた。いかにも盗賊でも入つて来るかの様。いよ／＼障子のそばまで来たと思つた頃、おそろしさに蒲團の中にもぐり込んだ。「てつきり盗賊に違ひない。」とふるへてゐるが、日本女子だ、負けるものか顔を出さうとしたりが出されない。姉を起さうかと思つたが、聲をかけたらずぐやられやう、起さずにおいたらばどんな事になるかわからない。さうしようかと思つたが、いよ／＼決心して「姉様！姉様！」と起したが、晝のつかれと夜のおそいので中々に目がさめぬ。隣の間の女中をおこしかけたがこゝもだめ、とう／＼泣き出したくなつた。

盗賊が首をつかまへはしないかとおそろ／＼「ねわや——」と呼んだとたん、ゴトンと大きな音がした。

るかと思はれる程の平和と暖さ、快感が得られるからです。

### 黙想

本一 大野イネ

私ふと目をつむつた。今日こそは呼吸の数をちがへまいと一所懸命で大きく呼んで大きくはき出す。今は黙想である。何も思ふまい／＼と思ふ。身のまはりには静かであるが遠くからつぎつぎに色々な音が聞えて来る。左手の山籠の方からは鶏の聲、かすかではあるがお寺の鐘のやうな音が風をふくんで来る。雀はチュウ／＼と止めなきなしに鳴いてゐる。と、こんどは下の廊下を誰か靴をはいたま、コツ／＼と校舎全部に響かしながら、さうも控所の方へ向いて行く様である。と、たちまち廻れ右をしたかしら、こんどは理科室の方へ向いて行く。先生では無いかしら。私は思つた。こんどは中の列のまはりの誰かがフウ／＼と大きないきをしてゐる。さうもNさんのまはりである。雀はまだチュウ／＼と鳴いてゐる。まだ時間はこないかしらん、と思ひながら、呼吸の六十七を数へた時、横の

### 秋ばれ

本一 富田文子

空はあくまでも清い。今朝の曇りぐあいとはうつつ變つた暖かさ。ほか／＼とし、小春日を思ひ出す。私はこんな日に日當りのい、芝生の上にねころんで、少女俱樂部を讀む事がだいすきです。それは丁度私といふものが、天國に吸ひこまれて居



廊下で、鐘がガン／＼と鳴った。

### びつくりした事

本一 最上綾子

學校から歸つて見ると、お母様があけものをしている。学校から帰つて見ると、お母様があけものをしている。学校から帰つて見ると、お母様があけものをしている。学校から帰つて見ると、お母様があけものをしている。

大層面白いから、一所懸命であけてみると、お母様が油を少し入れて下さった。其の油が煮わたつ頃、小さなお芋を一つ入れて見て居ると、あわがだん／＼上に乗つて、こぼれ出て火がもねはじめた。

「お母様／＼火がもねる！」と私は叫んだ。

お母様ははしりもどで何かしてゐたが、大層驚かれて、「早く早く青菜をもつていで早う。」と叫ぶしやつたが、私はまご／＼してゐた。

お母様は大急ぎで箱の上にあつた大根のなつばをもつて来て、濡つた手拭ひで鍋を下して、こんろの中へお入れになつた。其の時は火はもう消れてゐたが、「もしなつばをこるこまたもわだす。」とお母様がおつしやた。

本一 野村繁子

冬がおどづれくるにはもう間もない。晝間はさうもないが朝晩はかゝり寒い。今までは見渡す限り黄金色であつた稲田も、此の頃では、草だらけの哀な田と化してしまつた。上の電信線には、幾羽とも知れぬ、雀の群が刈取られた田を恨めしげに眺めて居る。向ふの田ではもう牛を使つて耕して居る。ふと見ると、牛の上には可愛い女の子が乗つて居る。こんな様は此の邊でなくては見られぬ趣である。

だん／＼と日は西山に傾いて来る。向ふの田の牛が一聲高く「モー」とないた。きつともう仕事にあいたのであらう。

方々の田から子供を負つたり、樂鐘をきけたりした百姓が歸つて来る。牛は主人に引かる、まま、すまほにつめて夕風が、顔をなでて行く。

### 作文の時間

本一 桑原ヨシ

あ、午後は作文の時間だと思ひながら階段を下りる

何ともいへぬ臭のする煙がもう／＼と湧き出る。お父様はそれを外へ持ち出して中の灰や、なつばをのけられた。又も火はもねたしたが間もなく消れた。私はあけはなされた臺所の庭の氣味の悪い煙の中できききする胸をおさへて立つてゐた。

### 銀杏の葉

本一 吉村タキコ

へいの前に干された洗濯物が、秋の日を俗びて白い煙か、ゆら／＼立ち昇ります。コスモスの一面散りしいた垣根のそばで、親鳥がコ、コ、と呼ぶと、あぶるい足つきのひよこが、四羽うれしうに飛んで来ました。「ほんどに暖い日だこ」ひとりでにさう思ひながら、私は裏庭の石にこしを下ろして、日向ほつこをして居ました。きこから落ちて来たのやら、黄色い銀杏が一葉、足元に落ちて居ます。あ、木の葉も散つて秋も大分深くなりました。指先で土間に「お正月」なご書いたり消したりしながら、淡い哀感を覺えました。

### 晩秋

ど、ほつと宿題にしてあつた作文のことに氣がつかました。それで博物教室へ急いで行つて机につきまじが、さうしても氣乗がしません。それで傍の人達に、「作文を作つていらつしやいましたか。」と聞いて見れば、作つてこない方もあるののでいくらか安心して、すぐに外へ飛出しました。

そして、バスケットボールをしようと思ひましたがさうなるもまた作文の事が氣にかかつてならぬのでクローバの上へ寝て、いい考でも出ないかと、ほんやり考へ込んでゐると鐘がなりました。

いやな様な、恐ろしい様な、おどろ／＼した氣持ちで教室へ入つて行きますと、先生も入つてこられました。さういられるかしらと、盗む様に先生の顔を見ますと先生は笑つていらつしやいました。うれしい様な、すまない様な氣持ちで頭をか、へました。

### 出張の夜

本一 長岡シズ子

あ、長い……まだ卅五分もある、九時には……眠くて何時の間にか目は小さくなる。炊事場の方はも



う後始末もすんだとみねて、ひつそりしてゐる。  
室から伏せて寝られもするが、舎監室ではさうもゆ  
かず、ほんとうにこまつてしまふ。

私共で何が困つたつてこんなにも困るものはない。昔  
の或る人は小錐を膝に刺して、眠りを我慢したと云ふ  
けれど、私はそれ程の事をするにもおよばないから唯  
膝を抓つて我慢する。

だがもうさういふ我慢しきれず、机に伏してそのま  
ゝ昏々としてこれぬ深い眠りにおち入つた。

フト遠くの方で自分の名を呼ばれた様な気がするの  
でバツと目を覚ますと、光子お姉様が笑ひながらぢつ  
とみつめていらつした。

あんなに永く休んだのに未十五分ある。その内にま  
た兩の眼瞼が仲好くなりさうになる。そうしてやつと  
九時になつた。

犬の遠聲が幽かに聞える。

白習の終りの鐘は夜の寂しさを破つて寄宿舎全体に  
リン／＼と響き渡る。同時に舎は騒しくな  
る。

かうして私の幸福な世界が展開されるのだ。

### 氣にかゝつてゐた雨

本一 小田文子

十月二十六日は、私達に三つてはたのしい、運動會  
でありました。

朝起きて先づ第一に、外に出て見ますと、よい天氣  
なので、すぐに支度をしてゐる内に、雨が降りまし  
たので、さうか、早くやめばよいがと、心配してゐま  
したが、ひびくふらふらかつたので、このまゝ止んでくれ  
ればよい、がと、祈つてゐると、間もなく雨は止みまし  
た。私はとびたつばかりに喜びました。それから支度  
をして、すぐに學校へ向ひますと、道で雨が降りま  
したが、暫くするとまた止みました。學校について、  
私達のする仕事を終へてゐるにまた降り出したので、  
こんなにも、降つたり、やんだり、するよりはいつその  
事雨が降ればよいにと、腹が立ちました。それでも早  
く晴れてくれ、ばよいにと、氣がかりになるので、沖  
の方を見るに黒雲は、だん／＼とこちらの方に來て、  
沖が明るくなつてゐます。「此のぶんならば大丈夫。」と  
先生も、おつしやるので、よろこんでゐる中に、今度

はほんとうにからりと晴れて、たいへん好いお天氣に  
なりました。みゑさんは嬉しうな顔をして、元氣に  
はたらいてゐられました。

### 暗きより明るみへ

本二 長谷芙美

唯一人机に倚つて、樂しかつた今年の夏休みの思出  
に耽つて居た私は、ふと我にかへつた。

そこには白い原稿紙が、ほの暗い電燈の下にほんや  
りとして、唯「面白かりし日」とのみ記してある。あ  
あさう／＼、私はそれを書かうと思つて、いろ／＼の  
事を追想したのである。

空から夜空を仰げば、銀梨地の星の數々!!冷々ミ夜  
風が肌を射す。襟をかき合せるとしみ／＼秋を感じた  
それはにしても、私が此の夏休みで一等面白かつたの  
はあの日であらう。面白かつたこと云ふよりはむしろな  
つかしい、なごやかな思出を残すあの日であつた。

あの日……弟と二人で姉の處へ行つて、すでに二  
週間も居た故か、何となく懶かつた。もうぢき歸る。  
そうした君でクサ／＼した様な朝、たまの休暇日を私

達の迎へ旁、お姉様のマダム振を拜見に、何の報もあ  
く突然兄が庭の戸を開けて、健康さうな黒い顔に笑を  
漂はせては入つて來た。

一年振の私と兄の對面。姉は三年振だつた。

家の中は新入の客で華やかにざわめいて、皆の顔も  
輝しかつた。

其の日の晝食後、弟は兄にせがんでさう／＼中原の  
海水浴場まで、連れ出してしまつた。その松原は、  
水泳場らしい混雑があつて、美しい色のバラソルや、  
眞新しい經木帽もチラ／＼して、水泳服のまゝ、ふざけ  
て居る子供もあつた。

兄が水雷學校の生徒であるために、ボート漕の御用  
を仰付かつた後、私も弟も珍らしく姉まで、其の太つ  
た体を海水着姿になつた。

ブイや水泳帽の浮いた碧い海にも、モヤ／＼と乳色  
に煙る沖にも、ぬぐつた様な空のはてしない色も、す  
べてが唯美であり詩である。

私達のボートもやがて、波上に乗り出した。滑な皮  
膚にも似た海上を、甘い磯の香にむせびつ、巧み二  
本のオールを音する事に、風の光る眞晝の海を、ボ!







「さあおあがりなさい」と促した。「わ、」と言ひながら、如何にも寒そうに首を縮めて、ちよこ／＼と自分の部屋の中には入つて行つた。私は近所に用達があつたので出かけた。歸へつて見ると妹が部屋の中で獨言を云つて居た。そつと陰で聞いて見ると「ネてるぢやん、貴方はいつでも机の上に立つて居て疲れない？、疲れるわネ、おまけは兎ちやんを抱いて居るんですもの……さあ寝かして上げるわ、だから其の兎ちやんを離して上げなさいよネ、」と一生懸命に博多人形のせうネー、さあ離して上げなさいよー」いくら云つても博多人形のてるちやんはニコ／＼笑つて居る。さう／＼きみ子は泣き出してしまつた。私もそこでは入つて行つた。「きみちやん」「きみちやんがいくら言つても、其れは造つてあるのですもの……だめよ。」「あ、……そうだつたわ。」「わたし遂忘れちやつたわ。無中になつて居たのですもの。」「許して頂戴てるちやん！」と今度はニコ／＼笑ひながら、てるちやんを抱いて又遊びに行つてしまつた。

## 糧

本二 横木房子

「ウーワン／＼。」「ニャーゴ。」猫と犬とのいさかひ初秋の午下り、ボチミタマは何かいさかひをして居る。私はさつきから、針の溝に糸の通らないのを、かなり焦慮して居た。私は糸によりをかけて細くする手を止めて二匹の動物の動作を見つめた。

「ミス、タマあなたは卑怯です。私のやうに土地に下りて堂々と闘ひなさい。」「い、わ、違ひます。私は屋内に飼はれて居るものです。土地に下りるべきものではありません。」「なんですミ！土地へ下りるべきものではない！あなたは何たる卑怯者でせう！あなたは今迄何度土地へ下りました。昨日だつてあなたは私の止めるのも無理に、庭先を歩いて行つて、御隣りの御肴を盗んだではありませんか？その爲奥さんはお詫に行かれましたよ。そしてあなたは烈く叱られたではありませんか！よろしい！これから先あなたが土地に下りたのを見たら承知しませんから。」「稀には土地に下りますよ。」「何です、稀とはよく言はれましたね。一

日に何回土地に下りたと思ひます。少くとも五六回は下りますよ。それで稀と言はれますか！」「そんなことは如何でもい、です。私等の間に何等關係はないことですから。私がある肉を取つたつて！あなたがのろいからですよ。腹が立つならこれから氣をつけなさいよ。」「氣をつけよ！よくもそんな圖々しいことが言はれましたね。私は何處迄も正義を以て闘ひます。私はあなたより大分小さい。然し私はあなたに勝ちます。私が正しかつたなら屹度勝ちます。」「ボチは昂奮して言つた。ボチは眞實小さい。猫の体よりも。猫には鋭い爪があるから、これまでの經驗上ボチの敗けることは解りきつて居る。」「土地へ下りなさい。」「い、え下りません。」「よろしい、何處迄も横着ですな。」「ウーワン／＼。」「ウーワン／＼。」「何です。そんなに背を圓くして、其の眼と言ひ本統に惡黨らしいですね。」「いらぬことです。あなたこそ闘ふのち最少し構へて被來い。」「ボチは口でこそ烈く言つて居るもの、内心甚だ訝ぶかしい。でも今になつて免して呉れと言ふのは、餘りに卑怯至極。わ、一命にかけてもこの高慢ちきな猫をと思ふけれど

敗けることは火を観るより明か。只心が彌猛にはやる許り。

私は二匹の動物の餘りに眞剣な有様に、すて、も置けず兩者の間につか／＼と這入つて行つた。そして私はボチの頭を優しく撫でた。二匹も意外な闘入者にしてはしたじろつて居たが、ボチは私と解ると嬉しさうに尻尾をふり出した。タマは怨しさうに何處かへ逃げた。私はボチに御美味しい御馳走をして遣つた。「ボチお前は何處までも正しいのね。そして無邪氣ね。御馳走澤山食べて大きくおなり。そしてタマなんか立派に征服するやうにおなりよ。」「ボチはクン／＼頭を動かした。私は母に言つた。「ボチは眞實に正しいのね。今にボチは大きくなつて見事にタマを征服しますわ。」「そして私は思つた。「正しきものは勝つ。私は今日淡くともい、糧を得たやうに思つた。」

## 落葉すれば

本二 進藤美穂子

それはかなり暖かな或る秋の日の事だつた。庭の落葉をかき集めて、裏庭の小低き所にゆき、もり上げら



れた葉のやがて、メラ／＼といふ音をたてて燃え上つた。私にはそれがたわいも無く面白かつた。幾度も幾度も繰り返して焚いた。暖かい煙が氣持よく、上氣して何ともいへない心持だつた。

細い煙が橙の木の間を縫つて、田圃を越え、田舎道を越え、向ふの家の軒上で見なくなつた。さや／＼とあびき合ふ芒の葉なりに、一層淋しく私は煙の行方を見送つた。丁度それは、すみきつた秋の日も暮れがかり、遠い水平線の所に眞紅の太陽が没しようとする頃だつた。私は名残り惜し／＼に、あたたまつた體を高く脊のびして内に歸る事にした。それでもまだ、何だか心残りがして後をふり返つて見た。きね残りの細い煙がそこらあたりで消えては、又後から／＼立ち上るのだつた。

私は其の夜、いつまでも今日の日を喚起すべく、ノートに書いて置いた。今も尚その日の事が思ひ出されて、今來ようとする落葉の時節を待ちあぐんでゐる。

きつみなつかしい思ひ出にいたる事の出来るであらうぞ。

## 金の月夜に

本二 和田 久

暗い畑の小路をチンチロリンチンチロリンと、絶えず奏する虫の音に誘はれて私は歩いてゐた。草の間から蛇でも出やしないかと思ふと傍の細長い薄まで妙に氣味悪くなつて、草や畑の上を目茶々々に踏んで祖母と母の所へ来た。母は「氣を附けよきやころんで了ふよ。」と言はれた。「お祖母さん、絲瓜の水はまだ。」と、聞けば、側から母が「まだまだそれにこんなぬかみではネ。」と言はれる。土はドロドロになつて、丁度お釜に残つたお汁粉の様に少し足を上げてでもビシヤビシヤはねがちる。祖母は肥満した體をおもさうに絲瓜の茂みに入れて、片手に鉢、泥だらけの片手に蔓をしつかり握つてゐられる。母に代つて提燈を持つと、ポーツと照された絲瓜の花は、黄色に夢みてゐる様。蛙の足に似た大きな葉の下から、直径八センチ長さ一メートル位の偉大なる絲瓜の實が怪物の様にヌーウと出てゐる。私は始めこの實から水を取るのかと思つた。併しさうではなく蔓口から聞いた時、さうしても信

## 實を結ぶまで

本三 石田 久子

生を受けて此の多端な世に出たものは、各々相當な實を結ぶべき使命を與へられて居ます。其の實を結ぶまでの期間は、それ／＼性質によつて長短はありますが、結實期間の経過の點に於ては異なつた所がなく、決して平凡でなくその間には潜在して居る複雑な闘が戦はれます。

彼の野原に自然の培ふまゝ、成長して純な綺麗な花をつけて、人の目を樂しませ、又自然の美を添へる花も聽ては充實した實を結びます。私共が其の草花に接した束の間は「清しの花よ、麗しの眸よ、おん身こそ私共の心を清く優しく導いて下さる恩人なり。」と感謝の念を胸に一杯にして居ますが、深く立ち入つて觀察して見ますと、此處には尊いモデルがはつきりと刻まれて居ます。彼等の周囲を支配する順逆の境遇は運命としても、易くなかつた輿路が潜んで居ます。彼等は寛大な度量をもつてあらゆる物に忍耐し、あらゆる物に努力して處世上の謎を解決して居ます。彼等は不時

する事が出来なかつた。そして其の水を顔にたらすとすべすべした美しい人にゐれると。蔓を切る日が俗に言ふ豆名月ださうな。突然「久ちやん提燈見せて。」と母の聲、吃驚して母の手に渡す。ボンヤリ照されたのを見るに、祖母はさつき泥地にしりもちをつき、緒の切れた下駄は里芋の根にほり出されてゐる。もうをかしくてならない。何にしてもあの偉大なる體が細い蔓にぶら下つてさうありませう。一體今日絲瓜の水を取らうと言ひだしては祖母。糊附のびん／＼で御丁寧にも上下坐して、一人で失體を演ぜられたのも祖母で、世の中はよくもこんな皮肉に出来たものどつくづく感心する。母と二人で祖母の手を引ばつてやつと起してあける。「あ、もうこりこりじや。」と、泥だらけの着物でかへられる後を、同じく泥だらけの下駄を下けて、ついてくるあはれな娘の役は私。豆名月と言ふのに、あぜ月が出ないのだからと思つてゐたのが、今みればつやのよい柿の葉かけから、金の月がキラキラ見ゆる。きつと、さつきからの有様をあそこでもてゐらつしたんだらう。



の暴風雨にも、赫々と照りつける天気にも叛かず従順に服従し、又彼等の衣を奪ひ去るのではあるまいかと思はれる大嵐にも叛かず共に靡きます。そして浮世の悲哀はよそにして、生存競争に敗けぬ様に努力して不順な天候や氣候にも何等少しの不平もなく成長して居ます。そして万籟寂として静かな夜に、自分の過去を追憶して喜びます。けれ共それで自惚心を起す様を弱い者ではありません。東の山の端から太陽が冲天高く昇れば、營々と勵んで働いて居ます。その結果彼等はやがて立派な實を結びます。斯様に私共も、自分相當の實を結ぶ経路は複雑であります。或る時は社會の風に揉まれ、或る時は目前に峨々たる山が聳れて、進路を障碍せられる時の多々あるのは世の常であります私共は努力と忍耐と希望を以て、過去を捨てて葬つた經驗の頁を繰つて、時に臨み變に應じて對照し、あらゆる世の難題に屈せず、常に雄々しい氣象を體して結實期までは他念なく勇往邁進せねばなりません。與へられた使命のために!!

思つて見ますに、實を結ぶまでの私共には色々な感情に馳せ易い時でありますから、それを自治的精神の

光明に照されて益々健實なる一歩一歩を、地上に銘して進み度いものであります。

## 彼女

本三 浦須 イト

ボウと終業の汽笛がなつた。

待ちかまへて居た女工達は、一度にきつと作業室から薄暗い廊下に溢れ出た。民子は人浪を分けて、直ぐ機浴室にかけ込んだ。

彼女は何時もかうして誰も居ぬ大きい浴槽の中で靜に考へるのだつた。それは彼女に與へられた唯一の慰でもあつた。

不圖彼女は姿見に寫つた自身を見出した時、思はず叫んだ。「これが私の眞實の姿のかしら。」しかし鏡は決して囁つたものは映さなかつた。

あの輝しい瞳、ピンク色の頬、そうしてふくらみを持つた手、總ての乙女の誇は、取り去られて居る。

何といふ惨な姿、何といふ急速な變り方。此の寒いのに、綿もぬい丈短かゝ、垢と脂で汚れ果てた着物で震へて居なければ。これがつひこの間まで、あの赤い

袴を胸高く引締めて居た、彼女のありの果か。彼女はたまらなくなつて、手荒く着物を脱ぎ捨ててや否や、浴槽に飛び込んだ。あたたかい湯は、彼女の体に溶け込んで、白い湯氣は立ち昇つた。

「あ、今日といふ日も済んだ。」彼女はつぶやいた。しかし後から湧いて来るのは、「又明日も。」といふ言葉だつた。今日の様に、又明日も苦しまなければ。明日が済めば又次の日も、限りなく押し寄せて来る苦しさ。

死ぬる迄、彼女は明日も又、といふ言葉を繰り返さなければならぬのか。運命だ。それでなくて何だらう。彼女は運命なんて、幸福だつた時には、思ひも認めぬ事件だつた。

然し今となつては、考へずには居られぬ。彼女は逃れようとした。然し運命は決して彼女を離さなかつた。無理に逃れんとすればする程、苦しみは増すばかりだつた。

彼女が幸福だつた時代、苦しみを知らなかつた時、それがほんの一瞬時、息つく暇もない程の間に、幸福の總ては持ち行かれた。彼女は追ひかけた。そして奪

ひ返さうとした。然しそれは無駄だつた。相手は大きい運命だ。

一ヶ年前の帝都悲慘事。彼女はまざ／＼と當時の事を追想した時、思はず身を震はした。

榮華の巷、不夜城の都も、一夜の程に冷たい殘墟となつて、其の上に彼女は父を失ひ、母はびつこにされた。

彼女はどんなに恨んだ事だらう。しかし今は其の恨も盡き果てた。彼女の父はもと本郷の或る會社の工場長として働いてゐた。家も相當豊であつた。然し焼け出された彼女の家は惨なものであつた。一家の柱を失つた彼女の家はその日から生活に困つた。傷ついた母七十近い祖母、妹は幼い。最後は彼女の重い責任となつた。彼女は哀れにも決心した。自ら進んで樂しかるべき乙女時代を地中に葬らんとした。そして堅い決心を母に語つた。母は泣いた。

「未だ年端も行かないお前に、私が普通の体だつたらこんな迄、お前に心配はかけないものを。然し誰も恨んでゐるのだ。神様が私達の罪のいくらかを消すためになされた事なのだから。」彼女は何と答ふ



べきか、解らなかつた。

そうして彼女がいよく、此の工場に働く事となつて家を離れる時、母は敷居際で彼女をまじく見つめてゐたが、たまたまなくなつて打ち伏してしまつた。

「体を大切に時々は暇を貰つて歸つて来よ。」と言つた年老いた祖母の目、義捐の品として貰つた古びた人形を持つて、泣き悲しむ母の膝にすがつて、無心に姉を見つめて居た妹。

こゝまで憶ひつづけるに、彼女はたまたまなくなつたはらくと涙は湯の上に落ち、波紋は後からくゞみひるがつた。

「お早い事。」と遅くかけ込んだ友の聲に驚いて、彼女は煤けたタオルで顔をなで涙を隠さんとした。けれども後からくゞと溢れ出る涙……。

可哀想に彼女はかうして、乙女時代を朽ちさせなければならなかつた。然し運命だ。彼女は小さい者だ。何うする事も出来ぬ。

### 實を結ぶまで

本三 河野マツ子

けるごか申します。しかし、必ずしも福徳をうけ、禍根を招くごいふごはありますまいが、ごもかく良い實を結ばんならば、種子を精選するのは、論を俟たざる所でありませう。否、種子ばかりではありませぬ。其の四圍の環境も考へねばなりません。其の良種子を成育せしむべき私共の心でふ田畑の豊饒ならんやうに常に耕すことを怠つてはありませぬ。

私共が成人してむやみに立派な人にならうと願つても、それはかなへられぬことではありませぬ。その一歩一歩の足許を熟々見つめて上れば高きにも上り得るでせう。

小さい砂の一粒も終には富士の山となり、小さい雨の滴も終には廣き海とありますものを、私共は常に心がけて、實を結ぶまでに、堅くて動かぬ所の立派な基礎を造ることが肝要と思ひます。

### 筑紫川畔に立ちて

本三 金子萩野

私は筑紫川畔に立つて軽い氣持で八月の日の夕映を見詰めて居た。ふと乳呑兒の泣聲を耳にした。後を振

人として此の世に生れてより、人としての使命を果すまでのみ親の勞苦、心痛は一通りではありますまい。私は親の慈愛の偉大なごをしみくご感じました。親は子の爲に苦を苦ごも思はず、唯一向に子の成長を夢み、一人前の人として恥しくないだけの者になるのを樂しみごとして、慈しみ育てるのでありませう。それを思へば、小は小なりごも分相應る務をして、親のよろこびを買ふのも一の孝行かと思ひます。子養はんど欲すれば親またご。ごか。親に別れた後では何等施すべき術がありません。故に生ある中に孝行することが肝要と思ひます。

又いくら學問は良く出来ましても、其の人の人格が善からざれば何の役にも立ちません。その人格てふごも一朝一夕に成るものではありませぬ。小さい時から練磨して築き上げられた人格こそ、永久不滅のものでせう。それでこそ眞の役にも立つのでありませう。

子供の時から怠り遊んだりしてゐる人は、さてこれから一人前の人として社會に立つて行くことになるご忽ちいらぬ苦勞もせねばなりません。此の世の中は固果應報にて、善を行へば福をうけ、惡を行へば禍をう

り向くと……あ、みじめな勞働者よ。私は毎日くこの五人連れの女が、つるばしを擔いで青白い顔して辨當を腰に下けて、三人とも乳呑兒に肌を現はして乳を飲ませて行く。その後からやつと小學校を去つたばかりの男の子が二人分のつるばしを擔いで行くのを見た。さうして母の務が出来るものか、子供の教育が出来るか、それを強ひるのは、今はあまりに残酷だ、あまりに矛盾した事だ。彼等をいやしき者に見た私は感謝しなげればならぬ時節が來たのだ。あの世界の文化を生み出す石炭、鐵は何處から、何者の手に依つて出されるのだ。自然の懷から勞働者手に依つて出るであいか。その勞働者は誰だ、私等と同じ人間ではないか。

一片の同情、否考へても見なかつた、過去は怖ろしい。

夕闇の迫る中で私は彼等の黒い淋しくご行く後姿を見送つた。

昨日混んだ汽車に乗つた時、この勞働者ご向ひ合ひになる運命に逢つた。その時は、あ、あの青白い顔、灰色の唇さびた目、つるばし持つ手、くさい着物一



あのほがらかなる日に逢はないで地下数千尺の下で腕一杯、唯安全燈をたよりに働くそれによつて……見ろさへいやなのに向ひ合ひとは、私は眼をふさいで居た。その時の汽車の、のろい事、これは私にさう思はれたのだらう。彼等がやつと××驛に下車した時、私はほつと、いきついた。しかし今考へると私は怖ろしい、うしろめたい。

お、これからの私等、第二の國民を作る私等は、自覚めなければならぬ。私等が國內で人を差別するなら外國から、いかなる迫害を受けても、甘んじて受けなければならぬのだ。お、私等は今後明るい清い瞳もて、彼等に對して行かねばならぬ。心にさへ留めなかつた過去の私は熱い、同情者の一人たらんことに務めませう。

この秋の桃源にも黒い煙をポツ／＼立て、鐵の上をすべつて、私等の爲に働く物を、もうじき見るでせう。その時、地下に泣く労働者を思ひうかべてみて下さい  
(旅行を了へて)

はかなさ

祖母を失ひし悲しみも友の情に慰められて、魂も一變して、冷めたい空氣の中をいとはず、手馴れぬ事もなし得た。

お線香を立てる手先は慄へてゐた。戒名を見るにたねきれず、今迄かくまつてゐた涙は、たら／＼と兩頬に冷めたく泪路をのこして、佛壇にポト／＼落ちた。打敷の織目に泌みて、滲かなく去りし俤をひたぶるふつかしくぞ思ふ。

明けゆく東空の山の端のやうに、佛壇内の燈火は、偉大な、朝の神祕の光を放つてゐる。

悔の涙は、グラグラと胸を掻き混ぜ、倒れる様によろめいたが、前机でやつと身を支へ、靈を伏し拜した時間は迫る、思ひきり、今一度頭を下けて涙を拂ひ帯をほぎいた。

お、寒い、昨夜の雨に、すっかり秋氣が満ちて來た。下着は雨の爲に、氣持ち悪くべつたりなつてゐる。着換へるのも嫌にあつた、暫くまごつく時、譯もあく涙はながれ出た。  
ありし靈も秋の夜深く立ちのほる、

淡きけぶりになりにけるかも

### 或夜の義經

本三 井町梅子

秋の夜の月は冷く地上に輝いて居る。すべては静かだ時々木の間に虫の鳴き聲がする。ほろ／＼と何かを歎く様だ。義經は此の聲が好きであつた。遠方人の訪れも無く、日に日に迫り来る己が命を、はた現任を靜かに腕こまぬいて考へる時、秋の泉の縁に冷く澄んで居る義經の瞳から、ほと／＼と大きい涙が落ちるのだつた。

「あ、全てが夢ぢやつた。」  
全てが夢になつた時、それほど悲しい淋しい空な物は無い。

義經の過去半生の夢、それは華な物だつた。おしもおされぬ立派な大將として、身に錦衣を纏うて居た者が、今は悲しい落人として、其處此處を逃れて行く、人の身の上ほき分らぬ物は無い。馬のいななきを聞いては捕手かど怪しみ、風の音にも、人の聲にも、一ツツ耳をそばだてねばならぬ、悲しい身なのだ、今

宵は良い月ぢや、つと顔を上げた義經の瞳には、蓮の葉にまろぶ露にしては餘りに悲しく餘りに淋しい露が光つて居た。

何處にも無く優しい琴の音がする。

「お、」何處の何人が搔鳴らすか、十三絃の音も美しく……。「オ、」と一聲、義經の口から小さくもれた此の言葉は、何を意味するか、彼は今、去りにし人の優に優しく、白魚の如き指にてかなで居たりし東の佳人を思ひ起したのであつた。知るか知らぬか、もれ來る琴の音は高く低く松の梢をふるはして居る。

### 實を結ぶまで

本三 山本 照

或春の暖い日に着物をぬいで待つてゐた私は、そつと頭をもたけてみました。地上は今迄私の住んでゐた地中と違つて明るく、い、心持の風が吹いて、暖い太陽はほ、ゑんでゐて、美しい鳥の聲はあちらこちらに聞えて、私はもうのぞいただけでうつろひしました。けれど私の目に寫るのは、美しい園生の一小部分である事を知つた時、自分の身丈を伸ばす爲に力を盡し



ました。小さい根からは出来るだけの養分を吸ひました。そして先づ上に伸びる前に根を淺筋にも分けて、下しました。小さい葉っぱを揺がしながら、暖い日光を十分浴び、大きい息をして清い空気を吸つたその頃の私の心はよろこびばかり漲つてゐました。幸福な地上！、笑みの世界！、私は美しいそれらに向つて伸びる私の影が少しづつ、長くなるのをみて笑ひました。

こんなに楽しい生の朝に立つてゐた私は、今生の夕べのたそがれの中に寂しく身を横たへてゐます。さうして小さな種の赤ん坊の爲に、私の思出を書き残しておきます。私の一生の中には短いながらも色々な事に會ひました。

或日私は道を行く二人の女學生に自分の育つた所、あの青い廣場を野原といふんだと習ひました。毎日遊びに来る蝶や蜂に、大ていの事は教はりませんでした。野原と云ふ事はまだ聞いた事が無かつたので大變珍らしく思ひました。又或時は大雨大風にも會ひました。丈の高い私の近所の草は大抵倒されてしまつたあの時のおそろしか

地中にある根から養分を吸はうとすれば、先刻の大雨の爲に水ばかり出て役立ちさうなものは一つもなく、それには流石の私も困りました。吸つただけを便りとして先づ起上りました。そして今度は伸びる事を止し余分の養分は、根をもつて、發達させる爲に使ひよ／＼丈夫にしました。けれど悲しい事はかりはないものです。或夜は美しい望月を見ました。清い光を受けてよろこびに満ちたあの時の私は、身も心もすが／＼しう御座いました。「まあい、お月様ね」「ほんとうに、きれいですよ」と私共はこんな話合つて月を賞めました。美しく云へば讚美でも云へませう。けれど其翌日はひどい暑さで大變苦しみました。葉がよれ／＼にふりまされたけれどこの間の大雨に比ぶれば、何でもありません。

私共はよく美しい朝に會ひました。葉が重いまでにしつとりと露を含んで私共青草に曉の光がさして、美しく輝いた時の心持のよい事、朝であければ感じられぬ一種の壓迫でも申しませうか。何とも云へぬ氣持になります。

つた事、思つただけでもぞつこします。ゴ／＼と小さい地ひゞきを立て、何物も倒し盡さないではおかぬと云ふ様に吹いたあの風……。けれど風は長くは續かず止みました。やれ安心と胸を撫で下す間もなく今度は豪雨に襲はれました。風で疲れた身體を用捨遠慮もあらばこそ、バタ／＼た、き付けられたかゝしさ、私は折角下した根を無慚にも出されてしまつて泣くにも泣けませんでした。私はもう死ぬんだと思つて目をこぢました……友の泣聲が夢現にきこえます……

私共は人と違つてあんな時逃ぐるべき家を持ちません。枝を折られ蕾を落されて歎く様は何ともあはれです。私は氣が遠くなつてしまひました。氣が付いた時には雨はもうすつかりやんで拭つた様な空にはもう日もとつくに暮れたとみわた、片割れ月が寂しさうに光つてゐました。友はとみれば、あはれ莖を折られた上根を丸出しにされて息たへてゐるのもありました。正氣のあるのはほんの僅かで大抵氣を失つて倒れてゐました。

私はあちらこちらの怪我の痛手をしのびつゝ、生きながらへる仕度をしなければなりませんでした。僅かに

私はこんなに嬉しい悲しい道を通つて來ました。いつの間にか私にも小さな花がさいて可愛い、種が出來ました。さうして私はもうこの世の務が済んで余命をたのしんでゐます。私はちつとも命が惜しいとも思はないし、又この世にもたへられぬ程の愛着も覺わません。運命のまゝに従ひます。この間蜂が來て申しました「近い内に風が吹くから、その時貴女の種の赤ん坊を御放しなさい。そしたら種はそれ／＼思ふ所に飛んで行つて、來年の春は可愛い、芽を出します。」。それで私は早速種の數だけお辨當をこしらへて持たせました。今は風の吹くのを待つて子供をあちらこちらにやるばかりです。それでいよ／＼私の用事は済んだわけです。

私は生の限り命しられたそのものために従順に服従したまでです。これで私は不満はありません。何の未練もありません。さらば。

(秋の日の沈むころこがらしの聲をき、つゝ)

### 栗の音

本三原 貞子



暮れ行く秋の夕、南園の栗の木から、ポツンポツンと淋しい音たてて、栗がねるのを、私は聞きました。その時の淋しい心持、秋はさうしてこんなかしら……南園の散歩から歸つて机に向つても、さつきのポツンポツンと、あえた栗の實の音が耳にのこつて、あんにも手につかず、何かもつとも深く考へて見たい氣がして、机の上に頬杖ついて薄暗い自然をながめまじりました。

次第々々に暮れ果ててあたりは眞黒になりました。ふと耳をすませば、暗い窓の下でこぼろぎが、はかない自分の運命をうたへるのか鳴きつづけて居ます。「なんじまあ今夜は詩的を夜だらう」と、思ひながら色々な事を次から次へとたぎつて行く内、それこそ自分の知つてゐる過去のあらゆる人達が、頭の中にうかんで來て、おたがひに話し會つてゐる様な氣持になりました。私は靜かに、瞳をこじました。……そこは丁度銀杏の葉のたくさん落ちて居る山里の一本道。  
文ちやんと二人きり……籠を片手に、カサコツと淋しい音のする落葉の上を、ふみしめ、ふみしめ、す

んずん山深く入るのだつた。  
「文ちやん栗のいがたくさん落ちてゐるね、ここにありさうだわ、探ませよ。」  
「あら大きなのが。」……文ちやんが突然叫んだ。かうして二人は、次第々々に奥深く入るのだつた。時々木々の梢より枯葉がヒラヒラと思ひ出した様に散るやがて自分の籠に一杯になつた私は、  
「文ちやん歸らない。」……

文ちやんも一杯になつたらしく二人共立上つた。いつの間にか、お日様は西に傾いてあたりは薄暗くなつて、道もぬい山奥に入つて居るのだつた。文ちやんも私もあたりの景色に壓せられての恐ろしさ、しかも御母様にはだまつて來たことの悔いに、いつしか涙が一杯眼にやきつて居た。文ちやんはと見れば、指をくはへて眼に涙一杯……、向ふの森の方から樵夫の姿をしたおじいさんが通りか、つて、親切に歸る道を教へて下さつて二人共歸つた。……さうして御母様に叱られた。……  
はつと瞳をひらいた。そこはやはり自分の机の上……ただ幼き日の思ひ出の中で文ちやんと、語つて

居たのだつた。

あ、あの時の様な晩秋だけ、文ちやんは今……  
……あ、たまらなく寂しい。  
いつか涙さへ追つて來るのを感じました。

### 月下に佇みて

本三 石川サマ子

月はとつぷりと消れた。北海のほとりの蜜柑畑の中の小さな町には、夕の汽笛と共に光り輝く電燈の街を化した。私はそよよと秋風の訪れる心地よい此の夜一人中庭の椽に腰を下した。私はいひ知れぬ淋しい感じの身にしみよとしまわたるのを覺わした。私は何時の間にか秋夜の懷友てふ歌を吟んだ。歌につれて私の魂は夜の寂寥を破つて、風に誘はれながら、はるか遠く去つて行つた。

みあぐる空にはしづかに、いとも靜かに。月は彼方の雲間からほつかりと顔を出した。すんだ、清い淋しさうな月が。私はほんとうに秋の夜に別れた友をまつかむといふ事が如何に淋しいものか、心細いものかが初めて自分の身に沁む様に感じられた。月はやがて

紺青の雲に隠れた。又再び下界を照した時には私はさめよと涙してゐた。この秋の夜の月、月には四季通じて變りはあるまじけれも秋の月ほ人の心にいろよと物思はせるものはあるまい。やがて私は思ひましたこの月の様に私の心もすみたいものだ。

### うれしかりし日よ

本三 杉山美壽子

學生時代の三年生、なんじ幸福を學年だらう。人生の乙女時代なんじ幸多き時代だらう。それらすべての幸を投げ出す今日の運動會なんじ嬉しい日だらう。年中土蔵の中につめ込んで有つた萬國旗が、高い、しかも廣い空中に上げられて居る様は、ほんとうに跳り狂つて居る様に見えた。併しポツリ、ポツリと落ちた雨、それは五百の乙女の心をびくりびくりとさせた。ザアザアザア嗚呼なんの事も無いと、言ふ様に成るのかと思つたら思ひの外太き天の水まきで有つた。雲間より太陽がここにこきと輝きそめるよ、自ら五百の乙女の心はここにこきとこした。轟く一發の煙火と共に開會式が有つた。全生徒の服装は四年白、三年緑、二年が桃



色と言ふやうにハチマキした五百の乙女の集つた、美しさはあんな形容の言葉も出なかつた。

見物人は一番先におじいさんとおばあさんが來られて、なんだか面白くてをかしくてたまらなかつた。今年には運動會の様が一變してテニス、バスケットボールの試合が有つた。テニスの興味のある人々は大變に喜んで見られた。優しい乙女の態度にも似合はず、バスケットボールの其の鋭敏な動作は見る人をして氣持よく感じさせた。應援のしかたは又一變して拍手にしたが、之にはあまり團体的の應援が出來なくて、寂しい感の有つた。可愛い、幼稚園兒童のダンスは自ら見る人にほゝろみをおかばせずには居られなかつた。もみぢの様な手が上り下りして間違つても自分の思ふ通りにつゞけるその心の清さ、その清い心は乙女にも誰にも持ち得ない彼等の誇りである。あんなに無邪氣な心がいつのまに誰が奪つてしまふのだらうか。思へば悲しく成つて來る。あゝ神の前にも佛の前にも、恥づべき心の悪い人は、彼等のみであらうと思つた。だげと決して自分達も侮る者では無いと思つた。乙女のみに持ち得る其の心を動作に現はす級技こそ、また誰

も持ち得ない清いものであると思つた。それはほんとうによく皆の級技に現れて出た。全体のクラスから注目せられて居たランニングの選手の時、すみ渡る大空に乙女の叫聲、果してその勝は我がクラス。あゝ前途有望の我がクラスよとよろこびに溢れつゝ、自ら胸に手を取れば胸を打つ心臓のきよめきは勵しい。あゝ有望なる我がクラス、次に卒業生が以外にも多人お喜び斜ならずであつた。今日こそ長かれといのるのもしらず顔に太陽は西の空に落ちて行く。さしもの見物人も、一人去り二人去りて、後には多くの紙屑ばかりが散乱して居る。投げ下された夕暗がしたいにだいにあたりをおそつて來て初めて體に冷たい風が、あたりのを覺れた。空を仰げばいまだ暮れきらぬ、夕空に夕づゝの光りがキラキラと一點永う引いて居た。あゝ今日の運動會は力強い盛大さだつた。すんでしまへば何の事も無いまづまでが祭りはよく言つた物だと思つた。ふみにじられたクロールにも冷たいゆが下りて來た。忽ちの中に運動會があつたと思はれぬ位にきれいにかたづけしてしまつた。再び來るに三年の運動會は

もう將來の思ひ出となつてしまつた。あゝすべてが過去と成つた。なんだか失望してしまつた。もう一年しか後は無いと思へば何だか悲しくて胸がつまる様である。鳥も皆ねぐらにかへつて町に電燈がつき薄暗く成つた時、夕暗に白の靴下のみくつきり。ういて皆家路さして急いだ。

### 虫の音を聞く

本三 山本 直

限なく流れ渡る秋の夜、庭の千草の影にひそめる妙な虫の音、我れながらをかしと見、面白くも聞きなせしよ。そこ我が庭の千草を窺ひし時、うたてや銀鈴を振る如き悲しの聲は、はたと止みたりき。秋哀愁を物語る如き虫の調べを聞かん爲なせし業の、斯く迄も痛ましむるは思はざりしを。

嗚呼!! 哀れなる生の虫よ、徐々に登り行く涙の如き月を見上げぬ。私は此の時、眞實尊き或物を忍びきたり。それは哀れなる者による慈愛心の芽ぐみ行く嬉しさ、その喜がをひしく思ひぬ。私はかくして時の流るゝをも知らず、ふけゆく虫の音に耳を傾けぬ

初更二更の夜もすぎ、冷風肌を襲く時、月は益々天心に澄みわたりにて、星愈々瞬きぬ。万物悉く眠る時蟋蟀ひとり唧ちてのみありき。

N K

本四 松田みさを

N Kとは、二人肩を並べて河に沿うて黙して行つた。

秋はもう減切り深んで、堤の櫻もすつかり紅葉してしまつた。薄くは、けた芒の穂なみを揺がせて吹いて來る風も、何となく身に沁みて寒い。歩むたびに草の實がカサカサと鳴つて、晩秋のたそがれの淋しさが、そぞろに二人の胸に喰ひ込むやうだ。

二人は河に面した草原に、矢張り黙して腰をおろした。

そこには女郎花、萩、野菊なき、そのほか名も知らぬ秋の草花が一面咲きみだれて薫を放つてゐる。Nはそれらの花を無意識にちぎつては水に浮べて、そしてその流れ行く有様に見入つてゐる。

日はもう落ちたのか、水にうつつてゐた夕雲が一し



ほ赤くかがやき出した。

岡の木の隙を際かして、藁ぶきの屋根が、高く低くいくつとなく見えて、夕餉の煙が静に立ちのぼつてゐる。煙はのぼるに連れて、だんだん擴がつて行つて、廳ではぎれも一つとあつて漂ひながら消え去つて行く。凝とそれに見入つてゐたNは、わけもなく悲しくあつて色々を思ひ出される。Nは堪らなくなつて、其處にうつ伏してしまつた。

「おこつたの？」 Kは立ち上つた儘、もぢもぢする。そして溜息を投げるやうに吐き出した。

「いいえ。」 Kは簡単に應へた。然し、二人は妙に笑顔をさへ表はさなかつた。何時もならば、何か堪へられぬやうに、顔を合せさへすれば笑ひ合ふに親友同志の仲でありながら、僅か一月のあひだでも相離れてゐたことが、それだけの溝を造つたと云へば言はれるのかも知れない。二人は、さうかすると、寂しい沈黙の淵に引きずられて行くのだつた。

話がないのよ。それ程、造作もなく世の中は、片が附けられてしまつたのだ。苦しんだり、喚いたりして口惜しがるこそをかしい。——Kはかう思つてNの顔

を見た。Nの顔は、張り切れるやうに膨らんで青白い月光で、やや、凄味を見せる程白く見えた。

「今夜はへんねのね。——わたしもよ、なんだか！——あゝたも確かにへんねえ。——」

「さうですかね。」 Kは軽く返事をした。

Nは頷れるやうに坐つた。それから、月に照らされて、蒼い綺麗を石ころを抱きあけるやうにして、膝の上に置いた。

NはKの顔を真正面に見てから、その視線を静に、蒼暗い山の方に移して行つた。二人向ひ合つて坐つたまゝで、Kの視線はNのそれを全く相反した方向に、真直に延びて動かなかつた。

x x x x x x x x

それから長い時が経つた。

月がよく照つてゐた。青白い浮いた堤の路に、並木の櫻のわくらの葉の影までが、一枚一枚濃く落ちてゐた帯のやうに伸びた河からは、緩かな絶わなない流れの音が湧き上つてゐた。Kは疲勞し切つた身体を、堤の草叢に投げだしたいやうな氣になつて、斷崖に當つて白い重吹をあける河面を、眺めてゐた。もう先刻からの

反撥的ないら立たしい氣分は、きれいに洗はれてゐた。そしてKは、涙を湛へて、合掌したいやうな、感激を覺えて、いつまでも、嚴肅な水のしぶきを見詰めてゐた。

### 夕方の墓地

本四 井本夜思子

初夏は訪づれて、黄ばんだ麥がざわつてゐる。四季變りないグリーンの高山は屏風の如く、茫々とした廣野をぐるりとかこんでゐる。暮れか、つた彼方の空に真紅な夕陽が燃え、やがて紫の山々に、うす紅の夕靄がたちこめて、山寺から餘韻の長い入相の鐘の響く頃、私たち姉妹は新しい母の墓を名残りをしくも立ちさるのである。石段をおりるに、そこにはもう黒ずんだ墓が寂しさに立つてゐる。それは十五の時から十五の才まで、よく働いてくれた、久兄の墓である。私共姉妹は母の墓へ行くことに久兄の墓も一緒にお拜んで居た、母も久兄が下に居るので、如何に氣強い事であらう。

三年前まで一心に家の爲に働いてくれたのに……。

又新しい涙が、線香持つ手に流れる。

墓のまはりの小草の中に、名も知られない小さな水色の花までが寂しく泣いて居るかの様に戦く。

### 思ひ出

本四 武居榮子

あの時からもう三年たちました。

私がまだ一年生だつた時の事で、もう一ヶ月もすれば、二年生になるに云ふ三月の初めだつたと記憶して居ります。

三月と云へば、萩ではもう花がほころび初める頃ですが、あちらではまだ花などは夢にも思はれません。雪が澤山積んでゐて、スキーの最中なのです。

私は其の日いつもの通り多くの友達と一緒に校門を出て、皆別れて、Kさんと二人で吹雪の中を堀の邊まで来ました。私の通學の途中は、此の城址の堀のまはりを通るのがつねでした。

Kさんから堀は風がなくて温かいから堀を通らうと云ひかけられました。私はね、通つて見ませうかと云ひましたが直ぐ、でも破れでもすると、大變と躊躇し



ました。

Kさんは雪誕生れで雪や氷は、ちつとも怖れない。その上スキーの選手であるため、雪や氷の上を滑り馴れて居られますので、大丈夫と勧められますから私も好奇心にかられて堀を通る事に致しました。初めは何か氷がこはれさうな気がして、一歩々々用心に用心を重ねて歩きましたが、一間餘りもするに馴れてしまつて、さうと歩きました。

もう半町もすれば、堀が盡きると云ふ時でした。私の足下がめり／＼と音をたてました。私ははつとして後へ退かうとしましたが、もう間にあひません。

其處は氷がうすくなつて居た所でした、私はつめたいつめたいきれる様な氷の泥水の中に落ち込みました。足を抜かうとしても、足はちつとも動きません。そして、長靴の中に冷い泥水は遠慮なく入ります。

Kさんは急いで、手を引つぱつて上げようとして下さいましたが、手が抜けさうで、足はちつとも動きません。私は泣きさうになつて、一心に動かす様に努めました。暫くすると、足の自由がきく様になりましたので手を引いて貰つてやつと上りました。

道端で靴をぬぎ、マントの泥を雪でぬぐつたり、大騒ぎをしました。あたりを歩いてゐた人々は皆變な顔をして私等を見て通ります。家まで足袋はだして泥靴をかへて歸りました。途中人々が異様な眼で見ます。ほん／＼と恥しく思ひました。それでもう二度堀の氷の上はあるくまいと決心致しました。

### 母を求めて

本四 大山あさ子

青白い電燈の光は、寒れた英子の顔を照して居る。白いベットに横つて居る英子の寝臺の側には、口のよくしまつた色の浅黒い、切の長いしつとりと潤ある日を持つた幸夫が、眞箇の小さいかたの上下を着け、椅子に腰掛けて何か讀んで居る。英子が口をもじ／＼させた。彼はじつと見守つた。ひびく胃を傷めた彼女は見違へる程衰弱して、ゆつそりと肉が落ちて小鼻が目立つ。静かにつむつた瞳は長いまつ毛が伏せられて後毛が二三本額にか、つて居るのを幸夫は上へ上げてやつた。

「兄さん……まだあの？」

英子は力なく目を見開いてだるさうに尋ねた。

「あ、まだ、よ気分はどうだね？」

「どうもさういふの。だけぎあたし、母さんに逢いたい」

「ぢき歸られるから、英ちゃんが早く快くなるのが第一番の急用ぢやないかね。」

「急用？あたし駄目よ。もうそれよかあたし。」

「そんな泣き事は御止し。この詩集でも讀まうかね英ちゃん？」

「い、のよ、兄さん……」

カバーをかけた電燈の光が、淡くゆらいで淋しい心持が迫る。枕もとの山茶花が青白く映ねるのを、幸夫は悩ましげに見やつた。

彼は一高の生徒であるが、英子の病氣を聞いて三日前に歸郷した。土地の高女四年生の英子には、たつた一人の兄である。兄一人妹一人。父は今朝さうにも出ない用事の爲に出て行つた。母！英子の求める母は未だ歸つて来ぬ。一月程前實家へ行つてから歸らぬのである。病氣の爲に氣が弱くなつた彼女は、母を求めて止まぬのである。母の事を父に尋ねると、定まつて

不機嫌であるので、彼女も父には母の事をいはぬやうにする。

「兄さん、母さんほん／＼に歸つては下さらないのね兄さん御存じないの。」

「そんな事はない英ちゃん。きつと歸られる。」

「だつてあたしがこんなになつても、歸つて下さらないのですもの。淋しいわ。」

「御止し。僕まで淋しい氣がする。もつと面白い話でもしよか？」

「面白い事なんかはないわ……」

「しよががないなあ……」

おし附けるやうな沈黙の中に、英子の吐く息が忙しくひびく。父も幸夫もその他近い身内の人々が緊張した顔附で、彼女の寝臺のぐるりをかこんで居る。一夜の内に、英子の病狀は著しく進行して、昨夜以來烈しい痙攣の爲に、今更のやうに衰弱して母の名を呼び續けて居る。又烈しく引きつけた。人々ははら／＼とした玉のやうな脂汗が青白い額に滲んで、口をいがめて苦しむのを見かねて幸夫はうつむいた。注射によつて辛



くも苦痛を止めたが、醫師は力なく注射器を投出した

「どうも、もう駄目でせう。」

「母……さん……。」

「英ちゃん。」

幸夫は彼女の冷たい両手を握った。定まらぬ目附をした英子は幸夫の上に視線をむけたが、堪へきれない様にすぐ目を伏せた。

「兄さん……ま……だ？」

「英ちゃん許して御呉れ。母さんはね……。」

「母さん……帰つて……。」

「……。」

「逢いたい……母さん。」

筆に濡された水は交る／＼人々の手で、英子の唇を潤した。

「英ちゃんい、所へ御行き。母さんの代りに兄さんが居るから……。」

一度目を開けた英子は、静かに目をつむつた。永久に物言はぬ如く彼女の美しかった瞳も、遂に長いまつ毛を伏せた。

「英ちゃん」

出張つた坂道を危い足取りで上つて行く。時々石に下駄を乗りあげて、危く倒れさうになるのをやつと踏みとめる。静寂の中に聞えるのは、溪水のせ、らぎと木の間を叫ぶ鶉の聲ばかり。疲れて立止り、木の間から遙か下を臨めば、赤瓦の屋根が銀色を放ち、黄金の稲と相對してゐる。緑葉の中に黄褐色の柿が鈴なりにぶら下つてゐるのも面白い。

墓地に來た時、右手の水桶を下した。先祖の墓はいつもの様に掃き清められた中に立つてゐる。曾祖父の墓はもう大分苔蒸し、四五年前亡くなつた祖父の墓は新しい。香華を手向け跪いて拜んでゐると、地の底で鳴いてゐる様なこぼろぎの音が淋しく耳に入る。立ち上つてゆら／＼立昇る香の煙を見つめ乍ら、亡き祖父の世にありし時を思つてゐると、後に足音がして誰か上つて來る様子。振り返つて見るに妹が洋服のま、でこつ／＼上つて來る。誰目を見合はして頬笑んだがり、墓前に危いて拜んでゐる。立ち上るのを待つて、「恆子さん、どこにゐたの。私が出る時は見ねなかつたのに」「二階で本を讀んでゐたのよ。そしたら姉さんが墓へ參られる様子でせう。本を讀み終つて、それ

すべてを超越した幸夫は妹の瘠せかけた體を抱きしめた。刻々と冷ね行く彼女。呼び續けた母の名も終に空しくゐつた。

「兄さん……母さん……居る……。」

蟲のやうな聲が彼女の唇を濡れた時、幸夫の目からはすべてを越した涙が流れた。時には秋の光が淋しく遠くで川の流がする。

### 墓 參

本四 阿武將子

一月振りに我が家に歸つて、のんびり雑誌に讀み耽つてゐると、臺所でこゝ／＼してゐた祖母が「將子や今日は何日かのー」「十二日であります。あつさうだ祖父様の祥月命日だ。私がお墓に參りませう。參る支度をして、午後の暖い日ざしを脊に受け、墓地へひと歩／＼足を運ぶ。縣道から小徑に入るに千草の間に野菊がしほらしく咲いてゐるのが目をひく。土橋を渡つて、小川に閘御水を汲みに下りて見ると、夏休に綺麗に水汲場を拵へて置いたのが、大水の爲に壊れてゐる桑畑と重く穂を垂れた稻田との間を通り、木の根の

からやつて來たの。」

二人で部屋のお母様の墓の側に寄つて見る。お母様は二十八歳で亡くなられたのであつた。月日のたつのは實に早い。あの頃尋常二年だつた英子さんが女學校の二年。幼かつた兎ちゃんに、文ちゃんが尋常五年や二年にあつてゐるもの、あ、お母様が生きていらつたら、皆はみんなに幸福だらう。暫く話した後、名残惜しく墓に別れを告げた。坂道を下りる時、頭上で鴉がかあ／＼と鳴いた。振り仰ぐ途端下駄の鼻緒がぶつ

### 名 な し 草

本四 藤屋ハル子

吹いて來る軽い秋風さへも、あはれ堪へられ難く病みささら、深く頭を下けて居た黄金の稲も、また、くまに、刈入られて、二三寸ばかりの稲の切株が畑一面に秋の野の淋しい風景を一層寂しうさせてゐる。わけもなく思はず身体をのり出して瞳を畑に轉じた時、淋しく悲しくておのづと臉が熱くもつて、ほんやりと向ふが見え出した。あの暖い春の日に神の恵によ



つて生をうけ、炎熱の夏を過ぎし秋を迎へた。  
やがて白い冷たい霜が降つて來始めた時に、何の未練もなく、再生を誓つて只逝つて仕舞つた方々がなつかしくてならぬ。只生を受け、それを持續して行くばかりで、爲すこともなく生を終りたくない。微力でも私の生活を意義あるものとして行き、後に私の半生を省みる時に、何の失望も不満も感じない程度に努力して行かう。つみ重ねられた藁によつて、私の今迄の短い生命は保たれてゐたが、限らない永遠の愛を堪へて、何時も微笑み育んでくれる日の光をうけながら、私には最早や頭が段々黄白くなつて來て、眼も頭腦もほんやりし出した。姿は見えないが村の童子が「お家忘れた小雲雀は。」葡萄酒の様に甘く歌つて通るのを聞いてうれし。此の秋の寂莫の敗殘者に似た秋の世界の一部に、強く雄々しくも生に對して躍動せんとして居る者のあることを知つて、にはかに大きな生一杯の聲で歌ひ返してやりたい氣がする。やがて最う四五度霜が降り出したなら、炎天の日に緑を誇つてゐた名もなき草の私の生涯が静かに深く地上にうづめられるでせう。けれど翌春は屹度心強い堅固な生活を産み出し

ませう。凡べての物を愛さねばおかないと云ふ力ある躰の腫があたりにもむけられた。  
「では今迄可愛がつて下さつた皆様、翌春に力と、意志と、愛を有つて華々しく蘇生して來る私を喜びで迎へて下さい屹度……。」と祈り終つた私は静かな笑を顔に浮べ、堅く手をくんで露を帯びた腫をちつと地に落す。それから四五日。後眞晝に、黄色から茶色に移つた芝草を食として横はる。  
あ、秋の野は静で淋しい。西行か芭蕉か、出て來なければゐらない、この静寂を野に眠つてゐる名を草の淡い短い生を祝福するかの如く潺湲と流る小川の音のみ高く聞ゆる。

### 幻影を追うて

本四 齋藤春子

過去！此の言葉を私が口にした時、私の頭には忽ちフィルム廻轉するにも似て、去りし幻影は次から次へ、寫つて行くのでございます。  
かつて過ぎし日の運動會に……旅行に……音楽會に、嬉々として立ち騒いだ私の体は、まあゐる幸

福に輝いて居た事です。

お、夢の様に去つた修學旅行！

深甚な碧空の下に、ゆくりなく咲いて、最後を飾つて呉れた運動會！

近くは又榮ある責任を兩肩に荷つて、Y町に行くべく車上の人となつた時！お、満腔の誠意と、同情とを以て指導し、見送つて下さつた先生達の事ども……  
幻影は限りなくそれからそれへと移つて、最後に残る一卷は、お、悲しみの送別會の其の場面！

年月海山深き恩愛のいや増しに増し行きし師の君、父の威厳にも似た……母の慈愛にも似た……あ、母の無い子は事更に感じられて、幾度涙した事か。日毎に慕しさの濃くなり行く妹達！、幾平學びし幸福の學び舎！

數多の連想を呼起す其の送別會の答辭の、如何に斷腸の思ひであるか、しみじみ思ひやられて、只涙ぐみうつむくのみ。

最後の幻影の終つた時、其處には自分と云ふ儚な人間の只一人、行く手の全く闇の路をさほくさ歩くのが、かすかにく寫つて居るばかり。

お、過ぎし四年の夢の幻影！

### 母ごありし友に

本四 中村芳子

秋の入江の陽は寂し。  
風はさや／＼輝けど、  
波はよる／＼見ゆれども、  
暮の心の切にして、  
昔間の鳥のしば鳴くか、  
秋の入江の陽は寂し。  
山本さん、和歌浦の入江の昔によりながら、短い秋の黄昏を二人はよく歌ひましたつけ。

秋の入江の陽は寂し。  
と、山本さん、貴女だつてあの頃を思出していらつしやるのではないでせうか。そして夢と過ぎし日の、あえかたる思出の数々を懐しんでいらつしやるのではないでせうか。お別れして一年と三月、でも私達二人は離れて行つてしまひましたのね。  
神共にいまして行く道を守り、  
天のみかてもて力をあたへませ。



又逢ふ日まで又逢ふ日まで、  
神の守り汝が身を離れざれ。

お互いの身の幸を祈りつゝ、コーラスした讚美歌の、  
メロデーは私の胸にまだはつきりと流れてますのに、  
私達二人は如何してかうまで離れてしまつたのでせう  
貴女から一寸もお便りがないうちに、私もつい御無音  
に打過ぎて居りました。そして貴女の御境遇があゝま  
で變りました事を私は夢にも知りませんでした。若し  
8様からお便りがなかつたならば、私はまだ何にも知  
らないで打過ぎて居る處で御座いましたわ。

山本さん 聲明か、「秋の入江」をよくお歌ひにな  
つた無邪氣な貴女が、一年三月のお別れの際に、處女  
から人妻に、人妻より母に、なつてしまはれたと聞き  
ました。十七のお母様である貴女は何時も、涙のか  
わく間もないと伺ひました。處女の日あまりに短く  
あまりに慌しかつた事を悲しく思つていらつしやるの  
でせう。貴女のお友達のすべてが矢張楽しく、學校生  
活を續けてゐるのに、自分一人は——と思ひになる時  
貴女の悲しみを量を増して行くのではないでせうか。  
山本さん、母の世界は私に解りません、しかし世の

下さい。白紙にあり得た貴女の生活に母云ふべんを  
握つて善のみを書きつゞけて下さいませ。

まれに人にして、貴女の胎内から出た小さい魂の爲  
に貴女は、若くとも母らしい慈みと強さと賢さを持  
たなければなりません。

山本さん、貴女自身は、なり得なくとも、貴女は、  
ダンテを、シルレルを、ハイネを、カントを、ベステ  
ロツチを、ミケランジェロを、ミレーを、大宗教家、  
大詩人、教育家、藝術家、あらゆる大偉人を育てる事  
が産む事が出来るぢやありませんか。さう思つた時に  
貴女はその涙をぬぐつてしまふ筈です、そして何人を  
もひきつけたいではおかね様な微笑を漂す筈です。  
母なる者が如何に尊いかお解りにありましたか？

### 或る夜

本四 竹内芳子

晩秋の風はすつかり木の葉の自由を奪つてしまつた  
庭の榎の木は常盤木の中に、はぢけた様な紅葉の色を  
見せ、櫻や柘榴の木は全くの裸木にされて、骸の様な  
Y字形を寂しく震はしてゐる。

母ある人が、自己の苦しみ、悲しみ、寂しさ等、すべ  
てを忘れて、自分の子の爲に幸あれかしと、祈つて居  
事だけは、明らかに知る事が出来ます。それでこそ「  
女性に弱し、されど母は強し。」と云はれもしたので  
御座いませう。

山本さん、貴女のすべての悲しみ、苦しみ、寂しさ  
等を打捨て、貴女が氣高く強い母として生きる事は、  
これから先の貴女をされだけ恵まれたものにする事だ  
せう。お願ひです。強く生きて下さい。たゞ一人の子  
を勇しく檀特山へ見送つた布施太子の母の如く、我  
が子を十字架に葬つて悲しまなかつた聖マリヤの如く  
。かつての日「秋の入江」をお歌ひになつたあの美し  
い聲で、やさしい子守歌を歌ひつゝ、生れ出た一つの  
魂を安らかに眠らして上げて下さいませ。

「吾人は追憶を抹消する事によつて幸福にゐれる。  
何故なれば追憶を抹消し得た白紙にむかつて、吾人は  
善を書く事も又悪を記す事も出来ぬから。」と、西人の  
誰かが申しました。山本さん、何卒貴女は、貴女の過  
去を忘れてしまつて下さい。追憶を抹消してしまつて

時々降る霰は側のトタン屋根をついて静かき開の夜  
に、空虚な音をたててはぢけてゐる。庭の燈籠に、圓  
い飛石に、植木鉢に、皆同じ形の霰がそれ／＼の音を  
たてて降つてゐる。けれど晩秋の夜は静かで寂しい。

夕餉を済ましてから、ぢい英語の下調を續けてゐ  
た私共二人は、かゝりな疲勞を覺えてゐた。けれどさ  
うしてかいつもの様に「わらいから少し遊びませう。」  
と云ひ出すことが出来ない程、お互がわりに緊張した  
心持で勉強してゐたから。その爲時間のたつたのさへ  
も知らない程だつた。黙つたま、それ／＼自分の事をし  
てゐた時、突然隣室の柱時計が十時をうつたのには、  
驚かされた。何時の間にかこんな時がたつたかど、全  
く怪しまれる様だつた。でもとにかく、時刻が時刻な  
ので、Tさんは急いで包みをさけて歸られた。私は門  
口まで彼女の歸りを見送つて、一人、友のうすれ行く  
後姿を眺め乍ら、立つてゐた。心持赤くほてつた頬に  
冷たい夜風がサツトさはつて、さうと逃げて行く。と  
又次の冷たい風か面をなでて、過ぎて行く。ボーとし  
た頭もこの風の一回一吹によつて、だん／＼はつきり  
として来て、すつきりとした心持になつた。



街は雨の降つたためか、いつもより早く戸の締つてゐる家が多い。人通は一寸もない。只向ふの理髪館から洩る面白さうな笑ひ聲も、明るい灯りが浮いた様に闇の中を、彩つてゐる。けれど雨のために、一時でもこんな静かな街にせられた事がうれしかった。

空には雨後の星が数しれない程薄山散らばつてゐる。空には雨後の星が数しれない程薄山散らばつてゐる。そしてすべての物に、この美しい光りを見せなければやまぬ云ふ様に、各々が競つて青白い光りを地上にまけてゐる。その中で只一つ火星のみが異つた黄色い光りを恥かしさうに瞬かせてゐる。邊りの家や植木電信柱等、すべてが晩秋のしつとりした寂しさの中に包まれてゐる。私はこれらの景色の中でほんやり、何か考へてゐる様な、それでゐて、何か考へながら夢の中でもさまざまつてゐる様な時を無意識に過してゐたが——ふいに女中の呼ぶ聲に想は破れて、思はず自分にかへつた。すつかり体は冷たくなつてゐて、粟粒の様なものに手に一杯出てゐた。深く静止したこの空気を動かさない様に、そうと門を閉ぢて内に入った。

## 秋の夕

實二 小田文子

何となく心寂しい夕方です。室には誰も居ない。電燈はさびしさに暗く光つて居る。私は静かに窓にもたれた。秋は冷たい風はそよ／＼と木の葉を散らして居る。庭の木々も紅葉して、風のまに／＼ひら／＼と落ちてくる。

先日までは青々とした緑色の葉をつけて居た木も、最早冬の仕度をして居るのか枯れた如くにあり、寒さうに風の爲にふるへて居る。松の根には、つぼみの花が咲き誇り松に風情を添へて居る。向ふには棕櫚の葉が扇の如く手をひろげて薄暗い雲を背景として居る。私の心には南洋の如くひらめいた。我が故郷はあの雲の下ではなからうか、俄かに家が戀しくなつた。父母は如何に私達の事を案じて居られるだらうか、あの可愛い弟は今何をして居るだらうか、でも歸られない、もう何日あるか知ら。卅幾日。此の間がほんどに待遠しい。

今あゝ一學期で卒業。思へば胸がドキツとする。今

## 秋の夜

實二 小田マツ子

までは我儘に生活して来た私が、あの複雑なる社會へ飛び出なければならぬ。修養の足りない私はどんな運命に陥るであらうか。思へば心細い。でも一心さへあれば岩をも透すぞか、私はあらゆる力をつくしたい。が我が愚なるを思ひ出し、いつか涙はほ／＼を傳つた。でも出来る。あの英國のビクトリア女王、彼の女王は女の身で偉人の中に入つて居られる。又リッコンが未だ幼時、或日思ふ様、合衆國を統一し、國父として仰がれたワシントン、彼も人であり、自分も人である。以上は及ばない事はないと心づき奮發したといふお話がある。

一旦人生を上げた上は、少しでも國家社會に盡さねば甲斐はない。大事が出来ねば、小き事でもよい。日常に於ても善をする時は多くある。陰徳程高尚で崇高なものはない。かゝる機會の多い人は幸福である。それからそれへと想ふ中、いつのまにか夜のどぼりば周囲を包んで居た。ジャン／＼／＼自習時間の鐘。私は静かに机に向つた。然し何も手につかない。

大波小波がザア／＼と吹き寄せて居る夜、私はなんだか今日に限り心淋しく、机にもたれても勉強は手につかず、色々、故里等のことが思はれてならなかつた。ふと外を見れば、月は青白く硝子窓を射通して居るにあらがれて、遂に窓を開いて外をみれば、氣持よい秋風はサーと我身に浸みこんだ。澄みきつた御空にキラ／＼と光る星。阿武の堤の草木の葉蔭には、かはゆい虫の音も物哀れに聞え、あんだか物思に沈ませる夜の夜でした。虫の音も聞けば聞く程我身を思はせるやうであつた。草木に結んだ白露も、風鈴の音と共に、消えたり、現れたりして、なんだか果敢ないやうな氣がした。色々考へて居る内に、あ、今日は九月二十五日、二十五日、私の胸の中に永久にきざみこまれた日。

八年前にあの草木に結んだ白露の消え行くと共に、此の世を後にして永遠の眠に就いた母の命日であつた。思ふと熱い涙はどめきなく頬を傳つた。色々と思



うて居る内に、母の顔はあり／＼と目の前に現れたので、お母様、お母様と叫び、大きい目を開いてみれば、もう影もかたちもみえない。ふとあたりをみれば、静かかて虫の音も聞えず、唯々風の音のみであった。静かに心を取直し、遙か遠き故郷のあの岡の墓地の中に入ります母を心からおがんで、静かに寢床についた。あ、なんと言ふ淋しい秋の今日の夜。

### 貯金

實二 藤原幸子

人はいつ病氣になるか、何時どんな災難が起るか知れませんが、常に儉約をして貯金をして置かなければなりません。今日さへ食つて居れば宜いと思ふやうな精神で、貯金も何もせず、不時の難に備へる丈の用意のないものは、いざとなつて途方に暮れなければなりません。

貯金は一時に多くしようと思つて居ても、あか／＼出来るものでないから、いくらづつでもかまひません。「座も積れば山とある。」「大海も一滴より。」「千里の道も一歩より。」と云ふことは貯金をしようと思ふ人

のためにはまことによい教であると思ひます。

### 行く秋

實二 阿武トシ子

松蟲鈴蟲の愛らしい美音も、秋が益々深くあつては聲かれ／＼となつて、哀れ枯野と同じ最期を遂げるやうになりました。心細い冷やかな肌に沁む晩秋の風に地へ兼ねて居ります命短かき朝顔の花の、日一日と衰へて、今は蟲達同様の哀な姿となりました。すぐ傍の垣根の野菊は誇り顔して濃淡を争つて居ります。榮枯盛衰とは、誰が云ひ初めたのでせうか、あの美事な菊の盛りも、だん／＼と末とあつて、木の葉に紅を含み人の心を浮き立たせる景色も僅の間であります。霜降る様になつては、樹々の梢も、峰のくす葉も身を切る寒い木枯に、あわた／＼しくはら／＼と散るも亦一入哀であります。

### 紅葉の頃

實一 大田和子

夏も何時しか過ぎ、紅葉の頃となつた。

殆ど紅葉した四方の山に、常磐木の只一人緑色をして立つてゐるのが目立つ。時々吹く強い風は紅葉をばら／＼と散らして行く。「お、あの八幡様の銀杏の葉も大分散らされたことであらう。」田の稻も最早刈り取られ案山子の姿も見えなくなつた。何となく物淋しい道行く人もい／＼淋しげに見ゆる。

冷めたい霜は何時の間にか落葉の上に降つてゐる。或霜の朝私は手を懐に入れて落葉の上の霜を踏み付けながら、道をいそいでゐると、冷めたい風が颯と吹きつけた。急に冷めたい空気を吸ひ込んだので鼻は何と云へない程痛い。目には涙が一ぱいになつた。あたる木の葉はザア／＼と音を立て、吹き飛ばされてゐた。其の内に風はどこかへ行つてしまつた。鳥のガア／＼と鳴いて行くのも、どこどこと淋しく悲しい。冷めたい風はさめさめと吹いてゐる。綺麗な紅葉も大分散つた。

### 冬の或る夜

實一 中屋マサ子

いつしかうすき絹の様なきぼりに包まれて、あたた

りは刻々と暗くなり行く。一しきりざわめいてゐた食卓もかたづいて、冬の夜はしんとしてゐる。月が出た外に出て見ると、透き通る様に清く、底光りする月が皎々とか／＼やいて、白晝の様である。冬の月は凄く美しい。

ざわ／＼と葉すれの音が、氣味悪く山の方から聞える。ひゆつ／＼と風がふいて来た。「お、寒い。」と思はず肩をすほめて急いで家に入った。内では母が仕事をして居られる。此の間からの縫いかけをしようと思つた。母のそばに座つた。時計がチン／＼と九時を報じた。突然何處からともなく、「ワンワン……」と犬の遠吠えが聞える。二人は氣味悪さうに、顔を見合せて。淋しい夜だ。犬の吠聲は止んだ。其の後は物音一つだにしない。

### 診察

實一 小野千代子

診察を終られたお医者様は、小さな手鞆の中へ検診器を入れながら、しきりと小首を傾けて居られる。「あ、そんな病氣だらう。」と私は心配でならなかつた。



胸はドキ／＼と早鐘をつくやうである。暫くするに、お母さまが金盥を持つて這入つて來られた。

先生は脊廣の服の裾を後にたぐり、ポケットから白いハンカチを取り出された。

お母様も心配さうな顔付でお醫者様の顔を見詰めてゐられる。

お醫者様は手を綺麗に洗つて、それを丁寧に拭ひ上げ、両手を組み合せて、膝の上におかれた。

さうしてお母さまの方に振向いて小さな聲で、「すぐ濕布をして上げなさい」。とおつしやいました。

私はハット思つてお母様のお顔を見ると、お母さまも私の方を見詰めてゐられる。

「去年妹が肺炎になつた時も濕布をしてゐられた。すると、私もあの怖ろしい肺炎ではあるまいか？」

と思ふと、何ともひへぬ心細い心持がする。

お母様は恐る／＼お醫者様の方を見て、

「ではやつぱり肺炎でせうか。」と尋ねられた。お醫者様は如何にも氣の毒さうな顔付で「肺炎が悪いやうです併し大した事はありますまい。」

と私の方を氣兼ねして答へられた。さうして暫く私の方をながめてゐられたが、「それではよく氣をお付けになつて。」と

挨拶しながら立上られた。

私と母さまとは思ひ合せたやうに顔を見合せて、暫くは何の言葉もあかつた。

### 秋の眞夜中

實一 末永満子

ふと目を醒した。障子を明けるに外は眞黒だ。冷い木枯がびゆうびゆうと顔に當る。外庭の木々は風の爲さわさわと悲しい音をたて、居る。向ふには宏莊を建物が魔のやうにつ、立つて居る。私は思はず恐ろしさで寒さの爲に窓を閉めた。蒲團をかむつて目をつむつて見たが目の前に色々の幻が消ねたり、現はれたりする。室内はシーンとして何一つ音を立てない。唯この静寂を破るものは時計の音のみである。故郷を思ひ友を思ふ此の夜、私の胸は無限の生の喜びに浸り幸福に満たされて居る。

### 友

實一 津田幸子

「人間の行く所座す所必ずや友あり。」と言ふ事がある。

我々の生活は、群居を離れて孤立する事の出来ぬのは生れぬ先きの約束である。共同生活をするからには相寄り相扶けて行かねばならぬ、故に友達の出來るのは自然である。

此の自然に出来る友……その友は百人百色で、千差万別であるが、これ等の内より我が眞の諒解者を求め友となし、その友に對しては本校にても設けある所の自治會の精神を以て接し、互に正しい道に進み立派なる日本女子として立たなければならぬ。

一旦友と交を結びたる以上は、その爲に身命は失ふ事があつても、友を捨つるが如き様ではいけない。水は方圓の器に従ひ、人は善惡の友による。

あ、この言は少いが意は深い。誠に善く其の道理をあらはしたる言葉である。

友達より受ける影響は善惡共に大で、深く食ひ込む

ものである。注意すべき事である。

### 初冬の或日

實一 渡邊スミ子

夢うつつに楽しい秋ももう去つて、もはや初冬となつて來た。此の頃は身をきるやうな北風は、遠慮なくブウ／＼と、吹いて來る。

雪も一週間前からバラ／＼チラ／＼と降つて來るので、人間もこたつにばかり丸くなつてはいつて居るやうに寒い氣候である。私共もこたつにばかりかぢりついで居る程寒い。

あちらこちらの山や野原は風におとされて死んだやうにちぢんで居る。田を見ると稲や麥が寒むさうにたほれて居る。

雀は寒むさうに巢にかくれてでて來ないので百姓さん達は喜んで居る。木の葉は風に吹きはられてしまつて、まるで枯木のやうになつて居る。夕飯にあること、カラスはカア／＼と自分の古巢へ歸つてゆく。

百姓達も肩にくはをかついで急いで我が家をさして歸り、私は夜になると、机に向つて讀書をする、わ



づか遠くの方でワン／＼とあやしげに犬の聲が耳にはいつて来る。  
ふと時計を見ると、チン／＼と十時をうったのですぐに床についた。

### 机上の菊花

實一 山下綾子

私は菊の花であります。五、六寸延びた頃、体を切られて女学校の西の園にさしこまれました。根も葉もない私は、ごんなに淋しく泣いたでせう。その時慰めてくれましたのは梅雨であります。シト／＼と降る雨は私にとっては非常に慈み深い親の様にうれしくありました。其の情で根も出来、芽もふき出しました。かうして私は次第／＼に朝夕の露をうけて、一寸延び、二寸延びする内に夏の日照が来て、私は身も体もやるせぬとき時、朝／＼に水をかけて手入をして下さる生徒さんたちを世の助け神と仰ぎました。或る時は先生までも私を可愛がられて、小さな私に一掬の水をあたへて下さいました。やがてよき花を咲かして見せんとして居る内、風雨にさらされて倒れるのを生徒さん

んに助けられ、遂にそへ木までして貰ひまして、大切にされました時、私は小さな／＼蕾を持つて居ました。或朝晴の氣持よき時、仲間の大きい菊は既に其の蕾を破らうとして、晴れ渡れる秋空にしない姿をして先生や、生徒さんより、是れが一番早く咲くとほめられました。やがて生徒さんの一人は私の小さなのを見ても、「可哀さうに、此の菊はまだ小さい、今少し手入れしてやらう。」といはれました。やがてその生徒さんに一錢の値で買ひ取られて、其の生徒さんの机の上でさされました。朝夕にやさしいお方に愛される此の私何と幸福でせう。雨も風もなく静かな書齋。私は愛の慈みに露うけて綻びかけた此の蕾。  
私はうつくしい花を開いてこの親切な生徒さんを喜ばしてあげねばならぬ。私は何と幸福でせう。  
恵まるる露の情けに咲き出でて  
君慰めんわがさだめかな。

### 歌

あ さ 本一 廣瀬ミヨ子

ひそやかに雨戸あくれば秋風のそと吹く朝の心地よきかな  
亡き父の事等姉と語りつゝ、歸る夜道の淋しかりけり  
濕りたる土踏みしめて唯一人我が行く道を荷車の行く  
つと立ちて庭に出でしに虫の音のはたと止まりの秋晴の夜

夕の野道 本一 伊藤芳子

秋の日夕露の野道を乙女らのかへり行くなり物いはすして  
にぎはひし巷は早く戸を入れて月訪づるゝ家もなきかな

勤 儉 本一 山田道子

うるたへて袖とおくみなまちがへた靜江子さんの袋はりかな

勤儉は心の糧よ身の糧よ美しくしきものよ尊きものよ

か ゃ し 本一 高村文子

かゞしには目もない手もない耳もない足もない香氣たらう  
かゞしさん赤いおべが嬉しいの雀もおはす立つて居るのれ  
うつくしいうす桃色の山茶花よろつてはいけないいつまでも

柿 本一 高橋美知子

裏庭の柿赤々とうれにけり私も仰ぎぬ姉も仰ぎぬ  
初冬の日影にぼてる窓あけてしすの嗚聲遠くきかな

は す の 葉 本一 野村繁子

雪間より出でたる月のきら／＼と水にうつれる姿美しくし  
朝顔のつるにまかれたはすいもはくるしがるらん首投けてあり  
しと／＼と降りては止まぬ秋雨の中に立ちにき物思ふ日に

秋 本一 木下美恵子



ゆるやかに流れに浮きし木の葉舟風吹く度にする／＼と行く  
かなたなる堤の櫻咲く頃を思ひ出しぬ木の葉散る秋  
小石つむ舟に乗りたる人々の聲ほがらかに聞ゆる来るなり  
午後日は斜にてりて水白し小魚の脊中白く光れり

秋 深 み 本 二 末岡ハナ子

せせらぎの川に遊べる日鳥の水に浮べる舟に似し哉  
潮風の高く聞ゆる草影に虫の音侘し星少き夜  
草影の虫の音清き星月夜五位鶯高くなきかはすかな  
蜘蛛のいに掛れる露の輝ける朝日に玉は薄く色づく  
銀杏葉の月に輝く夜半の露風吹き来て哀れ散りぬる  
乙女子の清き血潮のおどるる秋の夕は暮れにけるかも  
紅葉ばの血潮の如く色つきて清き小川に影うつし居り  
清らけき阿武の波間を染めにけり赤き血潮の陽の輝けば  
風強き雨の夕べは物悲し鳥の山に歸るを見れば  
風強き秋の夕べの山の邊は木の葉散りしきあけに染りぬ

コスモスの花も清らに咲きにけり乙女の心見するが如く  
水のごと澄みぬる空に輝ける月の光に涙する哉  
虫の音の侘しき夕べにおのづから涙き涙の星に輝く  
コスモスの素直に咲けど摘みとりて瓶に飾りて涙拂ひぬ  
うら若き乙女に似たるコスモスの露げき花を愛する朝かも  
うら寂し秋の夕べの虫の音の叢に聞ゆる夜深みゆく  
夕日うけ南天の實は珊瑚珠に輝くさまを縁に眺めぬ  
美しきいばらの花の清らけく朝日に香ふ秋の山べに  
秋深み白き呼吸の見に初めてそまりし木の葉果なくぞ散る

幼 き 惱 み 本 三 大谷ハツ

紅に花園もゆる春の色乙女の胸の血しほなりけり  
春の日も厭のほごうかす多く卯の花白し思ひわびしや  
なつかしの春ゆく夜なり雨降りて青ばむ小葉の露したりの  
白露の寒さにふるふ明方の空の彼方に星ぞ流るる  
月無き夜宵待草の咲き香る墓場に見ゆる憐の花

朝こく妻戸を繰れば山々はさざりこめつ、秋やたちそむ

山遙か彼方にけぶる白煙に祖母やいますと涙せし哉  
我がゆける夕の路はいさ淋しほのかに匂ふ萩の香よ  
さ、やかな風吹くたびに櫻葉は秋の墓場に一葉ちりけり  
くすぶれるまごしき家の冷めたかる空氣かららに春ちかづきて  
セコンドの小刻みの音深かければ幼き惱みのくるほしき夜や  
柿の葉の紅せし日ひそやかに残りたづぬる我にしありき

春 の 山 本 四 村上喜代子

春の山おぼろ月夜にてらされて巨歌の如く伏して居るかな  
黄菊のゆかしき香にぞ引かされておのづこ鼻に口づけてみぬ  
さねわたる月の光にさそはれて一人ゆくなり秋の岸邊を  
琴の音に虫の聲々あひながらくられてゆくなり秋の夕暮  
婆さんは春の夕日をあびながら小猫と共にいれむりてそ居る  
春の野を心ゆくまであゆみてそ己が願の一つをまげん  
去年の冬友のおくりし水仙は小さき緑の葉を出してぬ

夏より秋へ 本 四 齋藤貞子

海洋のその奥深くかゞやける真珠の如き心もつ人

あなあはれかしましかりし虫の音も吹く秋風と共にきゆく  
ばら／＼と庭の草木のゆる、聞にはや月かげのさす秋の空  
淋しさのあまりに空を眺むればやさしき月の我を待ち居ぬ  
白薔薇は松の緑を背景に頭をかき上げて竹に寄りぬ  
初雪の降れば寒さに戦きの両手を火にかざすれどなほ  
俄にも風戸棚の後からかさこ音す秋の真夜中  
友垣を別れて五年あまりにもはやき年月いつか過ぎぬる  
いづくより洩れ来る琴か身にしみてあはれ催す秋の夕暮  
團扇にてあふげごなほもたへられ汗の流る、夏の苦しき  
湯浴みたる体を風に吹かせつ、團扇をさればいと氣持よき  
鉢うみの三すばかりの風の木秋たげれば紅葉するかな  
はる／＼と故里はなれ來たる身は昔思へばなつかしきかな  
阿武川よいましの如くおだやかに流しぬさせよ我が思ひをば



多多く且美しき若き身の何故厄となり給へるか

夏来る日蚊帳のされ等取出してまるき盛の籠作りけり

晴れ渡るみ空の星を仰ぎみてすぎし昔の思ひ出に笑む

北海の小さき町に君ありと告げし人あり逝く夏の午後

風吹けば銀紙ひらめく如くにも秋のはじめの空のかまやく

瞳くろく指の眞白く細かりし彼の桃割れの人今やいづこに

星月夜麥笛ならす里の子の影おぼろなり牛車くらしも

かごに立つ旅藝人の三味音もあはれにさびし秋にしあれば

秋來れば彼の古沼の杉の根にきつれのぼたん黄に咲く云ふ

海、海、海憧れて来しうみなれどあまり背きに涙ながるゝ

夢多き少女の頃ははれやかに過し給へま宜ひし人

山背く路の眞白く美しき桃山の地はゆめに忘れず

憧れてあくがれて来し旅なれど母やなつかし縁のゆふべ

物皆のみどりの色もおほはれし山のみち行く旅人となり

くれてゆくたびの夕べは淋しかり彼方の山に陽は燃ゆれども

うつくしき光ながるゝ夜の町京の舞妓のながき振り袖

墨髪に銀かんざしのきらめきとみづにてあひし美しきひと  
みどりよし若草山になく鹿の聲もうつくし五月の奈真よ  
在りし日に君愛で給ひし花と云ふ旅にしてみし紅の花

落葉 本四 武居榮子

はうきあまた新なる土の上に紅葉二ひら落ちにけるかな

虫の音に我さそはれていで見れば高き楯に月ぞかゝれる

本四 井本夜思子

淋しさに寮の小窓をあけぬれば月影あはく虫ぞ鳴きある

なつかしき君の傍もさめんそそろ歩けば三日月は落つ

淋しさに小箱あくれば君が文字思ひいでてはうつぶしぬ我は

故郷を遠く離れて来し二人秋の夕べにさゝやきてゐる

我が愛づる君の淋しさこころごとく封じこめてさ君は頼むも

戀しさに東のみ空眺むれば一羽の鳥啞々々鳴き行く

オレンジの花咲く里の夜の雨銀座通りのそまろしのばる

思ひ出にせんご君はたのめども總べて拙き我ぞ悲しき

淋しさにローマ字綴りて消しゆけば思ひしつゞりあらはれにけり

今日も又障りなかれさ君が身を祈りながらにトランプぞする

戦きなひしと抱いて繰り見ればダイヤの神は守り給へり

佛を面影山にもさめしに佛見ぬで月落ちかゝる

紅の椿 本四 宮内マツ子

あまりにも夕しづかにありければ聲ひくうして路を行きけり

過去故にかなしき過去を作り来し昔おもへば悔まるゝかな

紅の椿このましその色の我思ひひにほのかかよへば

さめさらぬ夢を思ひて出しにはに椿の紅の思づきてあり

さびしさはこのまぬ人をいつわりて愛する友と手紙かく時

かりそめのいさかひなれど氣なかれて聲をひくめて本を讀むなり

手紙書くいさこの春な夕日てり心のどけき春の夕よ

ひよこみつわらべのこころよるこびてある兄見れば悲しみのわく

春日てり青葉光りてこよなくも我學びやのにはは美し

思ふまじかなし過去故一時のこの一時のかくもさほさき

何ものも受けいれなむとさるこさき夕の空をあほさてぞたつ

晩春の夜はしすかに更け行きてオレンシ花の散る音ぞする

たのしかり夏の一夜はうれしかり我思ひさへ忘れはてゆき

忘れにしばりてみぬ晩春の雨だれの音のむれにしむ時

歌作る夕はかなしきさびしさのむれの思ひをあらたむる故

もろさにも同じ世に生き死のる身はみしらぬ人になつかしみわく

死てふもの考へてよりにくしみを持たなくなりぬ小雨降る宵

月おちてまくらなる夜にはじめてぞくしくさほさき星を知りにき

いましばしこのやみの世のつゞくこころ願ひつ背き星のむれみぬ

何かなしたのしきとあるらしうあすさ云ふ日ひこひまたれぬ

本よむもふかくもうしとなげすて、たかき夜空に手さしへのぬ

愛になれむりぞ知りつゝ、我まゝを我母故にさほしてみなき

みこころにそはむさ夜はちかひしにあくれば又も口ごたへする

いたゞじやつれし母のかたみればこの世故には死なむとぞ思ふ

ふさ母を思ひ出でてはやるせなくたゞわけもなくさびしうなりぬ



ものかなしこの世の外のものも我ひ下すらのたよりならねば  
そつこ亦あしき思ひのよみがへり吾をいたう友しいたげてみし  
ただ純にただきよらかにあらむためただあらむため祈りをぞする  
みか月のかそけき光我まごにさし入るみへり物を思へば  
思はれどまぶたのうらのあつくしてふさものかなし秋たそがれて  
摘みさりし花さその色くらべみぬ秋ふけにける野の道を行き

秋 來 ぬ 本 四 中 村 芳 子

別れ來し友の一しほ慰ばれぬ白萩のさく秋さしなれば  
紀の川の堤の干草おし分けて一きわ目立つ撫子の花  
嬉しさは化粧してひく琴の音の冴へて遙に流れ行く時  
口惜さはかへらぬ人のつれなきを秘めてひそかに悲しめるこゝ  
淋しさはうす藍色にうなだれし露草の花一人見る時  
父逝きて三度の秋に逢にけり今年は一人こゝに泣かまし  
父思ふ朝は悲しも遠寺の五つの鐘のなりひゞく頃

我がせこは物な思ひそ事しあらば火にも水にもわれねけなくに (萬葉集)  
君を置きてあだし心をわれ持たば末の松山波もこゝねなん (古今集)  
風ふけば沖つ白波立田山夜半には君がひさり戀ゆらん (古今集)  
神風の伊勢の濱萩折りしきて旅寝やすらん荒き濱邊に (萬葉集)

詩

悲 しい 身

本 一 静 間 芳 子

淋しい今日も暮れました。  
私の小さい胸よ。大なるなやみが湧きました  
たれも知らない悲しみが  
たゞ一人或人だけが知つてます  
其の人もやはり私と同じ事  
二人は互に泣きました  
同じ身上の不幸さを  
かたらひながら泣きました  
私は淋しい一人ほつち  
たよる人をき悲しい身  
舎の前の庭のすゝきがゆれました  
寒い夜風の吹く度に!!

金 魚

本 一 落 合 八 重 子

お池の金魚が赤い尾をふりく泳いでゐる。  
お目はつちりとひらいて泳いでる。  
そしてかへるがまびこんだら、  
赤い尾をふりく目をつぶり、  
おののくく逃げちやつた。

す め

本 一 中 村 ト ミ 子

かはい、すゝめなぜなくの、  
母様どこへいらしたの、  
坊やをのこしてよその村へ、  
それはまあ、かはいさう。  
おやきにかへつてまちあさい、  
母様すぐにかへりませう。

誓 ひ

本 三 清 須 イ ト



貴女は言つた固い誓ひと、  
私は答へた何時までもと、

お、それが  
海邊の砂の様に

何の反抗もなく、  
何の名残もなく、

する／＼と  
其の形を消していつた。

私は恨んだ、  
泣いた喚いた。

然し今となつて  
誰を恨む事も無いのだ。

なぜなら私は  
貴女を理解して居るかつたから。

### 我が心の閃

本三 石田久子

一我は乙女よ望充つ

問ひますな世のうきふしを  
學識なき身を修めつ、

遠き志望を得んために

二我は乙女よ望充つ  
問ひますな世の風潮を

希望の二字を心にて  
勉め行く身の我身なれ

三進取のなきを問ひますな  
日進月歩の世のあした

競走激しき世のゆふべ  
勵まざらめや此のかひを

四進取のなきを問ひますな  
波浪逆捲く世のあした

樂あれば苦ある世のゆふべ  
勵まざらめやこのかひな

五生れし聖世にかく立ちて  
廣き洋にぞ漕ぎ出す

乙女の力は唯一つ  
渾身の努力を花として

### 迷路

本四 久志アヤ子

### 逝く秋

本四 大山あさ子

「母様何處に……………」  
「姉ちゃん淋しい。」「私も悲しいよ。」  
二人の憂ひは果てしなく、  
木の間をくゞり、くゞつても

さちらをむいて眺めても、迷はどかれず。  
果てしなく細く迷の路よ。

「嗚呼淋しい、姉ちゃん私も。」  
空を仰ぎ地に伏し、

囁く梢の音すらも怪し悲し此の迷路よ。  
今日明日と朝に夕に歩を運べども、

何處まで細く迷の路よ。  
家なし、人なし。

唯、淋しく囁る迷の鳥のみ。  
憂ひに沈む其の聲も水に濁れた聲故に。

迷路は無限に、響きは狭き其の爲に、  
誰をたよりに唯二人。

「姉ちゃん悲しい。」「私も泣いてよ。」  
果てしなく細く此の迷路。

「母様何處に……………」  
迷路は果てしなく細く。

更け行く私の風寒く、  
孤燈のほのほゆらぐなり。

曉靜かにひゞき来る  
寺院の鐘の悲しくて、

かそかに聞ゆわくら葉の、  
散り落つ音のうら淋し。

蟲の音最早やさびれ行き、  
切れん／＼なるも秋寒し。

いと悲しく耐へ難く、  
小窓開けば山の端に、

下絃の月の懸れるも、  
疎に見ゆる星影の、

光は寒くまた、きて、  
こゝとわれには耐へ難く、

すべては秋に包まれて、  
あ、秋の名の胸に滿つ。



限りなくうれしい夜

本四 齋藤貞子

土曜日の夜は、限りなく愉快でうれしい。  
おさへても、あさからあさから、  
桃色に似たよるこびが押しよせて来る。  
何と云つても嬉しい夜、  
學科のおさらひもよして、  
自分の好きな本を読む。  
あんな愉快な時はない。  
時なんて観念は、全く何處かに行つてしまつて、  
何時迄もよみ続ける。  
無暗やたらに嬉しくて、  
讀みたいだけの本をよむ。  
小鳥の様な自由と、  
純真な解放を許されるのは、  
一週の中で此の夜だけ。  
あつかしいお友達へのお便りも、  
かうした夜の空氣の中に生れる。  
軽い夢想は、飽くことを知らず、

胸の中をゆるやかに、流れてゆく。  
若き心は、それからそれへと、  
無限な世界に伸びようとする。  
魂は躍る。

土曜日の夜は、  
ほんとうにうれしい。

晩秋

本四 齋藤貞子

晩秋の日に 細き雨降る  
散り敷きし落葉の上に、――。  
眞白なる山茶花の  
美しき夢の花辨ふるはして、  
あはれ あれ その花に似て淋しき心、  
若きわが十七のゆめ、  
そと物語れ白き花よ、  
晩秋の空 細く降る雨にぬれ。  
わが魂は泣く。

笛の音

赤き獵衣を讀んでる時  
優しい銀笛の音が  
夜の静けさから震へて来た。

本四 村上フサコ

お、！銀笛よ!!  
甘い悲んみにおほはれた私の心  
ふと思ひ出づ――  
ありし日の樂しかりしを  
あ、懐しの笛の音!

すつと二階の窓を開けば  
淡い月の光を浴びて  
黒い影が  
やがて笛の音と共に  
消へて行つた。

幸なる日

本四 村上喜代子

幸なる日はゆきぬ、我が幸ある日は。

幼き夢に守られつつ

我は來にけり、さちなる道を。

幼心にいだかれて、

恵み多き秋の日は、

たのしく遊べり、あの山に。

平和を春のあの日には、

たのしくおされり、あの野べに。

幼心にいだかれてこゝまでたどり。我が道なるを、

たのしき秋の夕をも、

平和にみちた春の日も、

たゞ流る、川のごと、

たゞ幸なる幼き日を

偲びにまかせて思へども、

はやすぎけり、幼き幸は。

するにまかせて來は來たが、

これより先の我が道は

苦につ、まれたる暗なるか、

はた再び輝ける幸なる道か。

あ、我はこの二つを如何にか進む、

わがゆく道はいつこにあるか。



あゝ……………

詩 二 篇

本四 長井アヤ子

丘のさち

幸福はぎこにあるのでせう。

ね、ね、あなたは  
他人一倍に、

幸福な少女になつて下さいよ。

荒野に咲いた  
のぎくのごと

淋しくはかない  
あゝたでしたもの。

友はかたく手を握り、  
泣いてたわたしに言ひました。  
まだうら寒い三月の  
寂しい丘のごとでした。

でも、でも、わたしは！

幸福はぎこから來るのでせう。

雨あがり

本四 長井アヤコ

青空がのぞき出した。  
陽は照る。  
雲は照る。  
きん色に照る。  
木が光る。  
葉が光る。  
きん色に光る。  
そうして風も光る。  
すべてのものが、  
やはらかい、  
きん色におおる  
雨あがりの夕の一瞬間。

修學旅行の記

本四 神

代 照 子

「お起き。」と誰れかの呼ぶ聲に目を覺した。あ！今日は五月五日だ修學旅行に  
行く日だ。私の頭には電光の如く閃めい  
た。飛び起きて第一に窓を開けた。併し  
空は一面曇つて今にも降り出しさうで  
ある。昨日からの雨で如何に晴れるさ  
思はなかつたけれど、やはり曇つて居る  
のは憎らしい。母も出て來られ、心配し  
て居られた。私共は別動隊として自動車  
で行くけれど、徒歩で行く人は随分氣の  
毒である。洗面を済まし髪を結び、今一  
度荷物をしらべて朝食に着いた。皆さん  
が路々の注意や、宿へ住つての注意をし  
て下さるのを有り難く心にうなづきつ、  
朝食を終へた。私はこれ迄も長く旅行す  
るので、今度の旅行もめづらしくは思は  
なかつた。けれど團体と言ふ事が非常  
喜しく又愉快にさせた。「先生に御心配  
を掛けぬ様に氣をお付け。」と云ふ聲や  
「行つていらつしやい。」と云ふ聲に送  
りながら出て行つて登校する私が

餘り早く行くので近所の人は驚いた。併  
し旅行を知るまアお楽しみでせう。一  
方皆さんお早  
う。「お早う。」と言ふ言葉も何だか喜  
しさに響いて居る。其の内にだん／＼  
皆さんも集まれ、玄関前に集つて自動  
車の来るのを待つた。  
やがて自動車は來た。もう其の頃には  
通學の皆さんも多量に來られた。やがて私  
共は自動車に分乗した。諸先生方が「お  
大事に行つていらつしやい。」と一自  
動車の窓から言はれ、又通學生の方にも  
送られ、先生の朝の美しい景色を左手に  
した。阿武川の朝の美しい景色を左手に  
眺めながら自動車は疾走した。愉快！愉  
快！團体なるが故に私の胸は益々満ちた。  
少し行くに雨も降り出して、左  
に乗つて居た私の左頬は雨からしつさり  
と濡つて來た。私共は常に中心に向つて  
お互に今朝の話や、又汽車についての注  
意や、嬉しさを話し合つた。それにあき

るま皆歌を唱つた、校歌も唱つた、又應  
援歌も唱つた。歌にもあきらま又話し出  
した。「歩いて行かれる人は氣の毒ね。」  
「何故女學校の修學旅行には雨が降るの  
でせう。」……車内は静かになつて寝た  
様になつた。私は周囲の景色を眺めた。  
私は幾度も此處を通るけれど、雨の日に  
通るのは初めてである。雨が降るので、  
層山の新緑は濃く綺麗に私の目にうつ  
た。不圖私に隣のmさんを見た。眞青  
な顔してふせておられる。「氣分が悪い  
ですか。」と問ふさうなづいて居られる  
前の人に話し掛けたけれど、元氣がない  
……佐々並の市に出て、或旅館前で停  
つた。「何卒！氣分の悪い方は下りて、こ  
ちらにお出でなさい。」と運轉手が云つ  
たので、私共は車を出て庭に入り、庭の  
内を流れる川水で顔を洗つた。冷たい  
水で氣持が良かった。再び車上に乗つた  
時、運轉手が「貴女はおさなしいから  
氣持が悪くなる懸いで御寛ぐなほるか  
ら。」と云つた此の頃は益々雨がひび



く、運轉台に乗つた私は大變寒くなつた。八丁越を通る時は勇壯であつた。下を疾驅する先頭の自動車、後から来る後の自動車。「追撃！」と誰れかが叫んだ。霧の様に青い新緑の山。下を流る、緑水もう實に美しい景色である。此處では車内の沈黙も破れ唱つたり景色を眺めたりした。あ、ほんとうに勇ましい八丁越の景色。暫くして山口町に着いた。私には以前と餘り變つて居ない様に思はれた。香山閣・縣廳・公會堂・管所・縣病院など自動車で見物し、後自動車と別れ、洋傘一つ持つて雨中を龜山公園に向つた。公園からはかなり山口町を臨む事が出来る。左手に見ゆる白い洋館建は高等學校並んで右手のが縣立高等女學校。こつちが師範附屬小學校。此の下の運動場は高等商業前の運動場など。さすがに山口は學校が多い。他縣よりも教育事業の盛んな我が山口縣だもの、學校の多いのは當然である。公園を下りて驛へ向つた。萩の路より大分廣い道を背く塗つた例の電式自動車走つて居る。水撒き馬車が走つて居る。……けれど餘り異ひしな。驛の廣場の防長自動車待合所で荷物を受取り葉書を書いた。其處で思ひ掛けなく堀の姉さんに會つて別れて後の事を

種々と話した。私共は午後〇時十分、いよいよ長途の旅に上るべく汽車に乗つた。山行よ、さうば又再び訪れることを約しながら……

山口と三谷との間に山陰第一の大隧道を通つた隧道の来る度に未だ窓の閉閉になれない私共は「さう鳴つた。隧道ですよ。」とカマコト大騒動して閉めた。又時には如何しても閉ぢないで開いた儘顔をふせて通つた時であつた。一時間の後汽車はすべる様に三谷驛に進入つた。「三谷ー」「三谷ー」と呼ぶ驛夫の聲もなつかしく、さつそく窓から顔を出して見ると徒歩で來られた皆さん達が洋服に下駄と云ふ風でブラットホームに立つてゐられた。あの服装から見ても随分道は悪かつた事が想像される。「いぢつしやい。」「いぢつしやい。」と疲れられて居る皆さんを呼び入れて「お疲れでせう。」「如何な景色だつたの。」と皆話した。これからの車内は大部分生徒で一層賑かになつて來た。幾つかの隧道で、幾つかの驛を過ぎて、ごんごん進んで行つた。一般に山陰地方は裏日本とも言ふ様に田舎である。そして家が藁屋ばかりで殆んど瓦屋はない。時々あれば赤瓦で黒瓦の家は一家もない。藁屋の型は二種異つてゐる何たか

古風である。そして景色は勇壯な景色である。何處迄行つても日本海の波は高い。萩の海岸と餘り異ひはしないけれど、海岸に生へて居る松が此處等は小さな赤松である。私は阿武さん、大田さん、金川さんと一つ席になつた。初めて汽車に乗つたと云はれる方もあつたけれど、皆元氣で騒ぎ通した。校歌を唱つたり、話したりお便りを書いたりした。何處かのかなり大きい驛には標が満開であつた。随分氣候が好く居ると思つた。又田舎の小さい驛で紫すみれの咲いて居るのを見た。中々詩的である。

山陰線は山上海よと云ふ様に長い眺め程又隧道が多かつた。全体で六十餘りあると言ふ事である。すつと野原の方になる。月見草が黄金色に一面咲いてゐた。あの美しい阿武川堤の月見草の咲いた有様を思ひ出した。

たぎ。と言ふ處で美しい夕陽を見た。此處は日本海岸に於て名高い夕陽の美しい處である。青い海の上に今にも溶けさうになつた真赤な夕日を見た。空は紫に輝いて所々に赤く色ざられた雲が横たわつて居る。それはもう何とも言ふ事の出來ぬ偉大な自然の美である。雄大な輝きである。私共は讚美の言葉も盡きて只見

入るのみであつた。併し隧道の多い爲め見ゆつ隠れつした刻々に變る海の景色も其の美しさは何とも言ひ表す事は出來ぬ。昨年讀んで習つた「夕陽の美」を思ひ出してほんとうに人生の末路も此の美しさの様になくてはならぬと感じた。太陽が姿を海中に没した時急に車内は暗くなつた。私共の顔は皆輝いて居る様に見えた。「ほんとうに美しい皆さんにも見せ度いわれ。」と誰れもが言つた。「葉書を出しませうよ。」と云つて皆ペンを持つたけれど、如何に言ひ表して良いか分らぬ位だつた。その内に周囲はだん／＼暮れて車内も暗くなつて電燈の光のみ強く輝き出した。私共は黙り込んだ。「暮れて行く。何だか胸がドク／＼して落着いて居られない様な氣がした。一種異ふ寂しさが湧いて出た。最早や人の顔もボンヤリする頃、時は丁度七時三十分。「今市ー」「今市ー」「大社乗換へー」と呼ぶ驛夫の聲に驚いて急いで下りた。一寸大きい驛である。全部下りると、大社線に乗つた。此の列車は前のよりすつと大きく、乗心地が良かった。

「三十分位間があまりですから、外に出る度い人は出てよろしい」と先生が仰つたので、私共は外に出てブラット

ホームを歩いた。やがて點々と燈の附いてる町を汽車は進行した。十何分かにして大社驛に着いた。笹の先きに赤い燈を下げておた人が向ひに出て居た。私共は燈を目標にして暗い町を歩いた。「此處の旅館は笹の屋と言ふ宿だ。だからあんな事して居るのよ。」と話しながら十町程歩いて、仲々大きい笹の屋旅館に着いた。此處では二組に分けられ、私は二階になつた。お便りなんか書いて居る。食事を出した。赤い御膳が嬉しかつた。食事をしお風呂に進入つて後は自由であつた。外出なさつた方もあつた。けれど私は一寸前に出て見た切りで午後十一時頃に休んだ。眞白なシーツの掛けてある布團に私共は上服を脱いでワイシャツで寝たので病院の様であつた。私は下でお味噌をゴロ／＼する音を聞きつゝ、眠つた。時間立つたか分らなかつたけれど、不眠日が覚めた。廊下に光る電燈のみで、室内のは消してあるから薄暗い。笑ひ聲がこぼれて居ると、隣室から安永先生の聲で、「未だ一時半ですよ。お休みなさい。……」又元の掛けに返つた。

豫定は五時起床とあるけれど、もう四

時には起きて洗面を済まし髪を結んで居ると朝食が出た。朝食を済まし六時半頃に宿を出、出雲大社に向つた。今日はよい天氣である。路巾のかなり廣い町を行く。程なく大鳥居の前に達した。此の青銅の大鳥居は毛利様が御旅納遊ばした物と聞いた。大きな鳥居の上に掛つて居る額の大ききでも六疊敷あると案内人は話した。兩側には大きな木の植ゑである長い道を行くと、お社がある。千木高知のみ社は日本中に名高く、素戔鳴尊とお柳様と宮女の方々が祀つてある。又左側には十一月日本中の神々様がお集りになつて會議を遊ばされる建物があつた。後は鶴山・龜山にかこまれ、静かな清い處である。拜し終りて私共が驛迄行く道は物産館ばかり並んで居る。女學生の登校姿も見えた。洋服も帽子も一二年生の姿と同じであつた。午前七時十五分發の汽車に乗つて今市に向つた。此の邊は釜蓋が盛なのか、釜蓋ばかり積んで居る。車中で今市高女の一年生と一緒にあつた。英語のリーダーを見せて貰つたら、實科のリーダーと同一であつた。萩の學生よりも活潑でハキ／＼して居る。七時四十三分出雲今市發山陰線京都行に乗り換へた。



「今夜は京都に行つて居るのだ。」と思ふに違ひなかつた。相變らず元氣に騒いだ安來米子を過ぎて御來屋に來た。此處は名和長年が後醍醐天皇を隱岐の國から一室一族を以てお迎へ申したと言ふ處で、右方遙かに山陰第一の高峯といふ未だ雪を頂いてゐる大山が見えた。兵庫縣に這入つて餘部の大陸橋を通つた。二十二間上空に橋が架けてあつて長さ二町半日本でも有名な陸橋であつてその景色は非常に壯觀であつた。城の時温泉は鹽類泉に云ふ事である。左側には玄武洞が見え福知山、綾部を過ぎて保津川が見え出た。先年英國皇太子の下られたあの保津川である。瀬をなして川は水泡を立て、紫の大岩をも砕く勢で走る様に流れて居る。だん／＼と暮れて來て周圍の景色もはつきりとは分らなくなつた頃、嵯峨から嵐山が見えた。あゝいよ／＼京都だ。花園を過ぎ「二條」を呼ぶ聲に驚いて意外を見る、大きな驛で、たくさんの人が忙しげにカタ／＼プラットホームを歩いて居た。「京都だ」と思ふことが非常に嬉しかった。向ふには點々として明るい燈がついてゐる。私共は荷物を全部取つて何時でも下車出来る様に用意した。やがて明るい大きな京都驛構内に汽

車はすべる様に這入つた。プラットホームを出て第一目に附いた物は電燈の明るい事である。此處に來て、初めて「旅行に來たのだ」と感じた。驛前には月桂館大食堂が堂々と聳つて居る。向ふの方が盛に青や赤のイルミネーションが輝いて居る。私共は此處で人員點呼があつた。そして今夜は何處迄も明るい路を電車に乗つて三條大橋へ向つた。餘り込んでるので運轉手籠に乗つて居る。此處は危險ですから、中に這入つて下さい。と無理遣りに中におし入れてドアを閉めた。何處の電車でもこちらには乗せないと思つた。大橋で次の電車で來られる皆さんを待つて居る。通り掛りの紳士が一才立つて見ておたが寄つて來て「貴女方は山口縣ぢやありませんか。」と言つたので、「さうです。」と答へると「さうに「あ、萩でせう、萩高女でせう。」と言ひながら他の人と話して行つた。三條通りでは、かなり大きい「いは館」に着いた。三階建て前には赤い電燈が附いて居た、床の装飾でも出雲よりは何だか優し、感を興へた。夕食を取りお風呂に這入つて後は自由であつた。京都には明晩行くとなつたので私は近所を歩いた。私は文房具店に這入つて繪

葉書を數冊買った。友達と暫く三條大橋に立つて夜の京都を眺めた。此の橋はなかく古風な橋である。そして此の橋上に坐つて御所を拜した高山彦九郎を思ひ出した。誰か來て、「四條は何處です。」と問つたけれど、私達には分らなかつた。宿の前にはアイスクリームを賣つて居る人が多かつた。十一時就寝に就いた。

第三日も五時起床と言ふ豫定であつた。けれどもう四時には起きて仕度をして朝食を戴いた。お辨當一つ持つて宿の前を列び電車に乗つて桃山御陵に向つた。停留場には「大阪行」さか「大阪特急」さか書いてあつた。京都から電車で大阪に行く事も出来る。桃山には午前八時に着いた。東陵に参拜した。空はよく晴れてゐた。廣い路に眞白な小石が綺麗に並べてあり、路の兩側には、青く茂つた樹木があり、非常に莊嚴であつた。御陵は丸山で淡緑の草でおほはれて居る。私共は前の手洗鉢で嗽ぎ手を洗つて拜した。維新の大業が胸に浮んだ。それから東御陵を拜した。すぐ近くにある乃木神社に参拜した。白木造りの質素な神社で乃木大將その儘を表して居る。左側には日露戦争の時各將校の居られた、室がその儘

此處に持つて來てゐる。其處を出て電車、三十三間堂に向つた。三十三間堂と言ふけれどほんとは六十六間ある大きな建築物である。中には一千一十の佛像が安置してあつた。之を見ても如何に日本は昔からの美術國であるか分かる。中には如何しても中々出来る物ではないものがある。次には博覽會に行つた。此處は主に佛像彫刻物があつた。次は清水寺に向つた。高い高い廻廊を上つて行つた。其の時は随分疲れて歩くのさへ困難なのの上つて行くのだからその苦しさは中々である。併し私共は山本さんの姉さんと一緒に先頭を走る様に上つた。「此處が清水の舞臺ですよ。」と教へられた。上は見物人で一つばいであつた。私共は最上迄上つて欄干にすがつて眺めた。汗の出た顔に冷たい風が緑の木の葉の間から流れる様に吹いて來る。下は新緑の風が非常に良く茂つて下の土地は見えない。まるで眞青な雲に乗つて空中に立つて居る様である。目を遠くへ轉ずれば、茂つた樹木の間から京都の市中が見える。萩なごさは比べ物にならない程遠く遠家が建續いて居る。休みつ、考へた維新前、僧月照が此の寺に在つて英傑の人々を王

政復古かはかり、その事が其府に知れ、殿に追捕の命が出た、月照は薩摩に下り西郷南州と共に

大君の爲めには何かをしからん薩摩の瀬戸に身は沈むとも正氣を残して海に沈んだ。あゝ僧の身を以てこの様に爲めに盡した月照は、實に快男子だと感した。又此處であの名高い音羽の瀧を見た。下に石池が置いてあつて一間位上から水が落ちて居る。その水も鐵管で何處からか來る様に作つてある。人工的の瀧である。自然美に包まれた處に住む私共は如何して名高、のか分らなかつた。自然の堂々たる瀧を眺める事の出來ぬ都の人には可哀相である。都に住む皆さん自然の都にお出でなさい。」此處を出てから祇園に向つた。私共は餘り早く歩くので後の人はおくれられ、私共は木陰に休んで、中野先生が向ひに行かれた。休んで居る前を、眞白な服を着た朝鮮人の團体が通つた。圓山公園は優しく美しくあつた。純白なつ、ち、眞赤なつ、ちが一面に咲き乱れてゐる。あちこちの椅子には、洋装姿の外人が腰を下して居る。名高い祇園の夜櫻も見た。

又石段を上つて智恵院に行つた。智恵院には京都附近の小學生徒が遠足に來て居た。皆水色の洋服を着て居て大變可愛かつた。此處にも人は非常に多かつた。私共は餘り疲れて居るので、お堂で休んだ。左甚五郎の忘傘があつた。此處にはお茶が出て居た。此處で金閣寺に行く人、道入つたので、お辨當を食べインクライン見學に行つた。眞赤なつちにかこまれ大分高い所に宮殿の様に建つて居る都ホテルを右手に眺めつ、インクラインに着いた。中々大規模な事がしてある。船が陸の上を走つて居る。風上から吹く涼しい風に疲れを休め博覽會に向つた。博覽會場は此處より餘り遠くではなかつた。第一會場、第二會場と順次に見て歩いた。物産館に這入つた時、全國各縣の物産がある。聞き、随分山口縣を尋ねたけれど、分らなかつた。隣縣の廣島も岡山もある。山口縣のは無かつた。後で聞く萩、焼があつた相である。我が縣は大いに努力して産業を起さねばならぬと思つた。會場を出て電車で東本願寺に行き、後の



西本願寺に行つた。此處は拜見が許され左甚五郎の齋張り狩野定信の繪、日本一の能舞臺、秀吉館を見て辭した。最後に京都御所を通つた。も、此の頃は、かなり夕暮れであつた、眞白な路兩側に植ゑてある緑の若草氣持よく伸びて居る樹木、空に横たはる紫の雲が調和よくうつた、御所を拜して門を出る迄私共は其の中を歩いた。其處は私の想像を裏切らない優美な京である。水色の服に白の袴を着けた女學生の散歩して居る姿も見え、御門を出ると平安女學校、女學院、教會が皆赤い煉瓦で夕空に輝いて居る。私共は此處から電車に乗り宿へと向つた。明るい賑やかな町を電車は飛ぶ様に走つた。間もなく金閣寺に行かれた方も歸られ、食事を教はつて京極に出た。割合に狭い路を入々は流れる様に通つて居る。兩側は商店軒を並べ、店頭を飾つてお客様を待つて居る。少しお土産を買つて朝が早いと言ふので早く歸つた。一あ、美しい京都、電氣の光、莊嚴な桃山御所、優美な夕暮の御所、やはらかない若葉のみどり。何時迄も棲み度い氣がした。私は何時か眠つた。

又朝が早いので非常に眠かつた。明かない目をやつと明けて洗面所に行くも未だ多くは居られなかつた。洗面所の窓から、窓外を眺めると、雨が降つて居る。朝食を済まし荷物を持ち傘をさして外に出た。音する物は雨と、私共の、話聲のみ。あたりは寂として電車も未だ通らない。仕方がないので三條から、七條のステイション迄徒歩で行つた。電燈の光に雨は銀線の様に光つて、時々横道から音もなく貸切自動車が出て来る。しめやかな京の雨は京都で雨に會つた事も喜ばしかつた、驛には、さすがに人が居た。京都よさらば。と、再来を約しつゝ、汽車は徐々に構内を出た。

變多かつた。海岸の景色は波がおだやかで真かつた。二見ヶ浦は陸から一間位海中に二つの岩が立つて居り餘り感心する程でもなかつた。併し朝日の上る景色は大變美しい相である。海岸では、記念寫眞をとつて居た。御り路で天の岩戸を見た。電車に乗つて、伊勢神宮に参拜した。前の物産館に荷物を置き、傘のみさして参拜した。五十鈴川下流に架けてある大きな橋を渡り進んで行くに兩側には森林の様に生茂つた木々のある路がかなり長く續いた。程なく綺麗な五十鈴川が流れてゐる。此處で手を清め又嗽いだ。それから綺麗な小石路を行く事数歩あたりは敷か、へもある老杉が立つて居て、何となく神々しかつた。四方をかこんだ板垣があつた此の板垣御門には白羽二重の幕ははられその神々しさは言ひ表す事は出来ぬ。此處で私共は皆坐つて拜した。内宮を出て山田で簡易食堂に這入つた、一寸大きい食堂だけれど、給仕なども二三人で随分不完全であつた。食堂を出て停留場にかけて込んで電車に乗るこすぐ出た。外宮もやはり同じ莊嚴であつた雨の日この様に参拜者の多いのは、實に國民の

敬神の念の深く、神國の神國たる、故である。何の彼のこ、騒いでも日本國民とし敬神の念のある内は大事ないと思つた。汽車で龜山を行き此處で乗り換へて奈良へ奈良へと進行した。路で行宮遺址が左側に見えた、奈良は古代文學佛敎の盛んであつた處さ聞き早く見たかつた。午後八時京都より暗い奈良驛に着いた。長い通りを進んで行くに奈良の池の端に出た。中々此處は綺麗だ。奈良公園の五重の塔が池の面にうつり所々について居る電燈の光が水面にうつり、小さい波を立て、さ、やく様に動いて居る。宿は奈良公園の近くにあつた。我が校出身の藤井さんがいらした。夕食を済ましお風呂に這入つて友達と一緒に散歩した。停車場に横くあの道で記念品を買つた。商店はたくさんあつたけれど、京都の様に明るくも無ければ華かにもなかつた。すぐ引き返して奈良の池で景色を眺めた併し疲れて居るので早く歸つた。

奈良公園も歩いた。朝なので池の端を登校する女學生の姿も見えた。誰か旅行者らしい人がベンチによつて寫生して居た。奈良には大變畫とする材料が多い。何物もが畫である。私も池の端で三枚畫いた。やがて先生がいらしたので見物に出た。此處では第一奈良公園内を通つて春日神社に向つた。此の邊には非常に鹿が多くて困る位だつた。あちこちと案内者の説明を聞きつゝ、歩いた。春日神社は藤原氏の先祖、天兒屋根命を祭つた社である。即ち若等の氏神様である。此處では、墨小刀等を賣つて居る。嫩草山は非常に綺麗で名の通りの若草が一面にあつて其の中を帯の様な道が小さく見えた。

東大寺は大きなお寺である。路々中野先生が「昔さん東大寺の大佛を見ても、周囲が大きいので餘り大きくは見えず、併し人と比べて、大きい物です。」とお話になつた。門を這入つて正面には、大佛殿が建つて居る。中に這入ると天上迄もさき相な大佛が端然と坐していらつしやる。併し五丈三尺五寸もある様には見えない。人と比べて始めて大ききにおどろく。大佛の側には又大小種々の佛像がある。此處にも國寶はあつた。



ためを作り岩窟に棲む物には岩窟が作つてある。かなり自由に飛び交歩る事が出来る様に廣くしてある。未だ見た事もない動物や鳥類を見て大變考案する事が多かつた。公園を出て大阪城に向つたころで初めて、大阪の電車に乗つた。相變らず込んで居る。電車を下りて多くの參觀人と共に大阪城に着いた。眞晝の大陽はツリツリ地上に熱を増して来る。高い石段を上るのは随分苦しかった。上は非常に風が強くてうっかりしてゐると帽子などは吹き飛ばされる様であつた。向ふを見渡せば青空は見えず、ごす黒くにごつて最後は空と地上との境もはつきり分らぬ位である。そして見渡す限りの家の屋根は眞黒になつてゐる、ほんごに大阪は商業都市である併し思つた程煙突はなかつたけれど煙は多かつた。あらゆる生物あらゆる機械が目覚めてドン／＼働いて居る。

天主閣の下には大きな建物がある、其處は砲兵工廠の建物で兵器を作る處である。此處からは大阪全市を眺める事が出来る、併し餘り風が強い爲め埃が立ち又煤煙がひどいので目も口も大きくは開けられない。天主閣を下りて門を出ようとする門前に居る兵隊さん達が急に「氣を附け！」と號令をかけた。驚いて左側に寄ると、馬に乗つた士官が六七人トツ／＼出て行つた、何處に行つても軍人は共の「疲れた疲れた」云ふのが、はづかしくなつて来た。電車に乗つて造幣局に向つた。十分位乗つて電車を下り、狭い道を大分行く道路は狭いけれど綺麗な路で、路の両側には大きな樹の木が植ゑてあり下は川をへだて、中の島公園が見えてゐる。その前に堂々たる造幣局の巨大の建物がひかへて居る。此處は良、景色である。少しの間、櫻の木のあるベロンチに休んで前を眺めると、川にはあちらにもこちらにも、軽快なボートを浮べて練習をしてゐる。又時々氣持よく川蒸汽が走る。向ふの中の島公園は造幣局の向ふが運動場になつてゐる。大變大きく入つた。此の建物は市内最古の洋風建築物であつて工場は解解場、極印場、彫刻場、製作場、試験場等に分れて居て、私共は案内人につれられて此の様な所を見て歩いた。窓は小さい金網がはつてあつて其の内に硝子戸がある。併し私共の

歩く脚は機織室でか／＼／＼もう耳も響せんばかりの音である。ほんごうに機械の力の偉大なる事は驚く程である。あの堅い鉄や鋼を自由自在に思ふ儘に薄くもなれば厚くもなる。一錢銅貨を造る所では薄くした銅板を面白い様にポツ／＼丸く切つて居る。時間の無い爲め其處を出た。今迄喧ましく私共を包んで居た音は消ゆる様に聞えなくなつた。此處で毎日新聞社に行く人々が行かぬ人が別れた。私は宿に歸る方に這入つた。電車では梅田迄行き時間の分らぬ爲めか宿館のミカドヤから案内人が出てゐないので尋ねて歩いた。もうたはれる様に疲れてゐるのに尋ねるのだから其の苦しさは一通りではない。やつと見出した時、先生が「お、之は大みかだ。」と仰つしやつたのに元氣を出した。三階建の大きい旅館である。私共は靴の儘階段を上つて二階で靴をぬいだ。私共の部屋は三階である。お茶を飲んだりお話ししたりして居る。毎日新聞社の方に行かれた方々が歸つて來られ新聞社の方が「訪れた記念にこれを上るさ云つて下さつた。」と、言つてお友達から日展圖録を買つた。それには天王子公園で見たあの洋畫日本畫全部が出て居るので嬉しかつた。夕食を取り、

お風呂に這入つて後は自由外出であつた。お風呂から歸つて見ると、先生が「卒業生の松浦さんが千日前に案内すると言はれるから、行く方はいらつしやい。」とお仰つたけれど未だ私は少し用事がある。後で先生と一緒に居る事にした。お母さんやお友達にお便りを書いた。電車路這出て居てもよろしい。お母さんやお友達も一緒に行きポストを探したので皆さんと一緒に居る。私共の電車を待つる爲め近所を歩いた。私共の電車を待つて居る所は電車倉庫の側であつた。廣いひろい車道を電車は縦横無盡に昔、電光を散らして走つて居る。その目まぐるしさ、勇ましき、明るき、都會にのみある景である。餘り多敷待つて居るので倉庫の中から出て来て「何處へ行きますか。」と言つたけれど「今先生がお出でますから。」と答へず。やがて先生がいらして我々の爲に新一台出され全部乗つて千日前に向つた。明るいまるで電燈の間の様な町を飛ぶ様に走つた。およそ四十分間位乗つて千日前に着いた。京都の京極と同じく賑やかな所を散歩して、歩く事は出来ぬので先生が「私共は電車通りに待つて居るから自由にお歩きなさい。」とお許しが出たので私共はお友達と一緒に

通り歩いて見て物産館に這入つた。まるで勤工場の様で、行つても行つても店許り續いた二階には音楽がある此處で少しお土産を買つて出ようと思つた店ばかりで仲々出られないその内に友達と心細くなつて五六人になつた。だん／＼心細くなつてドン／＼走る様にして出口に出た。けれど女學生は見えない「サア大變！」と思つて電車路の方に行つた「支那名産」お菓子」等聲を限り呼んで居るのを聞いて、皆さんに別れて心配はしてゐても其處を素通りする事は出来ぬ。もしも誰も居なかつたら梅田行電車にのれば、いゝと話して、お菓子屋に這入つたら其處に安永先生と皆さんがいらしたので安心した。用事を済まして電車を待つて居る中々來ない。時間はだん／＼立つて行く夜露がおりて、服はしつ／＼と濡つて来た。風はだん／＼冷たくなつて來る。時計を見れば十一時何分併し都會の夜は一寸も淋しくはない。人は相變らず忙しさにサッ／＼と歩る。電車は満員の札を掛けて行き過ぎる。やがて梅田行が来たので乗つた。私共は左側、初め方に行き皆さんは右側に行かれた。込んは立てば友も見えて居たがだん／＼這入て來て見えなくなつた。二人は黙つて外

を眺めてゐた。不圖氣がついて皆さんの方を見ても見えない。「私共は乗り越しやしないでせうか。」「サア。」急に不安になつて來るので、皆さんの方に行くこと未だ居られた。ホツと安心する暇もなく次の停留場で下りたので随分あぶない事だつた。宿に歸つて見ることも皆さんはれて私共の這入る所がないので別室で休んだ。

六日午前五時起床。今日も天氣だ。朝の仕度をして七時頃に大阪三越支店に行つた。一寸早過ぎたので近所にある白木屋を見た。暫くして三越に這入つた未だ早かつたので整理も十分では無かつた。都の人の喜ぶ流行品も何も目には這入らなかつた。何だか子供の集めて居るお玩具を見る様な氣がした。あれ程の物が一商店にはなくともあちこちの店に行けば寂しだつて有る様に思はれた。七階目の庭園は良かった其處からは朝の大坂市が望まれた。何も求めずにエレベーターで降りた。暫くして皆さんも降りられた。電車で梅田迄歸つた。宿の前は小学校でたくさん登校して居た。荷物を持つて先生方を梅田迄歸つた。いよいよ午前十時四十八分發の汽車に乗つた時は私の疲れた頭に今迄の事が廻り燈籠の様



に浮んで来た。暫くして十一時四十五分に神戸に着いた。  
其處には長澄先生と毎年の夏期水泳を教へて、いらつしやる荒川先生とが、お出迎へ下さつた。明先生共御元氣で、ニコニコしていらした。すぐ前の湊川神社に参拜した。當時は工事中で何だか、ソラ／＼して居た。併し何時も境内は雑踏して居る相である。社殿は壯麗であつた。あの名高い水戸幸四郎の「嗚呼忠臣捕氏之墓」と書いてあるのも見た。最少し静な處にあつたなら、以上壯麗であらうと思つた。一時間餘り時間があるのを見物して歩いた。  
神戸は随分綺麗な町である。新しく開けただけ家も新しく又外國人の住む所で國から言へば他國に對しての玄關なので、すべてが外國式である。眞白な洋館があちにもちにも建つて居る。外國人のたくさん歩く何だか外國にでも来た様な氣がする處である。大阪の様にどす暗い空ではなく何處迄も澄み切つて居る。驛前に記念の爲め一冊の本を買つて午後一時二十七分神戸發山陽線に乗り込んだ。大變に人が多くて非常にこんで居た。私共は長い間立つて居た。須磨、明石、舞子等白砂青松。南面して淡路嶋に對し。

の松日砂に映じ波にせまつて實に美しい自然美を表して居る。暫く立つてゐると前の人が「次の驛で下車しますからお掛けないさい」と言つてくれたので非常に喜ばかつた。そしてあちこち指して教へて下さつた。  
書食を食べ話したりハイモニカを吹いたりして居る。暮れか、つて来た。丁度その時は岡山を通つて居た。一度来た事もあるのになつかしかつた。驛に停車した時下りて見たい様に思つた。汽車が走り出した時、前に居た紳士が窓外を指さして「立つて御覽なさい向ふに洋館建が見ゆるでせうあれが高等學校、その左の丸い屋根のが圖書館です。あの下が名高い後樂園、あの名高い」を教へて下さつた。さうさう後樂園は、そこだつた。さ大分思ひ出した。尾の道邊では全く夜さなつた。夕食は買はなかつたので食堂で食べた。夜は月が窓に射込んで居た。私共の前ドアを開けて放つて其處にも人が立つて居た。冷たい夜風が吹き込んで震へる程寒かつた。暫くして夢からさめる。もう私共の下りる驛の前迄来て居た。皆さんを起し荷物を取つて何時でも下りる用意をして待たつた。午前四時三十一分いよいよ歸るべく本線を捨てた。

又再び訪れる日を約しつゝ……。一寸一時間暇があるので早稲町を歩いた。暗い田舎らしい所である。驛も寂しい。青い電燈が照らして居るばかりである。驛に車一臺もない。同五時廿分厚俣を出て正明へ向つた。その間は何も覺わぬ程眠つた。前に腰掛けて居た女が「私は廣島です、こんなに夜行に乗つたのは初めてです」と女達に話して居たのしか覺わぬ。午前七時三十分正明市に着いた。夜は全く明け多数の漁民は出て働いて居た。驛から港への一本路を大急ぎに歩いた。小さい船に乗せられ港を出た。正明市で偶然萩修善女學校の九州に旅行しての歸りに會つた。  
下關で乗つた時も、廣島で例つた船もこんなひどい船ではなかつた全く驚いてしまつた。椅子もなければ船室も無い船だつた。海は別合に静かである。歸る嬉しさに元氣が出たのか皆元氣だつた。船長らしい人が出て来てあちこちを説明してくれした。二つほど港に寄りこゝからは眞直に萩港に向つた。だん／＼指月山が大きく見え出し、菊濱の白砂も見えて来て、程なく港に着いた。校長先生を始め諸先生方、寄宿舎の皆様お出迎へ下され、特に校長先生、伊藤先生は舟に

乗つて汽船迄も来て下された時、無事に歸つた喜び、疲れた体にも元氣を出して我々家へ急いだ。  
あ、思へば破天荒の大旅行。短く、樂しかりし七日間、學生生活最後を色採る、修學旅行もかくして終つたのだ。あの短時日

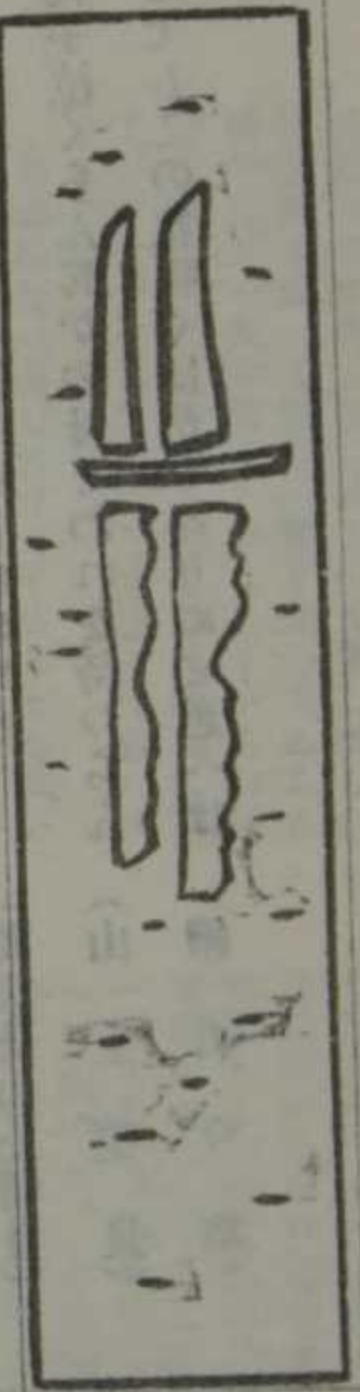
に於てあれ程の長距離の大旅行を一回無事に終へて歸つたのは、偏に諸先生の御心配と交通機關の發達に依るのである。我々の見學した類々、これからはいよいよ實地に用ひなくてはならない。「百開は

「一見に如かず」我々田舎者も此の旅行に於て新しき文明を目のあたり見、又それと同時に古代の文化も見したのである。あ、かくして長い修學旅行は終つた。

山はさけ海は潤せなむ世ありとも君に二心我あらめやも  
（鎌倉右大臣）  
けふよりは願みあくて大君の醜のみたてと出て立つ我は  
（今奉部與曾布）  
築波根のこのもかものにかははあれき君がみかけにますかかはをし  
（古今集讀人知らず）  
白がねも黄がねも玉も何せむに増れる寶子にしかめやも  
（萬葉集山上憶良）  
憶良等は今はまからん子泣くらん其かの母もわれを待つらん  
（山上憶良）  
思ふ事今はなきかなでしこの花咲くはがらありぬと思へば  
（續古今集）



由縁の園



作文

ひよつこの日記

田總 ゆき

左の文はひよつこの書いた日記です。先日私が小屋の中で發見したのですが、ひよつこ云つても、もう雄は時々歌ひ出すまでに太つてゐますので、中々我儘で、勝手な事をおしやべりしてゐます。その面白さに釣ひ込まれた私は、そつと皆繰にも御紹介しようと思ひます。

もうさつきから目が覺めてゐるのに、今朝はまだ寢床から出して貰へない。こんな時は何云つても、寢坊のお嬢さんが憎らしくなる。さつきひとしきり私達の

小屋の上で、聲をあけて鳴いて行つた鳥が、今頃はもうきつと可味しい餌に、あり付いてるに違ひない。なんつて自烈つたい。板の隙間からは朝の光が、射し込んで来るのに。私は凝として居られないで、粗末な爲に、ざら／＼とそ、びれの出た板の面をコッコツとつゝいた。

思ふにいつもから寢欲なお嬢さん、今日は日曜なのできつと三十分でも一時間でも、睡眠を欲張りたい氣らしい。あきれちまふ。私達は毎朝臺所で、「何であの子達は、あんなに眠いのでせう。」と呟いていらつしやる奥様と全く御同感だ。私達は生れるとから母様に、「早起はするものですよ。」としよつちゆう云はれて育つてゐるので、小さい時から早起なら滅多に他の者に、遅れを取つた事はない筈だ。で私は時々寢坊のお嬢さん達を、笑つてやりたくなる事がある。けれど

一度だつて口に出して云つたのではない。寢床の戸を明けける役目の、分らずやの、さうだ小姉さんのもも言つたものゝら即座に、一だつてよ、お前達は早くから寢るからい、けれど私達はね、勉強があるのよ。お前みたい、夜はさう／＼早くから寢られあしさい。それにお前達は昔から、早く起きるものに定まつてゐるわ」と御機嫌を損じて、お目玉を戴いて、其の上私達の待遇にまで影響を及ぼされては大變だから、云つた事はあゝい。

勉強々々々仰言るけれど、其の癖お姉さんの勉強振つたらあきれれる。語本を大きい聲で讀むか、英語のリーディング位が關の山で、私は勉強します、と人に認められて貰はれるんでなくてはつまらないのらしい。いつかもお前達の小屋の前へ、英語の本を抱へ込んで来て、よくお聞きといふ風に、あの下手なリーディングを聞かされちやつた。變な聲で幾度かつまり／＼なざるのを聞いてると、ついその得意顔が可笑しくなつて、もつとでウフ……と笑ひ出すところをぐつ／＼堪へて、何あらぬ顔で食べ残した鉢の麥糠をつ、いた事もあつたつてさて、やつと小姉さんが戸を明けて、廣い小屋に出

して下さつた。いつもながら朝は御機嫌が悪い。眠くつて仕様がなのを起きねばならぬので、ちと小腹が立つてるんだらう。何だつて關やしない、持つていらつした麥糠を、腹の減つた儘に飛び付いて食べようとしたら、「まあ待つておいでよ。」と膨れつぽい目に險を立て、叱られちやつた。い、加減朝飯が遅くなつた上、たかゞ麥糠を水に溶いたものだ。それで朝飯を済ませよう云ふんだもの、小姉さんみたいに、そんなに勿体をつけて貰つては困る。

腹立ちまぎれに、こゝまで一息に小姉さんの悪口ばかり書きはしたが、麥糠で腹の足つた今、さて考へて見るさちと悪口が過ぎたかしら。さう、いつもはそんなに嫌な人ではなかつた。查からになつて腹が減つて何もありませんのに、無暗に土を餌りつ返してゐるさ、よく小さいお嬢さんが學校のま、の仕度で、お前當の残りをそつと投げ込んで下さる時々は、こんなに好きを人はないなと思つた事さへあるのに。お嬢さんの仰言る通り、學校の勉強があるのに、其の上私達の世話まで仰せ付つた小さいお嬢さんを、今思へば一寸氣の毒にもある。



暫く野菜に飢えて、いつもふら口にしようとも思へ  
ない菊の葉まで、引張り合せて食ふさいふ所に、今日  
大きいお嬢さんが畠からこゝで大根のまびき葉を  
投げて下つた。野菜の匂ひを嗅ぐともう氣違ひになり  
さうな上に、生れて始めての菜を他の者に食べられて  
は損、毎ひ合つて、ひつたくつて鶴呑みにしたので  
始めの二口三口は何んな味があるやら分らなかつたが  
食べてゐるとしても可味しいものだ。ほくつきはへ  
て、その舌を流れるうまさ、それを圓めてくつき吞  
み込む時の快感は、とてもひいなどの及ぶ所ではない。  
ひいは草の名で、早の頃の草や野菜が萎れて枯れる  
のに引換へて、獨りこのひいばかりが、我物顔にはび  
こるのださう。莖は赤く、葉は厚いが軟かい。莖の  
先にちよいと地味な黄な花が咲く。本當の名は何と  
云ふか私は知らないけれど、唯奥さんもお嬢さんも、  
それをひいといふと仰言るからさうだらうと思ふ。その  
ひいを私達は實に長く食べさせられたものだ。始めは  
變な臭ひがして、とても食べられさうになかつたが、  
お嬢さんがちよいと金網に挿して下さつたのを、つひ

氣まぐれに口に入れてからは、だん／＼それが食べら  
れるやうになり、遂に好きになつた。それからあの  
長い夏中、来る日も／＼此のひいが麥糠の副食物とな  
つた。私は草はひいしかあいのだらうかと、時には物  
足らなく思つた事もあつたけれど、好きは好きだが  
喜んで食べた。私は殊に葉よりも莖の方が好きだ。  
大きいお嬢さんはそれを丸こた放り込まないで、よく  
それを小さく切つて撒いて下さつたものだ。そして獨  
りで欲張つて食べさせない様に、いつも雄ばかりに取  
られてよう食べぬ弱い私達に、そつと注意して食べさ  
して下さるのが常であつた。  
そのひいも涼し口がたつ頃から、ちつとも貰へなく  
なつた。食べ慣れた口にはあんなひいでも、無くなつ  
た當分は味が忘れられなかつたが、それでも大きいお  
嬢さんがちよいと／＼畠を漁つて、蒲公英みたいのや、  
一寸すつばい味のする草をき取つて来て下さつてよか  
つたが、それも草取りの婆さんが来てから貰へなくな  
つた。あの草取りの婆さん、削つて取つたばかりのく  
だらな草をばさりとばかり、とても澤山投げ込んだ  
ものだ。足で混ぜつ返して見たけれど、こゝ草だ

の、ちも分らない食べられもしない草ばかりなので、  
うんざりしてゐると、今度はむかでを投げて呉れたつ  
け。ちよいとつ、いて見たけれど、あまり可味しいも  
のでもなかつた。でそれから云ふものは、野菜らし  
い物を食べられなかつたのだが、今日は其等とは全で  
可味しさの違ふまびき菜が載けたわけだ。  
此の可味しいまびき菜は未だ澤山あるのだらうか、  
此から先もこのまびき菜をいつもおかつにして下さる  
まい。私はまびき菜がまだ足りないで、喉をクウク  
ウ鳴らせながら、袴掛のお嬢さんの後姿を眺めてさう  
思ふのだつた。

碧く晴れた空で、百舌が頻りに高音をあけてゐる。  
私は朝飯が足つてしまふ木に掴つて、その如何にもせ  
つかちらしく鳴いてゐるのを聞いてゐるうちに、ふいと思  
ひ出した事がある。頬白い事。頬白が私達が生れて、  
また母様の懐に暖つてゐる頃から、いつも面白い節で  
鳴く鳥であつた。滑らかな聲で、チンチロペンケイ  
チロペンケイ、ホットケ、モチツケ、ツツツケツツケ、  
聞きやうによつては、それはとても可笑しな事を轉が

す様にしやべるので、其度に私達はくつき合圖をして  
首を伸ばし、耳を澄ましたものだ。私達を見下しながら、  
ホットケ、モチツケ、ツツツケツツケ、と云ふので私  
達は私達に、餌をつ、いて食べなさいと云ふのかしらと  
思つた事もあつた。私達の母様が直きに何處かへ連れ  
て行かれて、小屋の中には私達ひよつこばかりが、取  
り残される様になつても、其の頬白はよく向ふの桐  
の木の前で鳴くのだったが、眞夏の頃からさつぱり來  
なくあつた。何故だらうかと思ふ。私はいつもあのお  
饒舌やの愛嬌者がもう一度來て、ホットケ、モチツケ、  
ツツツケツツケと云つて呉ればいいと思ふけれども、一  
向來ない。今日も私は百舌の高音を聞いて、ひよつと  
つて云ふのを思ひ出したのだ。  
小屋の中に氣持よく流れ込む秋の日光に、今日は昔  
な相談一致して砂を浴びる事にした。体をびつたり土  
につけると、何とも形容の出來ない、すが／＼しい感  
觸が肌に沁み込む。私は嘴でコツ／＼と集めた砂を、  
足ではがねの中へ蹴り込みながら、大ききやほんの  
葉を透して空を眺めた。空が碧い、空が碧い。あの碧



さの下で自由に掛けて遊べたら喜んで嬉しうらう！  
何かばつと飛んで来た氣配に、ちよいと頭を擡げて  
みる。三羽の鶴が三四羽来てゐる。私達に見せよかしに、  
じやほんの木にまつた蟲の俄に飛んで逃げるのを、  
ばつと追つては可味さうに食べて了ふ。私は堪らな  
く羨ましくなつて、金網に頭を突込んで見たが出来な  
つことはない。口惜しい。何ほ何でも、些つとは私達も  
小屋から出して呉れたらいいだらうに。それは私達は  
人に飼つて貰つていゝ様なものだけれど、それだけ人  
間の恩に支拂ふ爲に弱く、つまらなくなつて居なけれ  
ばならぬのだつて。

「私達だつてぬ、やつと〜昔の未だ人に飼はれな  
い前の私達の祖先はね、それは強くて自由に遊べたん  
だつたさ。」私はいつか母様が私達を懐に暖めなが  
ら、さう云つて聞かせたのを思ひ出す。私は何故人が  
私達を自由にして呉れたいのか、不思議で不平でなら  
ない。今私達を飼つて下さる御主人様達だつて、もつ  
と私達を自由にさへして下されば、母様に次いでこん  
なに好きな人達はないんだけれど、  
「お前達を鳥に出す鳥を荒したり、犬に取られた

りするから、それで出せないんだよ。」と仰言るのだ  
から私達はいくらでも辯解が出来ぬ。此處の大根は食  
べてはいけませんよ、と仰言りさへすれば、私達は犬  
方食へはすまいと思つてゐるし、犬が来たつてこの強い  
嘴で目を突いてやりさへすれば、大丈夫だらうと思つ  
てるけれど……毎日〜同じ所でつまらなく遊ん  
で居なければならぬなんて、ほんどに嫌になつちま  
ふ。

午後、私達がとまり木にまつて、う〜と眠氣  
を催してゐる。坊ちやんが珍らしく〜顔で小  
屋に入つていらした。手に何か握つてコロ〜と仰言  
る。さあ御馳走と飛び下りて、何だらうとそつと握つ  
た手を擴げますつたのを覗いて見たら、何あんだ空つ  
はだ。又坊ちやんの悪戯か嫌あになつて、側の水鉢  
の水を、折角飲まふとしたら、突然お友達がコケッコ  
ッコと鳴いて、あ、吃驚したよ〜いふ。見る。坊ち  
やんは脱ぎ取つた羽をくり〜廻しながら、得意満面  
でさつと小屋から出なすつた。  
私は驚いちゃつた。坊ちやんが私達に御馳走を呉れる  
風に見せなすつたのは、そつと羽を脱いで取る爲に、

私達に油断をさせる手段だつたのだ。釋經で、坊ちや  
んが脱いで取つたばかりの羽の根に針をさして、黒糸  
で括り、板屏へ投げ付けながら、「やあたつた〜。」  
と大喜びで云つていらしたのを、私達は呆れて聞いた  
坊ちやんはほんどにいけぬいたづらつ子と思ふ。

### 菊の花咲く頃

倉田喜代子

十月!!秋 又なつかしい菊の花咲く頃となりました  
菊が咲いて秋の觀念が強くなつて來たら、私はきつと  
あの過ぎし日の樂しかつた二日間の事を思ひ出します  
そしたらあつかしいなつかしい氣持が胸一杯に溢れて  
來るのです。五嬢貴女には私のこの心持は充分に判  
つて下さるでせうね。あの當時を思ひ出してさへ下さ  
いますから。それは樂しかつた學窓からぬけ出でて  
親しい友や萩の里ともお別れをしてから三年を経た一  
昨年秋

それ迄の何時の文通にも逢ひ度い話し度いと書かれ  
てゐる時は無い位でしたが、それが本當に思ひもかけ  
ず突然に、丁度此菊の眞盛り頃此市で嬉しくもお逢

する事が出來たのです。なつかしくて嬉しくてそして  
樂しかつた當時の印象は、過ぎし後の日に思ひ出すと  
したら、それはきつと堪らない程あつかしいものに違  
ひありません。

今宵は十月十日 滿二ヶ年に少しは足りないけれど  
庭にふくらんだ菊の蕾にふと又新しく當時の事がまざ  
まざと胸に浮んで來ましたので今宵は一つ思出の糸を  
繰つて見ようと思ひました。

高い空が氣持よく晴れた十月二十二日の朝、世の中  
の喜びといふものがそんなに容易に得られるとは思つ  
てもあつた、私は、其日も何時もの様にお椽に向  
つて何も知らずに子供服にミシンをかけて居ました。  
ところが丁度正午前でしたせう。電報の聲は私を驚  
かしました。「二二ヒゴゴニジハカタツクエイコ」誰  
かは覺けません、たしかそんな文句でした。「まあ  
KさんがKさんが」本當に驚いてうつた私は口が利け  
ませんでした。文面を姉に示してから、やつと嬉しい  
と云ふ事を自分に意識した位です。それから子供の様  
にヂツミして居られない程、嬉しさに昂奮しました。  
「お迎ひに行くにしても、電車が四十分あれば好いの



だから、お湯へ行つて来てはさうか？」と云はれて「さうだつた。」とお湯屋へ走つて行きました。全く可笑な程気が轉倒して居りましたわ。列車がゴーンと入つて来た時、高鳴る胸を抑へて細い目を皿の様にして、ズーンと見廻しました。

其の時貴女の美しい桃割姿がチラミ私の目を射ました。私はハツミすると同時に貴女より貴女のお母様の方が早く私を見つけて（否元初対面ですもの私だごお感じに）下さいました。K様細かい事はぬきに致しませう。直ちにお買物をなさらなければ成らない程、御多忙だといふので、御親類のT奥様の御案内で、川端町邊りへ入らつしやる事になりました。無論私も御一緒に電車に乗りました。直ぐ宅へ来て戴かうと思つて居たのですが、急ぐこの仰せに止むらく、貴女よりは離れ度くない爲に、御迷惑とは知りつ、お伴をしてしまひました。

愈々灯もし頃となつて、凡そ細かいお買物が一段落つきました時、私はお母様にお願ひして貴女だけは狭い處ではありますが、私の家に泊つて戴く事に致しました。嗚呼其の夜の楽しかつたこと。なつかしい

貴女は仰有いました。併し私は賑やかな都といふ事より街に何時も、御一緒に居られたらと思はずには居られませんでした。

時計屋から岩田呉服店、セル店、又紙與呉服店へと順々にお置物は調ひました。後でお母様から、私は貴女の御慶事についてお話しを伺ひました。斯うした数々のお買物もそれは皆、貴女の御婚禮の御用意なので御座いました。貴女の御慶事は私にとつても、こよなき喜びで御座います。お品定めの際にモデルになつて、あれこれと肩にのせては、大鏡の前に二人並んで立つたのも、今はなつかしい記念にありました。

「さあ之からだ」と喜んだのも束の間、今夜夜行で歸る事の事に、私の案内役は大狼狽致しました。とても何處へ御案内する暇もないのですもの、兎に角開會してゐる西公園前の香花園の菊人形にだけでも、思つて歸宅致しました。そして直ちに貴女のお髪を直す

母校の其の後、師の君、友のお噂、自分達の其の後等語り出せば限り無く、やつと眠りについたのでもう一時も過ぎて居りましたでせうよ。明けの日も又お買物をなさるので、お母様とは博多掛町邊りでお逢ひする事になつてゐましたから、朝食後、入浴を済まして二人は家を出ました。電車の中でも歩いて居ても随分話しましたのね。第三者から見たら、随分可笑しかつたかも知れませんが、至つて都會の若い女は氣取つて歩きますもの、私達の様におしやべりをして歩いてゐたら目についたでせう。けれど私共はそんな事を考へてゐる暇はありませんでした。嬉しくてなつかしくて此の儘一日中でも歩き続けてゐたいと願つて居た位でしたもの。

丁度、掛町の高橋時計店の前迄来た時、私達の楽しいお話は中止せられました。其の處にはお母様とT奥様が、凡その品定めをして御本人の貴女を待つて入らつしやいましたから。賑やかな街を歩いてゐる時、お母様は「こんな賑やかな所に住んで居られるK子さんが、羨しはくわいか。」と仰有いましたわ。「羨しいわ。」と

爲に髪結さんの所迄お連れしておいて、私は夕餉の仕度に取りかゝりました。（丁度折あしく姉の子供が二人共病氣でしたので）急ぎは申ながら本當に何の御構ひも出来なかつたのが、思ひ出す度に残念であります。食後は早速香花園へ御案内しければなりません。に、貴女は何時迄も行かうとは仰有いませんでした。けれど、私とて同じ心ですもの、遅くあるとは思ひつゝ、さうして強いて申されませう。其の中貴女の發議で、二人は暗い二尺の庭に向つて、昔習つた「静御前」「夏の夕」「離れ小鳥」等をコーラスする事になりました。三年振りのコーラスもう嬉しくて目一杯涙をためながら歌つて歌つて歌ひ続けました。それから冷たいボンの木に寄つてチット私は貴女の「王照君」に聞惚れました。此處が何處だか誰れが歌つてくれてゐるのか、それさへ判らないで只靜かに流れ出る心好いリズムの中に浸つて全く陶酔し切つて居りました。木肌の冷たさについて我に返つた時、其處に未だ夢中になつて歌つて入らつしやる貴女を見出しました。歌好きの二人にとつては、菊人形より歌ふ事の方が遙に喜びで御座いました。



知らない二曲を教へ合つたのも其時でしたね、あ、斯うした喜びの時がつゞ、續いて欲しかった。けれどそれは許されない事でありました。時はズンズン進んで居りました。驚いて家を出たのはもう大分遅かつたと思ひます。香花園には風雅な提灯に美しく燃わたくさくさの菊咲乱れ、綺麗な人形が澤山ありましたが、恐らくそれらのものは二人の目には入つては居なかつたでせう。私達は餘り昂奮して居りましたもの。併し八段返しだけは是非見てをいて戴かなければいけません。ベルの鳴るのを待ちましたが、その間も暗い所へ行つては聲を忍んで新しい曲を覚ゆるのに夢中でした。眞に小學校の時から「歌狂」のニツクネームを與へられてゐた二人は、やはり大きな娘になつても、歌狂ひでありました。彼様も多人数の所で歌つてゐた事を今思へば、面を掩ひ度い程、恥しくなります。併し私は幸福だつたと思ひます。少くとも夢中になつて歌つて居た間だけは。ねね貴女は左様お思ひにあらぬか？八段返しのベルがなつたので會場へ參りました。ベンチにもかけぬいで二人はしつかり寄り添つて後に立つて居ましたわね。

最後の場面になるにバツと消燈しましたと思ふと、観覽席の天井から兩横が一時にクルリと廻轉して天井には櫻花が咲乱れ、間には數十個の提灯が一時にバツとどもりました。横には人形が十人づゝ手に手に櫻を持つて出で、舞臺にも又同じ人形が十人位現れ出ました。電氣仕掛の其の美觀にはさすがに貴女様も「まあ美しい。」と仰有いましたわね。香花園を出てから、T奥様のお宅へ大急ぎで參りました。二人の心理はよく御承知下さつてゐるお母様ではありましたが遅くなつて、御心配をおかけしました事は返すくもお氣毒でなりませんでした。嗚呼之からは書くに忍びません、けれど最後迄、書きつゞける事に致しませう。いよ／＼之限りお別れかと思ふと、急に悲しく寂しくなつて来て何だかほんやりしてしまひました。バスケットの中へ楽譜を入れて車中で練習するに仰有つてお母様から「何んですね、今にお嫁さんになる人が、車中で歌うて事がありませんか。」と云はれて、「でも汽車に酔はゑくて好いのです。」と貴女は甘くお逃げ

になりましたのね。私吹出し度くなる程可笑かつたのですけれど、歌好きの貴女だもの、御無理もないと思ひかへしてよ。停車場迄お見送りする事はお母様がさうしてもお許し下さいませんでした。博軌の電車の中ミ外で最後のサヨナラをした時は思はずホロリとしてしまひました。一時間前の幸福な心持はからりと崩されてしまひ、只寂しだけが私の胸に残りました。T奥様にもお別れしてたつた一人家に歸りました時、K様私に心寂しかつたでせう。でも貴女の御幸福をお祈りする事によつてやつと眠につく事が出来ました。斯うしてこの日も過ぎたので御座います。之で思出の糸は断れました。たつた之だけなのです。短時日の間に起つた喜びと悲しみに、めまぐるしい程心を動揺させた事とて、其印象は特にハッキリ胸に刻みつけられてなつかしい秋の印象とはかりました。此の時から二ヶ年、貴女はお嫁様になり、奥様にな

り、今又お母様になられました。貴女はいろいろお變りになり（でも御幸福に）なりましたが、菊人形と秋と私は少しも變りません。（でも私の家庭は變りました。それも貴女と反對に不幸になりました父を亡ひましたから。）秋が來れば忘れられぬ。其の時の事を偲んで、嬉しい氣持を味つて居ります。おしまひにはきつと「菊の世界」として賑々しく菊人形は開催されるでせう。さうですか？今度は背の君と愛らしい坊ちやま御同伴にてお出で下さいましては。菊人形と私がひたすらお待ちしてゐる三言ふ事を御承知下さいまし。K様秋の夜空が澄みきつて九日の月が凄い程冴白渡つて居ります。一昨年のかの夜もこんなお月夜でしたわね。あ、もうやめませう。限りのないことだのに！。随分長く書きました。なつかしい氣持で、當時を追憶しつゝ、御讀み下さいますから、Kは眞に喜びと致します。さらば！

時雨する頃

(大正一三、一〇、一〇)



緑の家のまはりの樹々も、朝な朝な水霜にだいぶ色づいて来ました。今年はいつともより寒さか早くおどづれて来たやうです。

會員の皆様には御機嫌よくいらつしやいますこと、お喜び申します、私も元氣で働いて居りますから御安心下さいまし。

× × × × × ×  
國家の難局を打開くべく、全國民一齊に起つて勤儉の實を擧げる爲めに、その第一歩として客年國民精神作興に關する詔書が煥發された。十一月十日の記念日に……。

「働くことは尊い。」働けよ人々、働くことは尊い。私は常にさう思つてゐます、都會に出てみますとあまりに遊んでゐる人の多いのに驚かされます。厚く粉黛をほごこした美衣の人の多いのに氣付きませぬ。然し自分で働いて美衣美食で暮すのはまだいゝとして、徒らに尊い時間を費すのは大きく云つたら亡國のもてではないでせうか。ほろの衣服をまこつて朝早くから夜そくまで畑に出て働いてゐる人達を考へたら、一寸の

時間でも尊いといふことに氣付かないでせうか。働くことを忘れた人はほんどうにこの上ない不幸者です。私共は力いっぱい働いて女性らしい純な美しさを心の内に養つてゆかうではありませんか。

× × × × × ×  
婦人の自覺！ 解放！ それは男性からも女性からも幾度もなく叫ばれてゐます。自覺解放といふ聲はもうき、あいてしまひました。けれど、きただけ解放されませんでしたか。自覺はして居りながら何故それが解放して表面に現はれて来ないのでせうか。勇氣と力さへあつたら既に自覺から解放へ進んで居たでせうに、まだに解放されないのはその二つが缺けてゐるからではないでせうか。……私達一般女性はせめて母校に對する丈けでも、明るい親しみを持つて親交の糧に潤ひあらしめて欲しい。

× × × × × ×  
住みよい社會、ごちらを向いても何かアラを探し出さうとするやうな眼をみるのみならず、隨分當外れの批評や意外の諷刺をきくことがある、殊に出来事の少い地方生活に於ては我々若い者の行動は非常に窮屈で

ある。もう少し人々が他人に向ける批評の眼を自己に注いでくれたら世の中がどんなに住みよくなるだらう

× × × × × ×  
原稿紙をひろけてペンを取りあげた時、私はいつも内に省みて醜い自我で一ぱいになつてゐる自分を見る。そんなこんな心の貧しいものが、こんなことをしていいのだらうかと自分を責めてゐる氣持ちになります。

(一九二四、一一、一〇 於編輯室)

### 他郷の朝に

須子美登里

静かな朝!!

昨日の午後の風にか、今日は澄みきつて明るい。

「御早うござります。えね日だすなあ」

「さつぱりした御天氣にありましたなあ」

静けさに聞くともあく途上の話に耳をはさむ。

「ねらう、寒うなつて来ました。そろ／＼綿人が欲

しうなりますかあ」

「ほんまに……年寄はあきまへん、もう寒うてな

あ」

「……………それで……………なあ」

言葉の調子にしみ／＼と耳かたむけた。……………いつしかもとの静さ。と。まだ朝露のしとせな青葉と、そばに赤かぶらを少しつんだ荷車がガタ／＼と通つた。

市場へかど、硝子障子の内から、じつと見送る。……

……もう仲秋も過ぎて行く、すぐに、菊も咲きはじ

めるであらう。他郷の菊もこれで三度、晩秋になれば

いよく故里がなつかしまれてくる……………

……………カチャリ、と鉄をおいて障子を開けた、深ん

だ空。萬古焼の工場の煙か、一すじ長く流れてゐる。

今朝は風がない。わずかに庭木の梢がゆらぐのみ。け

れども心地よい、うつすりと冷やかな氣は、部屋の隅

まで、流れひろこつてゐる。

あ、朝の静けさ!!

けれど、それもすぐに學校へ行く子供に、賑はさ

れるであらふ。

私はじつと、この静けさの中に立つて居た。

郷の家のしづけさ、それをしのびなつかしみて。

(伊勢にて)



詩 六 篇

倉田喜代子

海なる夜

海鳴り潮なり  
島の家 戀し

千鳥鳴く夜は  
母様 戀ひし

風が吹く吹く  
便りはせぬが

島の 母様  
なにして御座ろ

片貝

打ち寄する  
波にユラ／＼  
行きもどり

母を尋ねて  
はちれ貝

月の夜に  
尋ねあぐみて  
光る波

泣きに泣いては  
獨りねる

雨の日の空想

(お稽古歸り)

柳の堤を  
うなだれて

紺の蛇の目は  
物想ひ

ちよいとかしけた  
緋鹿の子に

深い吐息が  
もれて出た

浮りてかもめの

占ひぬ

三日月 (舊吉崎綾子様を偲びて)

秋の夜空の  
三日月に

ふつと思ひぬ  
その人を

澄んだ心と  
細眉の

察のやさしい  
お姉様

冴えたみ空の  
三日月に

昔の女を  
あつがしむ

秋の思出

サヤ／＼と

一、二、三、

かざす細柄に

手拍子で

想ひまぎらす

口ずさみ

堤の細道

雨が降る

占ひ

徒然に

獨り占ふ

吾が運め

赤いハートに

ほ、えまれ

黒いスピード

恨み泣く

淡い灯影に

只一人

己が運命を



葉すれのひびく  
秋の音は  
指月の山を  
偲ばせる

日曜日日曜日を  
彼の山に  
ホロ／＼おちる  
椎の實を  
競ひ拾ひし  
少女頃  
あ、!!其の時は—  
その友は

ほのかなる  
秋の匂ひも  
なつかしの  
萩の友をば  
偲ばせる

豫めおせる備へやかに

晝は蜂蝶の去來にまかせ  
夜は暗闇の惟に黙す  
長雨にうつろひ行くも  
烈しき風に散るもまゝなり

さあらんには何のために  
咲き出でしかこの花ばら  
地より生えて天に向ひ  
光と熱と露を食せる

訝しみ見る我をよそに  
汝が念輪のいかに深きよ!  
さあれ、至るがまゝに  
至らんとはするか眞紅のばら  
哀愁!

毎年のごとであれど  
また秋は訪づれて来た  
寂莫と!悲哀と!哀愁とが!



眞紅の薔薇

陽陰の花

お、眞紅のばら  
ひときは映ねて  
いみじくも汝は咲きぬ  
何思ひてかさあらでか?

黒ずめる土に根ざして  
悉く緑葉をまじへども  
血汐よりも赤かる  
花の心何を語るや

血に渴く人の子等に  
飲みたまへこいへば  
荒める魂の憤怒にも

私共の全身をとりまいて……  
哀つほい!寂れた  
何かのどん底に  
引きやり込まれて行くやうだ  
そうしてそこには……  
大悪を把持するサタンでも  
待ち受けてゐるやうな氣がする  
自然界の永眠!

お、それはたゞそれのみか  
否、人の世にも秋は來てゐる  
たしかに來てゐる  
色鮮かな春ばかりが  
さう續くものでないことは  
勿論である  
でも私は夏を見なかつた  
そうして眞紅に  
淋しい秋を眺めねばならない  
自然界の秋は!  
鮮かなその色を持つて  
飾り立てた春よりも



もつと深く深味がある  
然し人の世の秋は！  
みすほらしい姿ではないか。

詩 一一 篇

羽仁素子

夢の如き三日月の  
森の上に浮ぶ時  
わが耳に  
去にし日の懐しき調の  
こだまする。

あはれ  
あ、貴女の  
み懐しのみ聲の  
こだまする。

空仰ぐ瞳に

三日月の淡くにじみぬ。

露

うら、けき  
この秋晴の朝  
眞紅き花のほ、ねめる

玉のつゆの

紅き花びらに  
盛られたるぞうれしき。

紅き花あるが故に  
貴女の愛でさせ給へる。

和歌

秋風抄

鈴川ヒナ子

こすもす

陽陰の花

書よみつふま上げし眼にこすもすのやさしき色のこちよきかな  
しみくと胸におほゆるこすもすの甘きかたりのなつかしきかな  
今日ありて明日亡き身とぞ知れるかも友をか招く夜半のこほろぎ

去にし日は

羽仁素子

丈高く紅き葉鶏頭は淋しかりき病舎のほとり人も眺めず

一入とやせまさられしおん君の横顔に冷たき秋の夕風

母上のぬまさぬ午の淋しかりき欄に出て雲の行くを見る

弟と日暮る、丘を下りつ、拾ひし栗の敷など数ふ

朝夕にやせたる吾が面に見入りつ、暗き影見母の面はも

たまさかにそと過ぎ行きし夕風のうらさびしかり母はぬまさす

田舎路を野菊の色の淡くして見あぐる空に三日月のかかれぬ

秋の陽のな、めに照らす栗林あかき實一つころりと落つ

怒るまじ腹立てまじと思ひつ、又も弟など叱るあさましき我

吹く風のや、寒くしてこの日頃コスモスの花散りにけるかも

細莖のゆらゆら咲けるコスモスの露玉かなしくほこるびにけり

コスモスの花は咲けども友はなしこの花折りに捧げまつらむ

秋風に吹かれつ、咲くコスモスの永久にしるる、おもひ草かな

芝原の露をふみつ、朝露のこもらふなかに花折りにけり

魂まつるこころ寂しく詣れば道邊に咲きてまんどゆさげ赤し

啼く虫の聲細りつ、更くる夜をわれひたすらに文書き綴る

さながらにの蜘蛛のふるまひ小賢しく軒まボブラで住まひぬるかも

今は亡き吾師の靈前に捧ぐ

人の世の宿命さおもへ師の君のうつ、の影のたはす浮かみ來

師の君の柩の前につ、ましく教へ子なれば吾は泣かゆも

秋

つばあ

あきみちに露にぬれつ、こちよしのざくちよばなながれのなみ

あかいすあきひにうつりみづの面ははある色のあざやかしきよ



校 外 通 信

助川だより

平 島 緑

支那だより

有馬 淑子

陸路八百哩、東海道五十三次はおろか、焼けたお江戸を後にして、はるく、常陸の國、助川の宿迄参らうとは夢に思懸けませんでした。

當地へ來るに就いて今夏一應歸郷致しました際、母校へは是非お伺ひする覚悟で歸りましたので御座います。が、子は三界の首枷どころか(今春女子を生みました)。

手枷足枷昔のスポーツマンも憂無しにて、残念ながら遂にお目にかかることを得ませんでした。

只今は女中とも四人にてし極健康に生活を致して居ります。

先は御無沙汰のお詫び旁々轉居御通知申し上げます。(下畧)

いものどつくく、感じました。若き日、記憶力のよき日出來得るかぎり學の林に文わけ入る事、何より、後肝要に存じました。在學時代の私を省みつく、後悔致して居ります。幼き子に含ませます如き師の君の御さとし御教は、最早一生の中には希うても無き事とあきらめられぬ心を、無理に諦めて、ごきれく、に頭の底に居残り過去の記憶をよびおこしつ、家政にたづさはつて居ります。幸にも御やさしの母上を得、如何ばかりか不幸の際にも平素の生活にも迷ふ事なく交際も家事の事も、學校出ばかりの私が社會に生活して行かざるかわかりません。嫁ぎて唯夫婦の甘き歡樂の生活は實に無意義な事と、私は過去を省みて今迄僅か二年半ばを経たが、靜ない内にも姑の居ませざりせばと思ふ場合も幾度かありしが、我身の足らざるを思ひ母上の深き御經驗の御諭を師の君の御言葉とも思ひて使へ、何につけても我身程おろかなる者は無きにと思へば如何に不満に思ふ際にも少しも腹立ちません。常にこの心掛を持つて使へよう、學生時代に教はりし御諭を胸にこめつ、いやが上にも樂しき家庭を心にちぎりつ、感謝の中に月日を送つて居ます(下畧)

(前畧) 南園會報、御懐しき御皆様方の御文なり、御便り、さては女學校内の御様子拜見致し、何とも云はれぬ嬉しさに思はず會報ひしと眺め入りました。何から何まで日々進歩する大御代と共に、榮え行く女學校の御有様、諸先生方を始め皆様の御骨折如何ばかりかと御察し申し上げます。何不自由なく結構な學び舎に、今日此頃いそしみ遊ばす皆様心から御羨しう存じます。さうぞしつかりと御學び遊ばす様お頼み致します。私等は早時代に遅れた者の仲間入になりました。さうして此の日々進む世の文明に追いつかれませう。新聞により雜誌によりてやつと世の有様を知るのみです。他に別にこれと云つて學ぶべきものも見出しませぬ。學舎出でては如何にしても、充分な學問は出來る

朝鮮だより

横山ひゑ子

(前畧) さて過ぐる日、國許より送付せし南園會報確に受納いたしました。怠り勝ち私には何よりの修養の糧で御座いました。厚く御禮申し上げます。母校は年と共に進歩發展致して居りますのには、いそ驚き且嬉しう存じました。昨年五月懐しき故里を後に朝鮮致し當地に参りました。言語風俗の違つた白衣の鮮人許りにて異様に感じて居りましたが、何時かそれにもなれて、此の頃には彼等の風習に一種の興味を以て見るやうになりました。當地で一番困りますのは言葉の不通な事で御座いますが、普通學校に行く子供は大方の日用語は解しますのでよく通譯をさして居ります。内地と異り、進歩の度も低く將來のあるやうに思ひます。卒業生の方にも大分御出のやうに見え何より嬉しう存じます。(下畧)

長崎だより

松浦次子

御寒さ激しき折からおつかしき諸先生には、其の



後御機嫌うるはしく渡らせられますや。御伺ひ申上ます。下つて私事恙なく暮してをります故、他事をがら御休心下さいませ。

其の後打たれて御無音致しまして何とも申しわけも御座いません。悪しからず、御許し下さいませ。先日は御親切に南園會報御送り下さいまして有難く御禮申し上げます。(下畧)

### 大阪だより

山崎 貞

寒さなほ去り難く候折から會長様御始め會員御一同様には御障りもあらせられず候や御伺ひ申上げ候。私事平素は御無沙汰にのみ打過ぎ御申譯も御座なく候。何卒お許し下され度候。さて昨年末には御なつかしき南園會報御めぐみ下され誠にも有難く厚く御禮申上げ候。御ねんごろなる御訓をはじめ嬉しき記事の、あふれたる美しき會報を繰り返し拜見致し御なつかしき母校の進歩發展を何時もながら何より嬉しく存じ候。其の後も暇ある毎に取り出し夢の如き過ぎし日を偲びて、何よりの楽しみに致し居り候。私事御かけ様にて身体は

相變らな健かにて、大阪より汽車にて三十分許の静かなる郊外にて平和に暮らさせて頂き居り候へば憚りながら御休神下され度候。先は御無沙汰の御詫びかたがた御禮まで申上げ候。(下畧)

### 山口だより

中村よし子

降ることもなく降り出す五月雨の期となりましたが、御なつかしい故里の皆々様には御無事で學事にいそしんでいらつしやる事と存じます。私事長らく、御無沙汰致し、なんとも御詫びの申様も御座いません。何卒御救し下さいませ。

渡連致しましてからは病の爲志した事が出来ず實に残念で御座いましたが、これも運命と申すので御座いませう。此の度山口縣廳に勤める事になりましたから御報知申上げます。御賢明なる皆様期節は悪化して來ましたから御身御大切御勉學あらん事を(下畧)

### 朝鮮だより

野田 幸代

うかび申わけ無く拙き筆を起らせ候。(下畧)

### 臺灣だより

小澤 初子  
(實八)

(前畧) 七月初旬當地に轉住致し家事に何かと取りまされ遂々失禮致し候。又御面倒様ながら住所御變更さる様一重に願ひ上げ候。當地は田舎にて、内地人は僅に二百人足らずにて朝鮮人相手にて何かと不自由に感じ居り候。なれども住めば都とやら永らく住ひ居られ候方も之あり候へば、便利な處に就べての我儘に御座候。他の事は我慢致し候ども言語の通ぜぬが一番つらい、丁度噤者にひとしく御座候。他にはさ程變りし事も御座なく候。先は取り急ぎ御通知まで。(下畧)

### 大阪だより

内藤 静子

(前畧) 煤烟の都にも陽氣は訪れてまゐり候。さりながら、仰の如く自然を味ひ、したしむ事は中々思ひもよらず候。昨年六月當地に参りまだ珍らしかるべき土地なるに、矢張り産聲上げて二十ヶ年育てられし郷里がふつかしく存ぜられ候。いつも、母校の日日御發展の御様子承り、誠にうれしく御よろこび申上げ候。今日も今日とて郊外の陶村様へ参り、母校の御噂に一日を過し候。今迄御無沙汰致し事がひし、胸に

永らく御無沙汰申上げまして、いまさら詫びいたし様も御座いません。其の後校長先生様諸先生南園會員皆々様には、ますます御丈夫にわたらせらる、事と、何よりも何よりも御目出度存じます。私事もおかけ様にて至極元氣に日々家事にいそしみ居りますから、他事ながら御安心下さいませ。いままでも近く近況御通知申上げますところ、生れながらの惡筆にて、書いては破り書いては破り失禮いたしました、あまりの御無沙汰惡筆行列を御ゆるし下さる様御願ひ致します。私事も昨年四月當地に轉宅致しました。初めて見る植民地臺灣人、見る物聞く物、めづらしくも一入國の皆々様が戀しくて、上陸いたしました時は涙が出ました。御笑ひ下さいませなそれより数時間たつて、南の町に着きました。内地にある草木は一つとして御座いませんし、いやになつてしまひます。臺灣の果物は皆様方に差上度程おしい御座います。私も御恥しいな



がらも一人の母になりました。腕白坊で教育無経験の私にはなにかかむつかしく御座います。今となつて學校時代が戀しく、あぜ料理家事等一心になつたかど、しみじみ後悔して居ります。娘時代には何の慾も御座いせんが家を持つて初めてわかります。おそまきながらも料理の會等御座います時は是非参ります。南園會の皆様も先で後悔遊さぬ様にしつかりと御勵み遊ばす様御願申上ます。(下畧)

神戸だより

萩の子

みなつかしき皆様、あの朝夕親しんだ校門を出る時には、月一度、年幾回位の手紙位はと思つて居ましたのが、月日のたつにつれてだん／＼うすれて、此の頃では、たまに郷里に歸つても母校を訪ふ事さへいたしません。まして親しんだみゑ様に對しても申譯ない程失禮してゐます。その失禮を此の誌上で御詫びいたしますの、ほん／＼に勝手ですけれど、考へて見ますと、私達の學生時代は楽しかつたのね。私は一度あの時代があつたらと、今の女學生の生々し

た姿を見る度に思ひます。世の中のすべてのものが、楽しく美しくかつたあの時代が、ほんの一日でもあつたらと思ひます。私と同じ考を抱いてゐる人は、私だけではないでせうね。皆様、南園會報の發行を待ちわびて、母校と、在校當時をしのぶの情でいつばいす。(下畧)



本校記事

本校豫定行事鈔

大の十三  
 四月 八日 入學式舉行、午前八時始業、志都岐神社參拜  
 廿二日 本校創立記念式舉行  
 五月 十七日 忠正公勤王事蹟講話  
 廿五日 松陰神社參拜  
 廿七日 海軍記念日講話  
 六月 一日 午前七時始業  
 十日 時の記念日講話  
 廿五日 皇后陛下御誕辰祝賀式

廿一日 本日より夏季休業

七月 夏季休業  
 八月 一日 午前八時始業  
 十三日 乃木大將全夫人遺徳講話  
 十月 六日 春日神社例祭參拜  
 十三日 戊申詔書奉讀式舉行  
 十五日 志都岐神社參拜  
 三十日 教育勅語奉讀式舉行  
 卅一日 天長節祝賀式舉行



- 十一月
- 一日 午前八時三十分始業
- 三日 本校開校記念式舉行
- 廿一日 松陰神社參拜
- 廿三日 英雲公御事蹟講話

十二月

- 一日 午前九時始業
- 十二日 鶴谷先生淑徳講話
- 廿五日 本日より冬季休業

一月

- 一日 新年拜賀式舉行
- 九日 始業式舉行
- 廿四日 杉瀧子刀白の淑徳講話

二月

- 十一日 紀元節拜賀式舉行
- 三月
- 一日 午前八時始業

- 十一日 陸軍記念日講話
- 二十日 卒業證書授與式舉行
- 廿四日 修業式舉行
- 廿五日 春季休業
- 廿七日 入學試験舉行

私達の日記より

自大正十二年十一月 四年委員  
至大正十三年十月

十一月

三日、午前八時半より講堂に於て、開校記念式が舉行されました。  
校長先生より「この學校は大正元年に開校したもので、最早十三年の歴史を有してゐる。縣下の女學校の中では古い方であつて、開校以來設備の上に於ても、學習の上に於ても、年々に榮へて行く事は大變によろこばしい事であつて、今後も益々向上發展する事を皆さんと共に祈る」と云ふ意味の御講話がありました。  
本日は授業は晝迄で、午後は保護者會と、菊花會が

ありました。  
十四日、午後一時より戸山學校の體操視察員がこられて、私等の體操を見られました。

其の後講堂でバツクの跳び方や、其の他種々の運動について、御批評がありました。  
「由來日本人は西洋人に比して罹病率が多く、十二才より二十才位迄の間に、呼吸器病に罹る人が非常に多いので、現今の日本の女子にとつて運動は最も必要な事であるから、皆さんは體操其の他あらゆる運動によつて、十分に身体を健康にしなければいけない。又姿勢が悪いと肺の働が十分でないで、結核に罹りやすいので、胸を廣く張つた正しい姿勢をとり健全な身心をもつて、遺憾なく勉強しなればならない。」  
等種々の有益なお話がありました。  
十五日、午後二時から一齊に、生徒所持品の檢閲がありました。  
安野先生より遺失品に關する御注意があつた後、中野先生からもくれ／＼御注意がありました。  
十六日、午後一時二十分より講堂で、鹿兒島の三島氏の乃木婦人に關しての御講演がありました。

夫人の御幼少の時より御死去遊ばす迄の美談を、長時間にわたつて熱心に話して下さいました。  
二十一日、午後零時半より講堂で松陰先生の記念講演會がありました。

二十八日、本日第二學期試験割が發表されました。  
二十九日、講堂に於て、長門峽を下つて來秋された齋藤吊花先生の御講演がありました。  
殺人の動機と原因についての事實談で、母が子を養育する上について如何に大なる注意を要するかといふことが、恐しい程耳に響きました。(本四川上富貴子)

十二月

三日、本日から七日迄第二學期本試験が行はれます  
六日、世界一週旅行家宇佐川正昭氏の世界漫遊の御講話が長時間にわたつて、御座いました。大變面白いお話でした。  
七日、北野先生、村田書記先生の兩先生の就任式が舉行されました。式後校長先生から、廊下を寒さの爲に小足でチョコ／＼と走る風が一般にある。それを止めてサツサと左側通行をして、各自の目的の場所に行



く事。の御話がありました。

二十四日、午前九時から終業式が行はれました。校長先生から本年は本校としては別に變つた事は無いが日本の國としては前古未曾有の大震災があつた。これが爲に日本の蒙つた被害は莫大のものである。故に皆さんは日本の將來を考慮し、大に奮發しなければならぬ。といふこと、第二學期の成績を見て、成績の善かつた人々は益々奮勵努力を爲し、悪るかつた人も益々奮勵努力する様に努めなければならぬ。といふ事、これまで年賀郵便は一種の虚禮となつて居た傾もあつた。今年は九月一日の大震災のために、葉書や切手類の供給が十分でないから、逓信省からもなるべく年賀郵便を廢する様に宣傳して居られるから、皆さんも此の場合甚だよき機會であるから年賀状は差し控へられたい、又一月一日の祝賀式も皇室を始めとし奉りて、社會一般に質素旨とされてあるから、皆さんの家庭においても其の心持ちでお正月を迎へて欲しい。皆さんは健康なる身体をもつて目出度くお正月を迎へる様に長い時間にわたつて、細々と御訓示が御座いました。(本四 中村豊子)

一月 (大正十三年)

一日、呪はれた大正十二年を送つて、目出度く大正十三年の新春を迎へました。  
午前九時拜賀式舉行。

校長先生から、今年は去年の不幸を取返すため輕佻浮華の風を去り、こまでも質實剛健を胸にきざんで大に奮發せねばならぬ。とお話になりました。尙昨年の暮の虎の門事件に付いてお話がありました。其の犯人が光輝ある我防長人であつたといふ事は實に憤慨に堪へない次第であります。

八日、午前九時より始業式舉行。  
校長先生が御病氣とのことで中野先生が代つて式辭をのべられました後、級長の改選を行いました。

九日、今日から授業開始、午前九時始業。  
十五日、復も關東地方に九月の震災に劣らぬ激震があつた。と、揭示されました。私共の心は恐怖にみたされました。郵便局でも電報の輻湊を豫想して、普通電報を受けませんでした。

廿二日、午後講堂で丸龜隊第十中隊長の岡藤大尉

といふ萩出身の方のお話がありました。

今我國は暗礁に乗上げて、まさに水の入りんとする船のやうな状態にある。この船の扉を閉めに行くのは誰であらうか。さうか皆様かこの扉を閉めて下さい。そして我國を救つて下さい。それには、徒らに虚榮の夢にあこがれてゐるいで社會のため、人の爲めに大に働いて下さい。といふ意味のお話で、五百の生徒は咳一つするものも無く熱心に聴きました。

廿六日、皇太子殿下御成婚奉祝の式がありました。式辭として校長先生から兩殿下の御逸話を承りました。東京で舉行される三唱いたしました。

祝ひ奉る嬉しさに万歳を三唱いたしました。式後荒れ狂ふ吹雪の中で女關前に記念樹が植ゑられました。その後一同兩殿下の千代に八千代にお榮え遊ばされんことを祈りするため、春日神社に參拜しました。(本四 大岡高子)

二月

十一日、午前九時より紀元節拜賀式舉行、君が代、勅語奉誦等が、形の様になりました校長先生は、我が

國体の立派な事について細々と御話が御座いました。

十四日、放課後講堂に集合、明日衛生デーを催すについて。お話しがありました。明日は特に、食物の分量、食し方に注意する事、爪を短くつむ事、手垢をつけぬ事、汚れた衣服着用の者はさかへる事、授業中の姿勢、近視眼の注意、明日午前中に咽喉の検査をなす事等、御注意が御座いました。

十五日、第一回衛生デー。午前九時から山本校醫の咽喉検査が御座いました。午後より、少食減食法、検温器の使用法、出血の手當、インフルエンザと扁桃腺炎について、校醫山本醫學士の御親切な御話が御座いました。(本四 中村芳子)

三月

三日、本日より試験行はる。  
十日、今日は陸軍記念日であります。日本がまた今の如く世界から認められぬ時に、あの大國露國を相手として戦ひ、三十八年三月十日奉天の會戦に決定的大勝を得た日であります。この日岡田少將より左の講話がありました。



第一、戦争はこんなものであるか。第二、此の日の戦争はどんな烈しい戦であつたか。第三、戦争の悲惨と戦争の避くべからざる事、終りに戦争中の面白い事、乃木大將の水を尊ばれる事等話されて、大變面白く承りました。

十一日、試験が終了しました。

十八日、卒業生の謝恩會が講堂で開かれました。

十九日、今日は第一時間だけ授業をして第二時より大掃除。明日の卒業式場の整理。展覧會場陳列等、明日の用意を備へておきました。

二十日、午前九時五十分より卒業證書授與式舉行。

證書及び褒狀授與せられた後、校長先生よりの訓示がありました。亞米利加が合衆國前大統領ウィルソン氏の學生時代の逸話は涙のじみ出る様な御話で御座いました。最後に女の一代の重任は育児である事、よく子女を教養して國家に役立つ國民を作らねばならぬといふ御話がありました。

林郡長殿が知事閣下の告辭を代讀せられ、來賓祝辭があつて後、岡田さんの在校生總代の祝辭、岩武さんの卒業生總代の答辭がありまして間もなく式は閉ぢられた。

れました。

式後卒業生の展覧會は多くの參觀者がありました。午後一時から卒業生に對しての送別の餘興があつて面白くありました。

二十四日、午前九時二十分より講堂で終業式舉行。

(本四 菊芳野和子)

#### 四 月

八日、午前八時半より始業式舉行。校長先生から、新年、新學期に對する御さしごさございました。

式後上利先生の新任式がございました。

九日、午後二時五十分より各組の組分けが行はれました。

十日、午後一時半より入學式が舉行され、私達の新しいお友達が百三十八名御入學なさいました。

二十二日、午前九時十分より開校記念式が舉行され式後談話會が開催されました。(本四 藤屋春子)

#### 五 月

五日、四年生と實科二年生は、京都、宇治山田、奈

良、大阪等に修學旅行のため、中野安野守田安永の四先生に引率されて、午前四時半より徒歩で三谷に、一部は自動車にて山口に向つて出發しました。

九日、本科三年生は伊藤田淵野田森脇の四先生に引率されて、正明をへて山口に修學旅行の爲に出發されました。

十日、山口方面に行かれた三年生の方が歸られました。

十一日、私等の修學旅行隊は、本日午前四時厚狹驛に下車して、それより正明市迄汽車に乗り、正明市より汽船を利用しました。私等が一週間目に初めて萩の黒い土を踏んだ時は、何とも云へませんでした。

十七日、一年と二年の方が、佐々連洞見學の爲に出發されました。

二十一日、午後零時五十分より講堂に集合。三年の方の修學旅行談がありました。大變面白くありました。

その後で校長先生より、

二階の窓より物をなげさる事。  
運動以外の時はしどやかにするこゝぞ。

硝子の破損するもの甚だ多い、ので注意する事。すべて事物を叮嚀にあつかふ事。

等の御注意があります。

二十七日、海軍記念日。午後零時四十分講堂に集合。校長先生が二十年前の戦争のお話をなさいました。

二十八日、九州地方に御旅行された北白川宮妃殿下が來萩されました。生徒一同金谷天神先にて御迎へしました。

二十九日、北白川宮妃殿下午前六時半御出發、御見送りし奉りました。

三十一日、皇太子殿下御成婚御披露の御饗宴行はせられたにより、本校でも萬歳をとなへ、御祝餅を分配されました。(本四 川上富貴子)

#### 六 月

三日、放課後講堂に於て第一回自治會が開催されました。

七日、放課後講堂に於て組長副組長會議が開催されました。

十日、時の記念日で御座いました。校長先生から時



に關しての御講演が御座いました。  
二十五日、午前七時半から地久節拜賀式が講堂に於て舉行されました。校長先生から  
陛下の御日常の御謙遜なる御美德について、くはしく御話が御座いました。(本四 中村豊子)

七月

一日、學期試験日刺發表。掲示板の前に集つて、驚いた面持の人、決心のはの見ゆる人、様々の思ひで家路に急ぎました。

八日、學期試験舉行。

十二日、松方公爵國葬の日でありまして歌舞音曲は一切止められました。校長先生から、松方公の我國の財政について大に盡された事をお話しになりました。

十三日、本日より水泳が開始されました。午後二時菊ヶ濱に集合。四時解散。

十六日、授業はありません。衛生デーを催されました。

午前七時より一同運動場に集合して、運動帽運動服の檢閲がありました。八時より講堂にて山本校醫の近

視眼について衛生講話がありました。その中で文字を明瞭に書くこと、姿勢をよくすることが近眼にあらぬ豫防法として最も手近なものとして、早速實行するやうに申されました。

十九日、午前七時終業式舉行。

校長先生から、本學期中に自治會の成立した事と硝子の破損の少くなつた事は、大へんよろこばしいことである。又夏休み中には、身体を健康にして十分働けるやうな体にしておかねばならない。夏休み中の注意をこま／＼とお話し下さいました。(本四大岡高子)

九月

一日、午前七時始業式行はる。

式場にては校長先生の詔書奉讀、後皆さんの元氣な顔を見て喜ばしいと申されました。そして昨年の東京横濱の大震災大火災に對しての色々の哀れる境遇の人々や、九死一生を得た人々、被服廠の慘事についての講話があり、その被害者の人數なきのお話しもありました。今日の日本國民の近來の奢侈贅澤の戒むべき事、勿論氣をひきしめて欲しいと申されました。自治會の

(大田三幸)

出來た事は結構とほめられました。

中野先生より明日より七時始業、遅參せぬやうに、又級長副級長の改選をするやうに申されました。後は大掃除でありました。

三日、本日から朝會を初め、朝會は運動場にてなすこと、きめられました。

十三日、放課後零時三十分講堂集合。  
校長先生より乃木大將殉死に對しての講話が御座いました。中野先生よりは、故金子重輔先生に對する生徒の書き出した感想文を朗讀せられました。

十九日、放課後一同講堂參集。  
校長先生の講話は先般虎の門外の大不敬事件で御座いました。この事件は歴史に未曾有の大汚點を残したばかりでなく、皇室に對し奉り、又一般國民に對して何とお詫してよいかと語られる時校長先生のお顔は青ざめておいでにありました。

本年の修學旅行の伊勢參拜をしたのもそのためです。

最後に女子たるものは子女教養に當り動かすべからず、信ぶの大である。母なるもの、責任はどんなに

大なるものであるかと話され私等に大なる感動をあたへられました。

中野先生より大事件に對しての感想文を出す事、嗜眠性腦炎にかゝらぬやうに申されました。

二十一日、十時半より講堂にて祈禱式が行はれました。

校長先生は山口に出席せられたので、中野先生が代つて式をあけられました。默禱祖先に對し、一般國民に對するお詫びとして行はれました。十一時松陰神社に參拜しました。

二十四日、朝會の際、松田少將の短時間の講演がありました。(本四 芳野和子)

十月

三日、山口縣教育會主催、本縣体育大會に出席する選手は、守田、伊藤、田淵の三先生に引率されて出發なさいました。さうぞ立派に戰つて下さい。

四日、戦勝の飛電はしきりに至ります。學校に集つた多くの友達も非常に喜ばれました。

五日、選手一行が歸萩されるので、一同六本松迄御



迎へに行きました。元氣に満ちみちた選手の顔を見て思はず萬歳を叫びました。  
 六日、講堂で、体育大會の情况報告会がありました。中々面白くきかれました。  
 二十六日、絶好の運動日和、山を築いた來覽者の中に立派な演技が行はれました。  
 三十一日、午前九時から、天長節祝日の拜賀式が行なわれました。校長先生から、奉祝の誠意を披瀝して後、時局に對する御訓話がありました。  
 (本四 藤屋春子)

學科受持

修身	校長先生	裁縫	齋藤先生
習字	池上先生	國語	中野先生
歴史	伊藤先生	英語	赤川先生
理科	伊藤先生	國語	赤川先生
裁縫	北野先生	圖畫	柳原先生
作法	北野先生	作文	柳原先生
家事	上利先生	裁縫	森脇先生
音楽	安永先生	裁縫	上田先生

生徒數及び級監

裁縫	手藝	野田先生	茶儀生花	上利先生
數學	農業	安野先生	体操	田淵先生
体操		守田先生	英語	久芳先生
歴史		藤田先生		
地理				

本四	梅	五〇	上田先生	北野先生
本三	菊	五〇	北野先生	上田先生
本三	梅	五〇	森脇先生	伊藤先生
本三	菊	四八	伊藤先生	森脇先生
本二	梅	五〇	野田先生	赤川先生
本二	菊	四九	赤川先生	野田先生
本一	梅	四九	齋藤先生	池上先生
本一	菊	五〇	池上先生	齋藤先生
實二		三二	上利先生	安永先生
實一		三八	安永先生	上利先生

自治會の創立

六月三日、本校生徒の發起により自治會が創立され

ました。其の主旨は申す迄もなく、生徒自身の内省判断によりて、與へられたる自己の業務に専念して、一は自治精神の養成に資し、一は校風の作興に努むる事にあります。創立日淺きに公共心の發達の如き注目さるゝものがありますので、將來其發達に伴ひ、其の成績の見べきものがあるにせう。

勤儉強調週間

十一月十日から十六日迄の一週間を、全國一齊に勤儉強調週間として、特に勤儉貯蓄を奨励されました。我々におきましては、此の週間を出来るだけ有意義に終らしめ、又將來此の良習慣を持続せしむる方針で、生徒に作業を課する事になりました。  
 十日午前八時から民風作興に關する御詔勅の奉讀式を舉行し、放課後は毎日共々生徒を四時迄居残らしめ、家庭の縫物を一枚以上仕あげるか、家庭に縫物のないものは、袋貼りをいたしました。  
 平常の授業を了へ掃除をすまして、一同は非常に緊張したる心持ちで作業にいそしみました。

体育デー

十一月三日は文部省の制定された体育デーでありました。午前八時半學式後、山本校醫の体育に對する体験三醫學上の見地から有益なお話がありました。其後引きつゝ、き庭球大會が開催されました。

篤志者芳名

- 大正十二年十一月より  
 大正十三年十月まで
- 其後本校及び南園會に對して左記の方から頭書の通り物品の御寄贈が御座いました。
- 一、雨傘 十二本 河村 米一氏 萩町
  - 一、日本料理法大全一冊 高尾伊太郎氏 萩町
  - 一、和洋裁縫大全三〇冊 松原 翠氏 萩町
  - 一、銀カッパ 一個 山中 三吉氏 全
  - 一、全 一個 藤川 東輔氏 全



本會記事

自大正十二年十一月  
至大正十三年十月

第十一回同窓會

十月二十六日午前九時より、開催せられました。同日は母校第八回運動會がありましたので、出席者百名以上に達し、甚だ盛會でした。

齋藤會長より十一月二日三日の兩日、刺烹の講習を本會の主催としては如何。本會員中に希望するものもある旨御話がありましたので、一同拍手を以て賛成の意を表しました。尙運動會にはなるべく多數の出演者を希望す。

續いて中野副會長は、本日は時代の趨勢に鑑み、申合せにより、質素なる服装で出席せられたるは

誠に結構なることと思ひます。今や日本は大切な時ですから、無用な事には大に節約し、又大に働いて、此の國を盛にせねばなりません。それから毎年一回の母校の運動會には、多數の會員の觀覽を望む。

柳原理事は南園會報に同窓會員の投稿を歓迎すること、並に誌代を三十錢としたる理由、住所異同につきては至急通知を乞ふ旨の御話をせられました。

南園館後庭にて記念の撮影をなし(口繪参照)其の後南園館内に團樂して晝食を喫し、續いて趣味多き福引に興を添へ、愉快の裡に

閉會いたしました。

第八回運動會記事

大正十三年十月二十六日、朝來の曇天漸くはれて、絶好の運動會日和となりました上に、日曜をうけて、運動開始前から引き續いて來觀者があり、午前十時頃は立錫の餘地なき盛況でありました。

殊に當日は第八回同窓會も開催されましたので、同窓生の來觀者も多く、毎年振はない同窓生競技の出場者も四十名以上ありました。今年も演技の方法が、以前と非常に變つて、競技を主としましたので、運動場は今迄にない緊張をし

てみました。

今年は小學校選手のリレー競争が加はつたため、參觀者に一層の興味をそへました。

順序

- 開會式 午前八時半
- 一、全校生徒体操
- 二、走技(實一) 五十米、百米、二百米
- 三、庭球第一回戦
- 四、走技(本三菊) 五十米、百米、二百米
- 五、級技(本一梅) 五十米、百米、二百米
- 六、走技(本四菊) 五十米、百米、二百米
- 七、籃球第一回戦
- 八、リレー豫選
- 九、級技(本一菊)
- 一〇、走技(本四梅)

五十米、百米、二百米

二、級技(實二二)

三、走技(本三梅) 五十米、百米、二百米

三、級技(本二菊)

四、走技(本二梅) 五十米、百米、二百米

五、校技(全校生徒)

六、ランニング豫選

七、アスレチックダンス(全生徒)

八、走技(本一梅) 五十米、百米、二百米

九、直心影流薙刀型(本四實二)

一〇、バスケットボール二回戦

三、小學校生徒リレー豫選

三、級技(本二梅)

三、走技(本一菊) 五十米、百米、二百米

四、庭球第二回戦

五、級技(本三)

六、走技(本二菊) 五十米、百米、二百米

七、籃球戦決勝

六、級技(本四梅)

五、小學校選手決勝

三、走技(實一) 五十米、百米、二百米

三、ランニング決勝

三、級技(本四菊)

三、庭球決勝

三、庭球特別仕合

三、同窓生競技

三、來賓職員競技

三、リレー決勝

三、体操(全生徒)

閉會式、午後五時半

◎バスケット戦況

第一回戦



1 明倫 一分二八秒  
2 白水

◎小學校選手リレー決勝  
尋常科

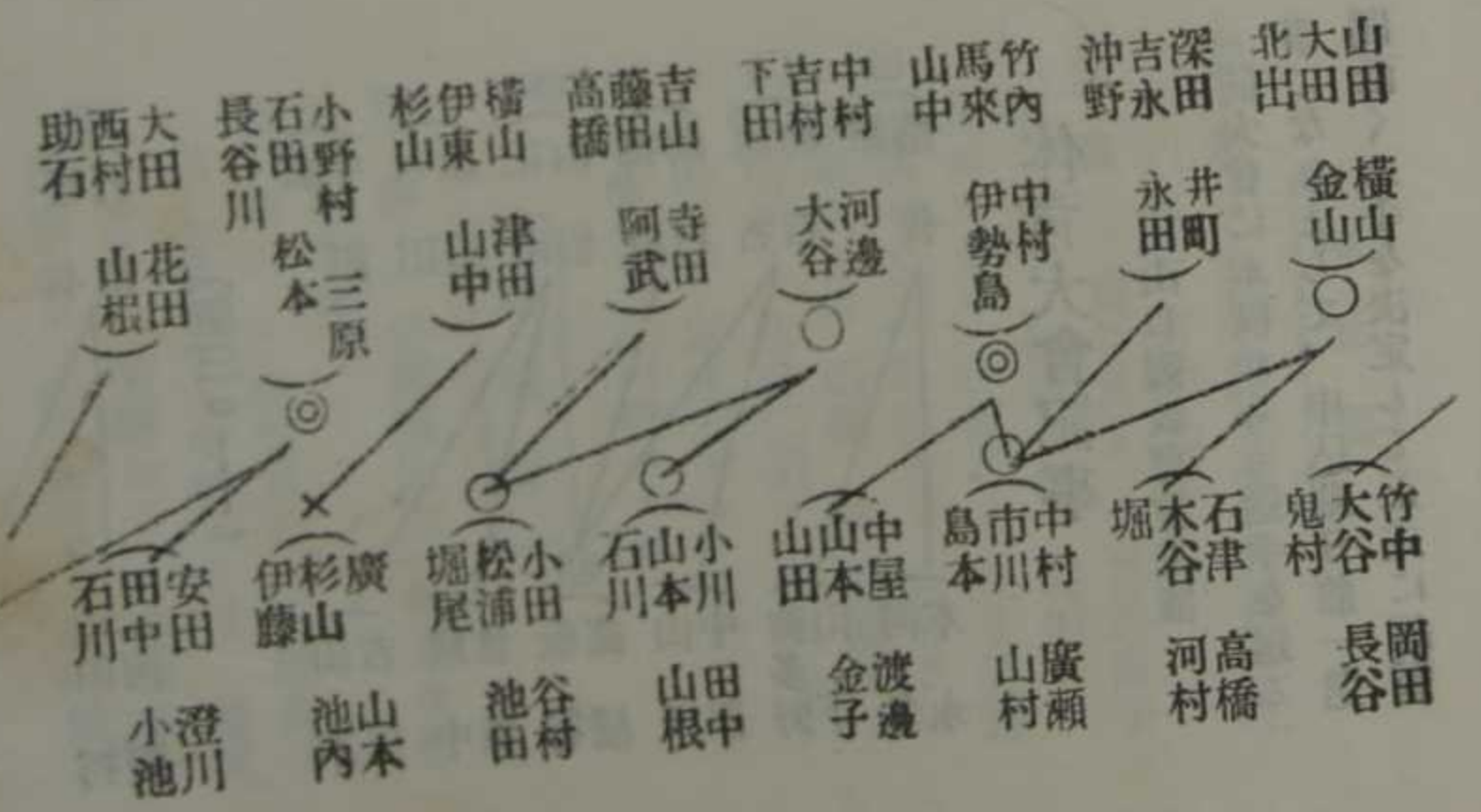
優勝カップ  
トラックは 本三菊  
庭球、籃球は本四菊に授與されま  
した。

位順	1	2	3	4	5	6
庭球	三菊二二	二菊一〇	四梅八三	三梅五一	四菊三	一菊二
籃球	四菊一〇	六二菊六	四三菊四	二一梅二		



体育デ-競技

かくて尋常科の優勝旗は明倫校  
に授與され、高等科の優勝旗は大  
井校に授與されました。



◎庭球戦況

第一回戦  
勝 負  
(安達) 〇—〇 (松浦)  
(弘中) 〇—〇 (花田)  
(倉重) 〇—〇 (山根)

第二回戦  
勝 負  
本一梅二 — 實一〇  
本二菊二 — 本一梅〇  
本三菊二 — 實二〇  
本四菊六 — 本四梅〇

決勝戦  
勝 負  
本二菊二 — 本一梅〇  
本四菊二 — 本三菊〇  
本四菊二 — 本二菊〇

◎五十米決勝

勝 負  
(齋藤) 〇—〇 (安達)  
(渡邊) 〇—〇 (河村)

第二回戦  
勝 負  
(清須) 〇—〇 (高橋)  
(齋藤) 〇—〇 (田中)  
(渡邊) 〇—〇 (河村)

◎二百米決勝  
寺田アサ子 一六、秒  
金子 萩野  
岡田 鯉子  
鬼村 露子

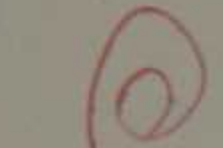
◎八百米リレー決勝

勝 負  
阿武ヨシ子 三三、九秒  
木谷壽美子  
吉山シツ子  
大谷 チエ

◎探点表

本三菊 二分三三秒  
本二梅  
本四梅  
本二菊





を始めたしました。出場選手は  
何れも立派な態度で奮闘なさいま  
したのみならず、其の成績の如き  
も僅二點の差で縣下第二位といふ  
好成绩を占めて、庭球賞寄贈の花  
輪を受けて、歸校なさいました。

庭球選手  
齋藤春子 秋山千代(補)  
石川夏子 岡田カツ(補)

ランニング選手  
二百米 木谷壽美子 阿武ヨシ子  
百米 金子 萩野 山根 秋  
五十米 寺田アサ子 岡田 静子

リレー選手  
木谷壽美子 吉山静子 阿武ヨシ子  
寺田アサ子 小野村チヨ(補)

右の中、庭球、二百米、リレー

は何れも本校が最優勝の桂冠をか  
ち得ました。

南園會役員

會長 齋藤校長先生  
副會長 中野先生

學藝部

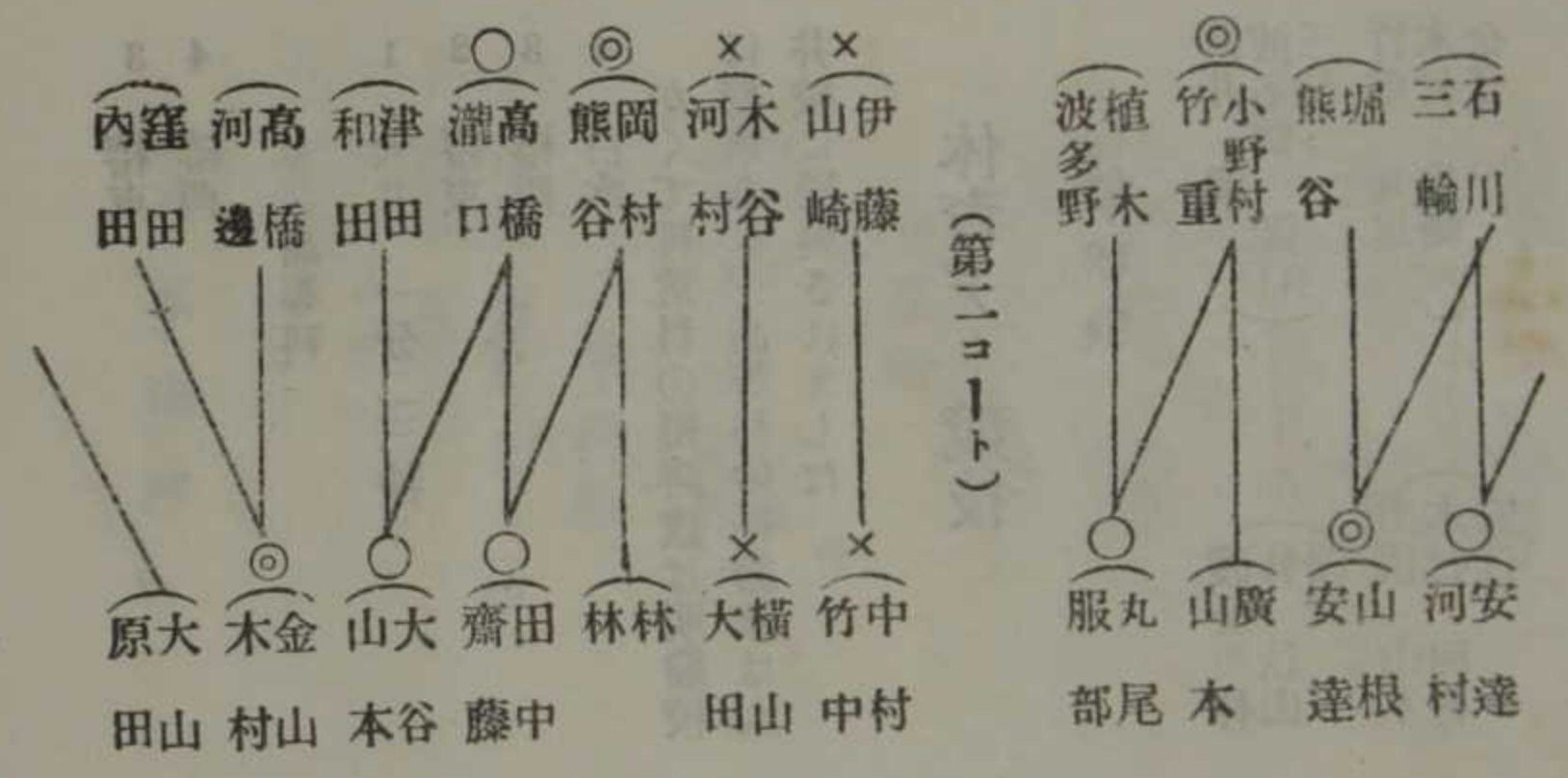
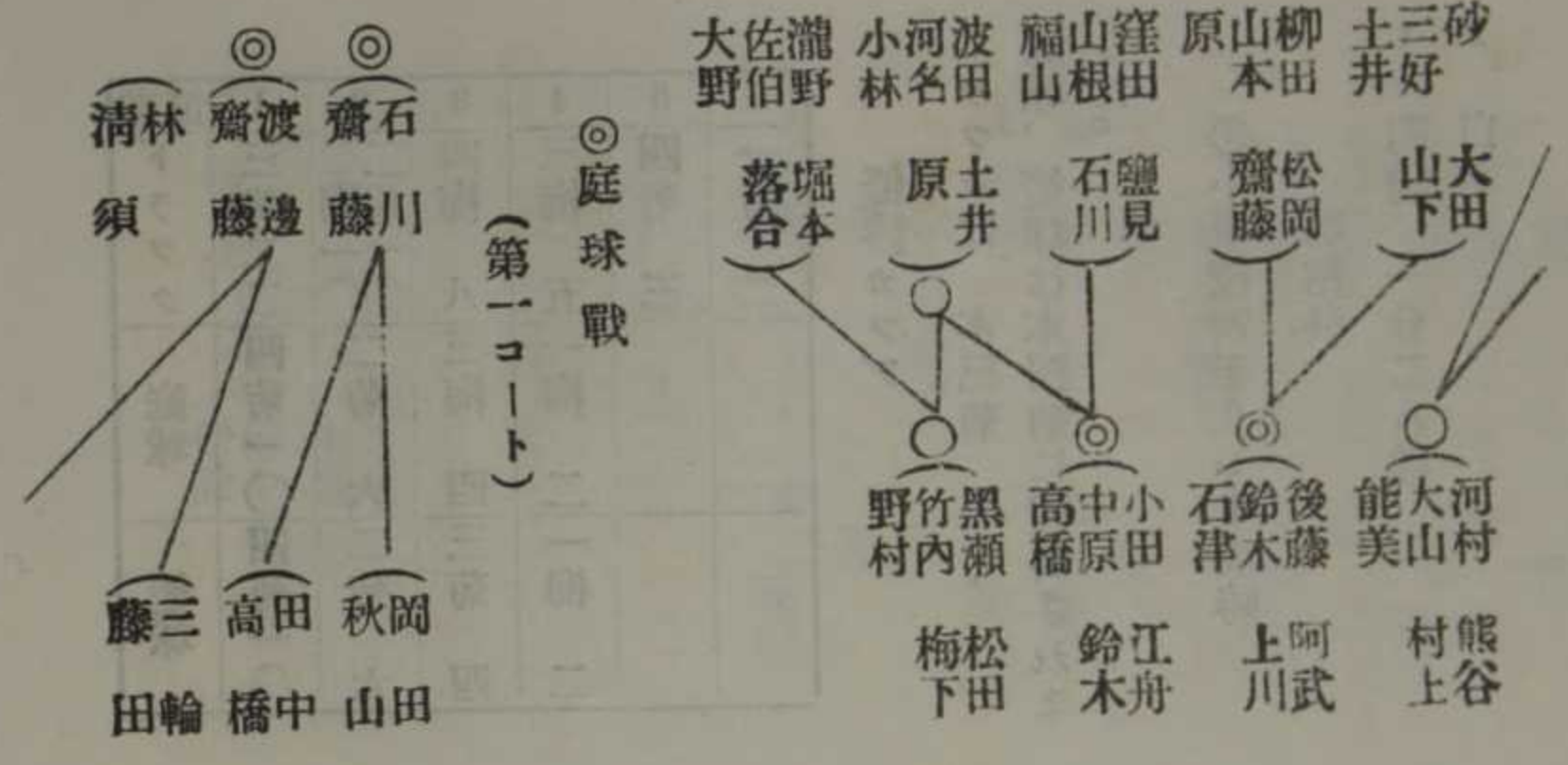
理事 ◎中野先生 池上先生  
藤田先生 森脇先生 上田先生  
委員 阿武將子 齋藤貞子 齋藤春子  
松山操 齋藤貞子 椿シズ子  
竹内芳子 内田恭子 村上玉子  
渡邊愛子 石田久子 原貞子  
山本照 安出百合子 長谷富美  
鈴木壽美子 大谷ハツ 堀上重  
能美ハルコ 橋木房子 最上綾子  
安光親枝 能美ミツヨ 小田文子  
河邊マス子 吉永久子 大田和子 津田幸子

運動部

理事 ◎守田先生 伊藤先生  
赤川先生 田淵先生  
委員 熊谷愛子 木谷美壽子  
堀俊子 秋山千代 岡田カツ  
渡邊キヨコ 伊佐貞子 金子萩野  
阿武ヨシ子 高橋芳子 大谷チエ  
馬來スミエ 山根 秋 安達ヨシ  
市川フミ 江舟二美子 山根勝子  
大田好子 堀尾シツエ 永田貞子  
森永英子 山田モ、ヨ

會報部

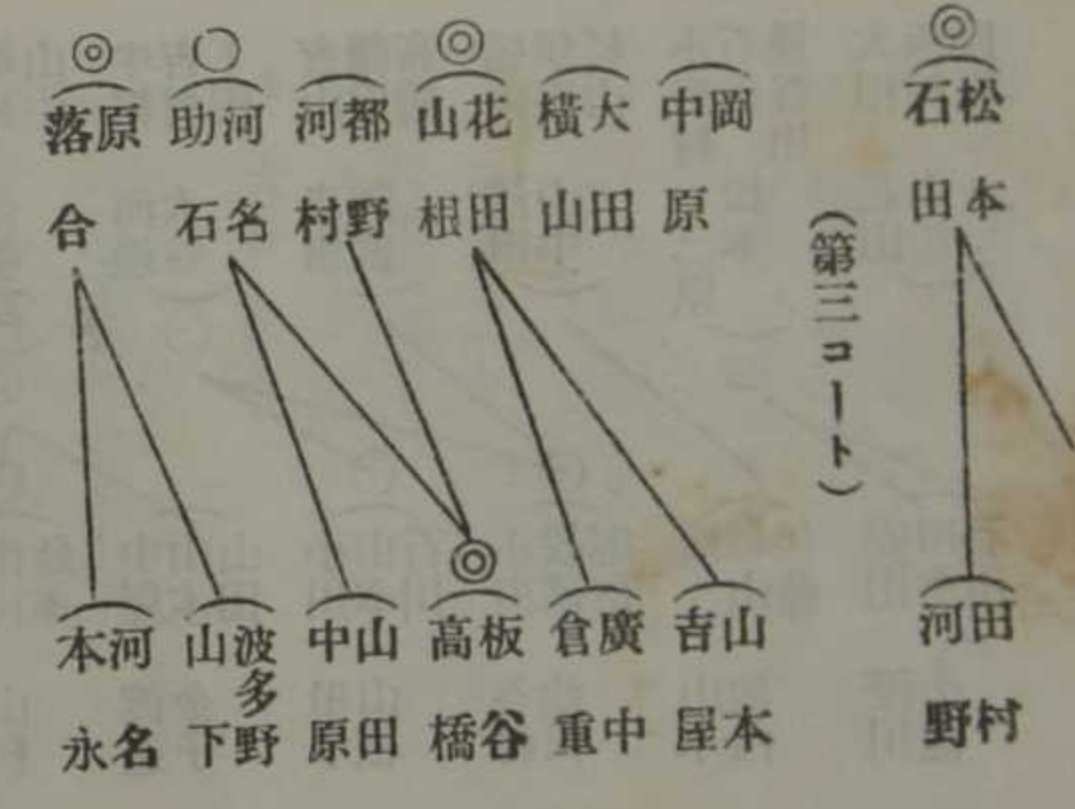
理事 ◎柳原先生 安水先生  
上利先生  
委員 川上富貴子 中村豊子 大岡高子  
ハル子 芳野和子 藤田鶴子  
武田トシ 椿 松子 杉山炭子



◎體育大會記事

山口縣教育會主催

同大會に本校からも選手を送る  
事になりました、申込期日前一週  
間漸く選手を決定して正式に練習





末岡花子 伊藤智子 林 光子  
 進藤ミホ子 廣瀬ミヨ子 梅木  
 セキヨ 岩武正子 山田鷹子  
 伊藤コト 阿武トシコ 茂刈菊代  
 大田キシコ

庶務部

理事 ◎安野先生 齋藤先生

吉田先生

委員 後藤ミヨ子 能美チヨ

岡見行代 河邊時子 柴田静代

林 諒子 河野チエ子 後藤文子

片山政子 吉村 操

會計部

理事 ◎有田先生 北野先生

野田先生

委員 岡 トヨ 岡村ヨシ子

木村藤子 石川貞子 堀ヨシ子

金山作子 鈴木絶子 陽 濱子

伊藤シヅヨ 中屋マサ子

本會文庫記事

本校創立十周年記念事業の一たる南園文庫は、前號報告の通り毎日開館いたします。大部分の閲覧者は本校生徒であります。十月から圖書の貸出しも許され、蔵書も後記の通り大部分御座いますから、卒業生の方の隨時多數の御來觀を希望いたします。勿論圖書の貸出しも致しますから、どうぞ御利用下さい。

書物の選擇については、各受持に於てそれ／＼慎重に調査いたしまして、左記の外に、新聞三種、雜誌十數種も備付けてあります。

備付圖書

哲學 一〇三冊

教育	三九冊
數學	二九冊
文學	二〇四冊
習字	六冊
歷史	一六五冊
地理	四四冊
音樂	九冊
體操	二三冊
英語	二冊
裁縫	二二冊
家事	五三冊
法律	一九冊
理科	四七冊
雜科	一冊

同窓會寄附芳名

金一圓宛 植村マサ 澄川孝子  
 金二圓宛 後藤通子 和田惠美子  
 計金 六圓

通計

367円87銭

前號報告高  
 參百六拾壹圓八拾七錢

計  
 參百六拾七圓八拾七錢  
 (十月末現在)

同窓生の方に

申します

あなた方が御卒業なさる時に、校外會員費として金一圓を御納入なさいましたが、南園會報を購讀されない方に對し、其の利子で毎年「本會記事」を御送りする事になつて居ます。併し何しろ僅な金である上に、萩外の方には二錢の郵税を要しますので、これとまじまつたものを御届けする事が出来ません。私達會報部員も不本意に思つて居ますが、それと別に

仕方も御座いませんので、御約束の通り、小冊紙を御送りして居る次第です。

併し小さくても少さい年らのものつとよいものが出来る筈で御座いますけれども、御満足を得る様な事にならないのを御詫び致します。どうぞ御許下さい。

二年なり三年なり、或は四年ありの學び舎、さすがに年を経る毎に思ひ出を多くされる事だらうに思ひますので出来る事なら、會報を御購讀下さるさいと思ひます。會報は一部實費三十五錢以上の努力を拂つて居ますので、いくらかよいと思ひます。そしてそれがいくらでもあまた方が、學校に對する親みや思ひ出の材料をます事になれば、會報の價値も一層有意義

になると思ひます。

南園會報

會報部





會告

一、發報發送について
會報の發送は委員のものが相當注意してあたつて居ますが、住所の相違や、配達不能、行き違ひ等のために、折角南園會費をおおさめになつた方で會報を御受けにならない方が前回は二十八人も御座いました。今回もその様を方が出來てくるだらうと思ひますから、若し御受取りにあらぬ方は、至急會報部宛て御請求願ひます。
尙前回の殘本はその際保管して御座いますから御受取りにならない方は御請求下さい。
二、名簿について
卷末の名簿は、在校内外の會員からの御通知や、會報部に於て調査したものによつて訂正いたしました。尙不備の點が多からうと思ひます。御氣付の方は、御友達の間でも、御自分の間でも、御通知下さる様御願ひします。

三、會報代について

會報代は前號所報の通り、本校外會費完納の方は三十錢、其他の方は二十五錢といたしました。南園會報は別にお金を要せぬ様に考へられる方も御座いましたが、會報は會報代をおさめられた方の外には配布いたしません。其他の方には本會記事だけを御配布いたすだけです。會報御入用の方は卒業回数記入の上是非會報代御拂込み下さい。
振替加入者 山口縣立萩高等女學校
振替口座 福岡第一一八一四番
四、由縁の園、會員の消息について
今年はいへん澤山の御寄稿者があつて同欄はよく賑ひましたが、別に御頼み状を出さぬくても、ごん／＼御投稿願ひます。本誌に對する御感想も合せて御願ひいたします。

山口縣立萩高等女學校内 南園會々報部

婦人雜誌 碧空

皆様、今年ももう間もなく暮れて行きます。さて、前號の餘白をかつて豫告して置きました通り、婦人雜誌「碧空」は豫定の通り發行を續けて、専ら健實なる讀物を提供して、高雅純正な趣味の涵養に資し、健全實質の精神の鼓吹につとめて居ます。
每號巻頭にて、智名の方々及び萩高女校を始め縣内外女子教育實際家の所説をか、け先月第五號を發行いたしました。新春に當り更に一段の發奮と努力をもつて、内容の改善充實につとめたいので、諸嬢に於かせられても、既に入會された方も多數御座います。此際更に多數の入會者を得たいので、進んで御入會下さる様に希望いたします。

皆さん多數の御援助により、本誌がより以上有意義に、より以上發展する様に祈つて止まらぬのであります。
發行 隔月發行 奇數月 一ケ部 二圓二十錢
代價 山口縣萩町平安古
申込所 山口縣萩町平安古 柳原良助方
振替加入者 山口縣萩町平安古 柳原良助
振替口座 下關 八九六七
あるべく半ケ年六十錢、又は壹ケ年壹圓二十錢前金にて振替口座へ拂込みを願ひます。
編輯同人 中野貞介 守田茂作 安永スエ 柳原良助(女學校) 村上賢一(明倫校) 倉田晋七(樟東校)
第六號(新年號)
一、發行月日 大正十四年一月廿五日
一、原稿切 全一月十日
多數の御投稿を祈ります。



秋の園

体育大會の記

健實なる五百の姉妹に送られて、三台の借切り自動車に飛び乗りしは、秋天高く澄みわたる神無月はじめの三日の午後二時半なりし。...

問ひ合せの電話にて、これ幸と聲高らかに威勢よく、明日も必勝の覚悟告知らば、忽ち起る我留守校の萬歳の聲に、...

秋色漸く濃ならんとするあたり、散らば紅葉の血汐の如くさびし言のいかに清らかなる、選手の意氣を汲めよかし。...

秋は沈黙を守らしめたる程なりし。下るに早き八丁越も、突貫、追撃、の勇ましき戦状に似たりなど、若き血汐に燃ゆる少女も、...

も左に深川校右に宇部校を隣合せしたり。此女學校生徒控室と相對しての東南隅に各中學校及び各郡青年團員の控室の配されたるを見る。...

庭球のみは高商のグラウンドさて、應援すること能はざる惧みはあれど、しきりに傳令するものありて、益々我校選手の腕の冴々しきを知らずさあり、...

扱きて決勝點前二間許りの所にて遂に他を凌ぎて、霧に決勝點に突入せり、あゝ勇まじかりき、雄々しかりき、肉躍りて手舞ひぬ、うれしかりしよ、さてもよく戦ひしよ、常になきその選手の蒼白なりし顔色にて、如何に奮闘せしかを物語りて余りありき。...

運動會の記

暗黒色の雲が、私共の勇氣と元氣をためすかの様に、低くたれ雨さへ加つて、ぼつ／＼と降り出しました。けれども元氣な、五百の生徒のはちまき姿に負けたのか、雲はおろか雨までどこかへ逃げて、

氣持のいい、好天氣になりました。

開會式が終ると、すぐ第一に全生徒の体操があつて、すん／＼競技は進みました。ダンス……を合圖に走り出す五十米競走は、距離があまりないので、見ているのにはらく、致します。リレー選手の寸分の隙もない動作には、感心致しました。...



づれもクラス第一の誇りとして、演じられる級技でその、皆巧みに演じられました。中でも四年と二年の菊組のは、大層な出来栄でした。そして今年は全体で昨年よりも、すつと優つてゐた様に思はれました。今年始めて試みられたバスケットボールは、まだそんなに上手といふのでは、ありませんけれども、大變な勢で「ホイ、ハイ」のかけ聲は男子も及ばない様な元氣でした。終りに今年と同窓生諸姉の籠玉は、大層好成绩で澤山の希望者がありました。中でもまだ本當に女學生氣分の、今年の卒業生のお姉様方は、活潑にすぐ出て下さいましたので、先生方をはじめ繰出保の方々は、皆大喜びでした。(下略) 本三 武田トシ記

### 卒業生送別會記事

三月二十日、親しかりし姉様たちを送り出す名残りに、例年の通り講堂で送別會の餘興が催されました。

校長先生の御注意をきく迄もなく、震災の後をうけて、大に實質の氣風を養はなければならぬ時でしたから、劇的なげばくしたものは一つもありませんで、たゞ真心の表現といふ様な餘興許りで、見て居た私達も非常に氣持ちよく御座いました。プログラムは次の通りで御座います。

- |     |     |     |     |       |       |    |       |       |     |           |     |      |
|-----|-----|-----|-----|-------|-------|----|-------|-------|-----|-----------|-----|------|
| 13  | 12  | 11  | 10  | 9     | 8     | 7  | 6     | 5     | 4   | 3         | 2   | 1    |
| 飛入り | 十五夜 | 別離  | 無題  | 睡蓮の喜び | 星から星へ | 英語 | 牛飼ひ乙女 | 信子の遊寒 | 眞   | 雨だれがツツリさん | 英語  | 開會の辭 |
| 卒業生 | 在校生 | 本一梅 | 本三菊 | 本二菊   | 本二梅   | 實一 | 本三梅   | 本三菊   | 本一梅 | 本一梅       | 本二梅 | 本二梅  |

### 14 閉會の辭

閉會は日没に近くなりました。一同盡きの袂を分つて家路にたどりました。

(實二 委員)

先生



## 會員名簿

大正十三年十一月

- 印：校外會費完納
- +印：補習科修了
- ◎印：本號配布ノ校外會員
- 印：死

亡



特別名譽會員

●兵庫縣武庫郡本山村(逝去)  
同  
同

名譽會員

兵庫縣武庫郡精道村打出  
同 神戸市奥平野  
玖珂郡岩國町  
阿武郡明木村  
玖珂郡柳井町(豊浦郡勝山村)  
●阿武郡萩町(大正八年十月死亡)  
郡農郡徳山町(吉敷郡大内村)  
大阪市東區生玉町六十一番地  
玖珂郡岩國町

特別會員

阿武郡萩町河添(大津郡三隅村)  
同 同 (吉敷郡嘉川村)  
同 同 江向(吉敷郡秋穂二島村)  
同 同 萩町越ヶ濱)

久原文子氏  
久原房之助氏  
久原清子氏

齋藤 幾太郎氏  
田村 市郎氏  
松浦 誠氏  
瀧口 吉良氏  
横口 治氏  
増山 宗史氏  
岡村 勇二氏  
岡村 十郎氏  
林 輔氏

齋藤 彦一  
中野 貞介  
池上 岩太郎  
赤川 正三

舊特別會員

●阿武郡佐々並村(死亡)  
厚狹郡役所

大井村(萩町古萩)  
萩町平安古(大島郡沖家室)  
同 同 土原  
同 同 江向(玖珂郡玖珂村)  
同 同 中津江(大津郡仙崎大日比)  
阿武郡萩町松本  
同 同 川島(吉敷郡吉敷村)  
同 同 (廣島縣比婆郡美古登村)  
同 同 南古萩  
同 同 平安古(阿武郡彌富村)  
同 同 今古萩(熊毛郡勝間村)  
同 同 萩町平安古  
同 同 今古萩(阿武郡吉部村)  
同 同 堀内  
同 同 土原  
同 同 堀内  
阿武郡萩町吳服町  
同 同 江向

伊藤 通利  
柳原 良助  
北野 ヲメ  
森脇 八重子  
上田 テイ  
上田 ヨシ  
安田 スズ  
安田 ヨシ  
野田 ヨシ  
齋藤 ミチ  
安野 章  
守田 茂作  
田淵 武彦  
有田 音彦  
吉田 勝郎  
藤田 直人  
久芳 直周  
上利 政三  
山本 勉彌  
松田 ハル  
三隅 要之助



176  
141  
2/85-17

廣島市國泰寺町(豊田)  
東京市麴町區平河町五ノ一〇(松宮)  
大分縣立高田高等女學校  
未(動靜不明)  
岡山縣井原高等女學校  
福岡縣中學校在職  
阿武郡萩町土原  
同 河添  
同 德佐村  
東京府北豐島郡下練馬村北江古田  
名古屋市私立東海中學校  
阿武郡萩町平安古  
静岡縣立高等女學校(井上)  
神奈川縣小田原高等女學校(沼田)  
橫須賀市公郷二三八二(齋藤)  
都濃郡福川町  
阿武郡萩町河添  
山口縣都濃高等女學校  
吉敷郡喜川村(死亡)  
埼玉縣北埼玉中條村字今井(八木)  
下關市武久園(田村)  
和歌山縣有田郡元坪野  
福井市尾上中町(奈良)

植村秀枝  
細居シヲ  
高田夏哲  
河原直子  
坂口五郎  
山口清次  
中山スエ  
中野二郎  
藤井チエ子  
今井兵吉  
山田新三郎  
竹田三郎  
飯塚マツヨ  
北川恒  
大谷カ  
田中タカヨ  
田村繁  
米原鶴太  
本永旭  
井桁ヨサミ  
進藤ウメ  
三崎シヅメ  
古津起子

門司市  
山口縣立中學校(平安古)  
東京市外高田町雜司ヶ谷金山三三九(藤野)  
佐波郡出雲村  
山口縣立中學校  
●阿武郡萩町江向(死亡)  
同 東田町  
熊毛郡室積町山口縣女子師範學校  
群馬縣桐生中學校  
阿武郡萩町江向  
滋賀縣彦根高等小學校(吉敷郡陶村)  
神戸市千島町三丁目四番地  
廣島市上流川町廣島女學校  
愛知縣西尾町西尾高等女學校  
阿武郡萩町古萩(荒川)  
阿武郡萩町新堀  
山口縣立岩國高等女學校  
玖珂郡岩國町四尺町三七八  
名古屋市中區白壁町二ノ二齋藤本邸内  
大阪市  
吳市、廣島縣立吳高等女學校  
山口縣阿武郡萩町小橋筋

河村多ケヨ  
田總百合之助  
馬淵カネ  
重本マサ子  
中津江延彦  
福島城清彦  
三輪マサ  
堀江ウタコ  
石橋ヨシ  
堀上ヨシ  
西村キヨ  
長澄市衛  
五十崎和  
中村モエ  
伊藤セイ  
中村彌兵  
關田一貫  
河村ハツ  
世良ハツ  
安富教子  
野田素月  
原田梅子

校外會員

實科第一回

(大正二年三月卒業) (年齡順)  
氏名 舊姓 本籍 現住所  
○松野 ムキ 阿萩上原 在下ノ關住所不明  
○松浦 コウ(伊藤) 同 福岡縣大里町柳區北方前  
●+松本 早和 同 東田町 土原新橋(死亡)  
○+梅田 カツ(宮本) 同 南片河 朝鮮京城大和町三ノ一〇  
金田 トキ 大瀬戸崎  
●+大草 政子(山本) 阿萩平安古(死亡)補  
○+山本 幸 同 同濱崎  
○+水木 ナヨ(倉田) 同 同魚店町 山口町上金古曾  
山口 エン(津田) 同 東田町 大坂府下東天下茶屋交翠園  
○+井原 ミツ(竹内) 同 惠美須町 京都府加佐郡志曉坂吉坂鐵道官舎  
○+河崎 スエ(中島) 厚狹郡舟木町字小野  
○高垣 清子 阿萩古萩  
●+田中 冬子 同 橋村(死亡)  
○+伊藤 ミドリ(齋藤) 同 大井村 神戸市熊野町一丁目四一  
山下 歌子、小澤 同 橋村 養老喜教斗六堡東洋製糖會社斗六製糖所

實科第二回

(大正三年三月卒業) (年齡別)  
●+久保田ミサ子 福岡縣小倉市外中津口一五一  
後藤 ハル(田邊) 阿 惠美須町 朝鮮鎮南浦明映町  
○+永井 ミツ(村田) 同 橋東村 東京市外中野町一九二七  
○+佐々木フシコ 同 三見村 朝鮮咸鏡北道明川邑  
○金子 ハツ 同 大井村 京城和泉町滿鐵社宅二四ノ二  
○+長谷川サダ(野上) 同 土原 明木村  
○+倉田 靜子(倉田) 同 西田町 東京府下蒲田町七二五  
水木 ナヨ(倉田) 同 橋東村 山口町金古曾  
○+藤井 キク 同 德佐村 下關市岬之町大崎保太商店  
○+大崎トシユ(平田) 同 船谷町 萩濱崎町  
○+馬庭マヨ(金子) 同 福川村 臺北市大和町二ノ八  
○+松井 ナヨ(河上) 同 橋本 大阪府東成郡住吉村字新開一二七七番地  
津田 桃代(金子) 同 橋東村  
○安澤 マサ(大岩) 阿 萩新堀 朝鮮大邱府上町三  
○時藤 シナ(松村) 同 同江向  
○岡 レン(大崎) 大 三隅村 阿 紫福村  
桂 シヅエ(國司) 阿 橋村 山口町圓政寺



- 十有田 ミサ 阿部 同 吉部村
- 十桑木 マツ(多田)同 椿東村
- 上田 トミ 同 萩河添
- 石津喜典子(中村)同 同東田町
- 十草刈 フシ 同 萩河添
- 上田 信子 同 明木村
- 三浦 君子(神代)同 萩河添
- 玉木 チヨ(大賀)同 塩屋町
- 十三宅 節 美 大橋村
- 十玉木ハツヨ(難波)阿 米屋町
- 十吉田 ナヨ(原)同 萩土原
- 大野 アキ(森重)同 大井村
- 十木原 八霜 伊藤 同 萩堀内
- 島田 壽美 同 椿村(死亡)
- 内藤 千代(堀)同 萩濱崎(補)(死亡)
- 上田 正子 同 椿村沖原(住所不明)
- 高橋 恭(小野)同 奈古村(死亡)
- 十難家キシヨ(長見)同 鹽屋町 在大阪
- 十桂 ユキ(中原)同 椿東村 大阪府下王出町四八〇〇
- 十安達 ハナ 同 同 同
- 岡崎ミヨコ(藤本)同 御許町 香川縣丸龜市風袋町中ノ

- 十原 キク 阿 平安古
- 田中 千代(中原)同 同橋本
- 村田 イシ(今地)同 川上村
- 倉重マサヨ 同 椿東村
- 十小野 キク(松村)同 萩江向
- 十坂本 マカ(岡)同 小川村
- 山縣 於松(伊藤)同 大井村
- 宮本 マカ 同 大井村
- 横地 幸(河野)同 萩江向
- 田邊 カメ(山下)同 椿東村(死亡)
- 河村タミ子 同 熊谷町
- 三宅美智子 同 萩江向
- 澄田 ハツ 同 萩堀内
- 吉本 マシ(神村)同 萩米屋町
- 阿部 スマ 同 同片河
- 岡部マシヨ 同 須佐村
- 十山根 英子 同 萩河添
- 河村 貞子(三好)同 萩西田町
- 藤田 豊子(未成)同 同
- 十三浦 テイ(大中)熊 淺江村 熊毛郡島田村原

實科第三回

(大正四年三月卒業) (年齢別)

- 阿武タケロ 阿 彌富村
- 加藤 雪(粟屋)下關市田中新町一丁目
- 十藤田 愛子(箭島)阿 吉部村 大津郡三隅村
- 島田ツメニ(山本)同 萩濱崎 下關市入江町海岸通り
- 藤村 マツ 同 川上村 東京府入井町出石五五六
- 松岡 花子(松野)同 萩土原 八
- 三浦 ナセ 同 濱崎 神戸市西田町五五五ノ四
- 瀬戸 由子(河北)同 同 同
- 河野ミツ子 同 今古萩(死亡)
- 山口屋シナ(山下)同 山田村 新加坡經由藤田組南興殖産株式會社山口屋彌一方
- 大森 ナヨ 同 濱崎
- 伊藤 ミツ(村上)同 萩東田町 青森縣井陸軍官舎
- 十笹村 喜子(梅)同 椿東村 朝鮮全北鎮南
- 長崎チエ子(三上)同 山田村 東京本郷區水郷五ノ一四
- 玉木 ヨシ(西山)同 萩川島 阿武郡金谷
- 大橋 トメ(國弘)同 同 同 吉敷郡山口町木町
- 十藤 清子(林)同 同平安古 朝鮮大邱八重垣町
- 尾坂喜典子(君谷)同 小川村 小川尋常高等小學校在職
- 野村ツルヨ(田中)同 椿東村字後小畑

- 中村 操(田村)同 椿村
- 十吉田 壽美 同 萩川島
- 植村フミコ(田中)同 椿東村
- 齋藤 マス 同 大井村
- 三好アヤコ 萩枝)同 香川津
- 十厚東 佐世 同 椿東村
- 原 フミ(長井)同 川上村
- 十南方 京 同 椿東村
- 植村サチコ(山本)同 三見村
- 三原 幸子(山中)同 萩橋本
- 福永 フサ(伊藤)同 川上村
- 倉増千代子 同 高俣村(補)(死亡)
- 河田 シズ 同 米川村
- 齋藤 キク 同 阿梅村
- 阿武 カメ 同 椿東村
- 赤司 童子(倉田)同 萩吉田町 福岡市東唐人町五七七
- 井上キミコ(黒瀬)同 萩江向 在朝鮮
- 山下 サト 同 山田村 東京市外千駄ヶ谷八七四
- 吉賀 タリ(三村)同 萩濱崎吉賀幸助方
- 小宮 トヲ(中原)同 同土原
- 長谷 トキ(吉賀)同 同熊谷町

名古屋市熱田白鳥五五



○十藤井 菊代(彌見)同 椿村 神戸市北野町四丁目六七  
 ○津 守フキ(重枝)同 橋本町 豊浦郡牡牛  
 ○中村 スミ(大山)同 椿村 布哇ホノルルホワイトミ  
 ●松原 ツル 同 萩米屋町(死亡)  
 ○久保田 ヨシ(大田)同 同土原 下關市丸山町一九六九ノ  
 村木 秀子 同 同堀内 美、於福小學校在職  
 ○十能美滿壽子 同 同堀内 福岡縣若松市堺町四丁目  
 ○馬屋原孝子 同 椿東村  
 ○内藤ヨシコ 同 萩町江向  
 ○十佐藤 シヅ(金子)同 同平安古 住所不明  
 ○藤井 テル(村田)同 同江向 美福郡赤郷村  
 ○十宮原 千世(河野)同 同土原 阿、萩濱崎新町  
 ○小笠原嘉子(三好)同 同米屋町 新旅順松村町二二  
 ○能美 ヨシ(片山)同 椿東村 奈古尋常高等小學校在職  
 ○十井上 ヲヨ 同 福川村  
 長嶺 芳子 同 徳佐村 阿、小川村  
 ○小河ハナエ(岩竹)同 萩江向 愛知縣安城町稻荷一九ノ  
 ○十白井 ハナ(平木)同 椿村 二〇  
 ●三浦 ヨシ 阿 萩江向(死亡)  
 ○金子 トミ 同 椿東村  
 ○岩崎 サダ(三浦)同 萩江向  
 ○岡野 千代(長谷)同 同津守町 臺北市七奎府町二ノ廿四

○田原千代子(石井)同 同田町 兵庫縣須磨大手町下庄條  
 ○伊藤 喜代(古橋)同 同川島 一三ノ二五  
 野村 フシ 同 同米屋町 東京市本郷區駒込動坂町  
 ○十金子 清 同 宇田郷村 一〇六  
 ●榎原マサミ 阿 萩堀内(補)大正七年三月六日死亡  
 ○堀水フクコ 同 同東田村  
 ○松岡シヅコ 同 椿東村 下關本町三丁目星野トキ  
 ○十淺野ミサヲ(伊藤)同 萩江向 東京府下上落合四九七  
 ○阿武 クリ(寺田)同 椿東村 阿、萩町橋本  
 ○松崎 ナヲ(阿部)同 萩古萩 朝鮮全羅北道全州八達町  
 ○松屋 チヨ 同 萩東田町 阿、萩町濱崎  
 ○岡村シゲコ 同 同平安古  
 ○十山本 松江 同 同江向 大阪府東成郡古市村南島  
 ○十三上 文子(松井)同 同川島 京城永樂町二ノ三一  
 ○十藤原 キク(三村)同 椿東村  
 ●原 ハル(溝部)同 同(死亡)  
 ○小野フヨコ 同 奈古村 豊浦郡 尋常小學校在職  
 ●藤井 政(大賀)同 萩江向(死亡)  
 ○小林 春(竹重)同 同 神戸市兵庫区三石通一丁  
 目七七番地小林直五郎内  
 ○黒瀬 ヒサ(宮原)同 山田村 明木村  
 ○十佐村 ヨシ(安田)同 福川村

○十米原ハツメ 熊本市外黒髮村、都濃郡徳山町  
 ○十鈴木 壽子 阿 萩西田町  
 ○村岡ミドリ(堀江)同 同江向 萩町南古萩  
 光田 コト 同 同熊谷町  
 ○植松 須惠(村田)同 同江向 朝鮮咸鏡北道境城西門外  
 ○林 保子(渡邊)同 同平安古 山口町八幡馬場  
 ○吉田 トキ(遠藤)同 同古萩 山口町下堅小路原田裏  
 ○十國重 静子 同 椿東村 神奈川縣鶴見三角二一〇  
 ○十佐伯千代子 同 福川村 大阪市東區南久太郎町四  
 ○松井 豊子(河村)阿 萩橋本 丁目  
 ○米澤 秀子(和出)佐 助府町 大阪市南區天王寺石瓦一  
 四九一ノ二ヶ辻町五三三  
 ○十山川 文子(阿武)阿 福川村 四石原方  
 萩町大字椿東

實科第四回

(大正五年三月卒業) (年齢別)  
 ○吉武 静 佐 中ノ國村 横濱市外保土ヶ谷町一  
 ○富塚 タネ(大田)阿 萩津守町 六日本籍株式會社  
 ○堀水 タリ(増野)同 同濱崎 朝鮮咸鏡南道咸興車陽里  
 ○堀部 ヒサ(原田)同 山田村 基隆暗船頭街一九七ノ二  
 ○見玉 豊子(山根)同 喜年村 福岡縣若松市山手通七丁  
 目百五十九番地  
 東京市外上目黒駒場九ノ六

○高木 梅代 同 萩濱崎  
 ●藤原 久枝 同 椿東村(補)死亡  
 ●山根マコ(柳井)同 萩平安古(死亡)  
 北村 龜子(井本)同 須佐村 福川  
 ●伊藤 光子(北村)同 萩江向(死亡)  
 ○前田トミコ 同 地福村  
 ○江原キク(能美)同 椿唐輪町  
 ●佐伯 霜野(世良)同 椿村濁淵  
 ●津原ミヨ(浮里)同 三見村(大正九年死亡)  
 ○鈴木 菊枝(猪口)兵庫縣三原 岐阜縣東郡那郡中津高等  
 女學校在職  
 ○堀 富美(工藤)阿 南古萩 東京府下大崎町桐ヶ谷一  
 三四  
 ○十中隈 千代 島根縣濱田 朝鮮  
 ○水岡フサコ(佐々木)阿 生雲村  
 白井アキコ(吉田)同 山田村倉江  
 長谷川トシコ 同 養生村  
 ○横山 ツル 同 萩河添  
 ●野村 マツ 同 椿東村(死亡)  
 ○井町 スミ 同 三見村 三見尋常高等小學校在職  
 ○江山タキコ 同 椿村雜式町  
 ○岡本 秀子(田原)同 山田村 朝鮮慶尚北道迎日郡東海  
 面ミツク浦頂農場  
 萩九間町岡本直介内  
 支那吉林省城內富寧道紙  
 柏村 ヨシ(中村)同 萩川島



●秋山 ヤク(齋藤)同 同御許町(死亡)  
 ○○澄川 トヲ(桂木)同 小川村  
 +阿武 ミト(河村)同 椿東村 大連石見町六號地  
 ○○藤本 豐子(岩田)原狹郡宇部市堀返區  
 ○○齋藤 喜美(伊佐)阿 萩橋本 朝鮮黃海道鳳山郡沙里院 朝鮮鐵道社宅  
 ○十原川 壽子 同 同土原 阿、大島尋常高等小學校  
 ○黒瀬ヒテ(久保田)同 椿東村 愛知縣丹羽郡犬山町  
 ○+長見マサコ 同 福賀村 東京府下流橋町柏木一〇 四國方  
 ○下間 靜子 同 萩吉田町 三千坊  
 ○高橋ヨシコ 同 山田村玉江浦 大阪  
 ○○+藤原フツノ(藤原)佐 防府町 佐波郡堀小學校  
 ○井上 ふみ 阿 萩江向 住所不明  
 ○+藤井 文子(竹内)佐 島地村 東京市下谷區谷中上三崎 南町七一  
 ○+野上壽惠(長谷川)阿 萩土原 住所不明  
 ○石光 茂子 同 萩下五間町  
 堀 綾子 同 同上五間町  
 ○○吉村 キク 同 椿東村中ノ倉  
 ○○内山 ノブ(中村)同 萩川島 臺北久壽街二一  
 ○瀧田 高子(安田)同 萩河添 下關市阿彌陀寺町  
 ○齋藤ヤス子 同 椿村大谷 大阪市北區壺屋町二ノ一 四水谷内

○末武 滿子 同 椿東村越ヶ濱  
 ○玉井 芳子 同 萩江向 朝鮮慶尙南道南旨米穀大 豆検査出張所玉井敏助方  
 ●伊藤 君代(堀)同 萩河添(死亡) 神戸市再度筋二二ノ一八  
 ○大草チヨコ(山本)同 萩平安古 京都市木屋町御池  
 ○藤山ユクセ 同 紫福村  
 ○+難波アキコ 同 萩米屋町  
 ○國司 八重 同 椿東村鶴江  
 ○宗樂シゲ子 同 萩橋本  
 ○坂口タカコ(高橋)同 同江向  
 ○領家 マス(村上)同 同東田町 安東縣一番通五小橋正一 方  
 植村 雪子 阿 椿東村 大連山手町滿鐵社宅九ノ 五ノ九  
 ●阿武ミユキ 同 同(死亡) 朝鮮京城朝日町二丁目三 番地兼近實造方  
 ○+石川 文子 同 同 福岡市柳原町三ノ七五五 松本  
 ○水津フミ子(村木)同 同 香川縣高松市西濱五ノ一  
 ○谷井 雪子(横)同 萩江向 千葉縣銚子町津田善五郎 方  
 ○花村 秀子 同 萩堀内 大分縣速見郡日出町日出 高等女學校  
 ○+岡本 ミチ 同 萩吉田町 青森縣大湊村字字田三番 地  
 ○堀 壽子 阿 萩河添  
 ○原 末 同 同平安古  
 ○○+山下 マス(山下)同 山田村

實科第五回

(大正六年三月卒業) (年齢順)

○柴田タケヨ(吉岡)同 高俊村 山口八軒屋  
 石井 壽萬 同 萩土原 東京赤坂新坂町千葉菊一 方  
 ○白根 光子 同 萩濱崎  
 ○上田 ツル 同 同御許町(死亡)  
 ○○久保 春枝(阿武)同 同濱崎 阿、東田町  
 (今地 マツ 同上村  
 ○+吉田ヨシコ 同 萩濱崎  
 ●吉光野俊子(中原)同 同橋本(補)(死亡)  
 未○小笠原マス 同 同堀内 (住所不明)  
 ●藤村 文子(野村)同 同御許町(死亡) 門司市宗利町一丁目  
 ○松本 アサ(後藤)同 今古萩  
 ○渡邊 八百 同 萩江向  
 ○山中 照子 同 同橋本  
 ●永田 操(植村)同 椿東村(死亡)  
 ○河村 千代 同 萩新堀  
 ○吉永トラコ(重枝)阿 萩橋本 島根縣津和野町下市 方  
 藤井 長子 同 同米屋町  
 ○廣瀬 照子(齋藤)同 同濱崎

○志道 百重(宮原)美 赤郷村 岡山縣倉敷町濱田町社宅  
 茂住 マミ 阿 萩平安古 (住所不明)  
 ●三島 コウ 同 三見村(死亡)十年十一月四日  
 十都築ユキコ 同 生雲村  
 小林 トキ 同 奈古村  
 ○後藤 フミ 同 御許町  
 ○中村 キク 同 萩唐樋  
 ○倉富 イチ 都 鹿野村  
 ○福根フサコ(富士見)玖岩園町  
 ○神田 雪江(伊藤)阿 大井村  
 ○伊藤 芳子 同 同  
 ○伊藤 ヨシ 同 椿村 小畑、奥島越  
 神代 政子(村上)同 萩土原 萩町八丁筋七九五  
 ○○萩原千代子(河村)同 三見村 須佐町  
 ○大谷 壽(松尾)同 椿東村 島根縣美濃郡吉田村  
 ○片山 キク(小河)阿 小川村 生雲尋常高等小學校在職  
 ○+藤貫 ツル 同 出雲村 山口町飯田町宮村竹藏様 方  
 伊藤トミコ 同 椿東村  
 ○○榎木 アサ 大 三隅村 大坂市市外天王寺大字天 王寺丸山山崎秀輔方  
 山崎 ササ(河井)阿 萩川島 神戸市  
 ○○伊藤 睦子 同 大井村



厚東 英、福原(同) 椿東村 奉天奉天銀行派出所  
 ○飯田 静江(岸)同 椿村 千葉市北道場九一〇  
 ○長井 トシ 同 川上村 萩町土原  
 ○十原田ハルコ(石川)大 日置村古市  
 ○師井 アイ 阿 萩熊谷町  
 ○十岡田八重子(松本)同 同江向 東京市赤坂區一ツ木町四  
 ○玉井 ヨシ(厚東)同 山田村奥玉江 横須賀  
 ○田村 真子(近藤)同 椿東村 朝鮮新義州守備隊官舎内  
 ○河崎 好子(竹内)同 古萩 神戸市川西通二三四  
 +倉増 太代 同 高俣村  
 ○池田 京子 同 萩熊谷町(補)(死亡)  
 ○岸森 京 同 同江向 神戸菅原通  
 ○藤本 芳江 同 同御許町 朝鮮咸北鏡城西門外  
 ○金子喜代子 阿 萩川島 福岡縣直方町山部  
 ○篠田 アヤ(武田)同 山田村 門司東本町二丁目海事商  
 ○河村 信子 同 江向 兵庫縣明石市鷹野町堀端  
 ○十田上ヨシ子 同 椿東村 西入古川榮吉方  
 ○藤井キヨコ(田中)同 椿村 豊浦郡宇賀村市  
 ○小柳サヨ子(並川)同 萩河添 臺北西門外街一丁目一六  
 ○吉田 フミ(厚東)同 椿東村 下關市宮田町四一八  
 ●中島ヨシコ 同 萩土原(死亡)

○大谷チヨコ(武林)阿 萩平安古 山口町金古會  
 ○+松本 静子 同 萩東田町 萩土原新橋  
 ○松尾 キク(中原)同 椿東村 神戸市野崎通三丁目二九  
 +宮川 ツル 同 萩濱崎  
 ○西山キクヨ(田中)同 椿東村 大阪府三島郡水玉地ビ  
 ○+齋藤 ミツ 同 萩南古萩 阿 萩高等女學校在職  
 ○井上 三枝(藤井)同 同江向 神戸市夢ノ町三ノ一七  
 ●田中 静子 同 椿町(補)(死亡)  
 長屋チヨノ 同 山田村木間  
 ○+柴田 キク 同 萩江向  
 ○+中原 則子 同 福川村 神戸市平野矢部町三五  
 ○+松本喜久子 同 萩古萩  
 ○+渡邊 喜子 同 同江向 山田村白水小學校在職  
 ○+久保アヤ子 同 同江向 山田村奥玉江(死亡)  
 ●杉村 サチ 阿 山田村奥玉江(死亡)  
 ○+小島マツ子 同 椿東村 椿東小學校在職  
 ○+増野 エリ(土田)島根縣益田町 大阪市西野田  
 ●松谷 ウメ(松浦)阿 萩橋本  
 ○+吉田 貞子 同 椿東村  
 +齋藤 雪枝 同 萩新堀 (住所不明)  
 ○長田千代子(杉浦)玖 岩國郡吉敷郡小郡町上山手

實科第六回

(大正七年三月卒業) (年齢順)

○桂 竹子 阿 萩土原 東京市日本橋區本石町四  
 ○松本 サキ(神野)同 同江向 朝鮮論山郡馬九坪  
 ○+奥 幾子(山根)厚 小野田 大連市越後町二〇號地三  
 ○+白井 ナカ 阿 椿村 白水小學校在職  
 ○+末岡ハルコ 美 於福村 島根縣鹿足郡日原村村上  
 ○渡邊 ヨシ 阿 椿村濁淵 一十郎内  
 ○+吉屋 ハル 同 萩油屋町 東京府下上流谷六ノ七長  
 ○辻野ハナコ(渡部)同 椿東村 横須賀市不入斗六三三  
 ○藤村 峰子(多田)同 同 神戸市中山手通七丁目二  
 ○草刈 政子 同 萩河添 十ノ六五  
 ○+小野 サキ 同 椿村青海 吉敷郡秋穂村山内唯五郎  
 ○山内ハツエ(乃美) 方 東京府下二番地五三  
 ○+肝付 澄江(瀧口) 山田村 佐波郡右田村  
 ○天野 ミツ(田坂) 同 萩上五間町 山口町堅小路  
 ○森脇美智子(黒瀬)阿 山田村  
 ○藤田ハツセ 同 椿村(死亡)  
 ○秋山ウメコ(増山)同 萩上五間町  
 ○+岡山 貞子(新庄)同 同熊谷町江向  
 ○+増山 静子(増山)同 同橋本

三好 シゲ 阿 萩濱崎 岡山縣井原高等女學校在  
 ●栗田 鹿子 同 吉部村(死亡) 職  
 種子 綾(岩武)同 紫福村 高俣村尋常小學校在職  
 岩田フミエ 同 藤生村  
 ○山田マサ子 同 山田村  
 ○佐々木ツチ(竹重)同 吉部村  
 ○小野 静子 同 奈古村  
 ●堀永 ツタ 同 三見村(死亡)  
 ○富田シゲコ 同 萩土原 岡山市門田屋敷九七  
 ○小阿 真子(藤田)同 椿村 萩御弓町  
 ○守重 志都(羽鳥)同 椿東村 廣島市西九軒町  
 ○+平田 スミ 同 椿村  
 ○品川マツコ 同 福賀村  
 ○堀 清子 同 宇田郷村 東京市芝區高輪町南町五  
 ○+桂 静子(田中)同 椿村 四毛利邸内  
 ○藤井 美代(高洲)同 同 門司丸山清水谷藤田保忠  
 ○金子 徳 同 宇田郷村 臺灣新竹川帝國製糖會社  
 宅



◎田中 静(桂)阿 萩川島 東京市外中野西町三六二  
 ○内藤ツルコ 同 同江向  
 ◎今田ナヲコ 同 萩五間町 大阪四天王寺日本赤十字社大阪支那病院看護婦在職  
 ○山中 松子 同 同平安古 大阪北區北野大融寺町七三七長井方  
 ○神田サトセ(服部)同 三見村 東京府下大井町水神下二一〇四  
 ○有吉トミコ 同 萩西田町  
 ○十間屋 千代 同 萩瓦町  
 ○森屋 露子 同 同米屋町  
 ○吉澤 文子(大谷)同 同唐樋 大畷  
 ●中村 貞子 同 同東村(死亡)  
 ○岡 朝子 同 萩濱崎  
 ◎福田 文(林)同 同河添 名古屋西區臺所町二八  
 ○藤田フサコ 同 椿村  
 ●末成 清子 同 萩平安古(補)(死亡)  
 ◎波多野ナツ 同 同新堀 朝鮮京城府松峴洞殖産銀行舎宅二十一號  
 ◎後藤 通子 同 同東村 神奈川縣足柄下郡小田原町十字三丁目六三六坂本方 萩熊谷町島屋方  
 ○島屋 ツチ(河野)同 奈古村  
 ○中村 エイ、小田)同 奈古村  
 ◎十早川 照子 同 萩堀内

●村上 ウメ 同 同東田町(死亡)  
 ○十堀トヨシ子 同 同新堀  
 ●大庭ヨシ子 同 同西田町(死亡)  
 ○横山 朝子(岡本)同 同米屋町 豊橋市札木町八千代製藥株式会社内横山三郎方  
 ◎陶村 園子 同 萩平安古 大阪府下守口町寺内一九五  
 ○松本ヨシコ 同 同新堀 東京市麻布區筆筒町二三  
 ○秋本 綾子(吉崎)熊 室津村 濱崎  
 ○尾崎ヨシコ 西郷)阿 椿東村  
 ○松尾 治子 同 萩江向  
 ○藤田 貞子 同 同福川村 萩土原  
 ○藤田 トミ(池田)同 同東村 萩町大字椿背海  
 ○竹内 艶(杉山)同 同川島 臺灣臺中林外東屋方  
 ○小池ヒサコ(河村)同 同川島  
 ○仲子 菊江(吉賀)同 同濱崎  
 ◎齋藤 千代 同 大井村 越ヶ濱小學校在職  
 ○松村 糸批(吉村)同 萩五間町 小郡町  
 ○岡本 シゲ(藤田)同 椿村 水戸市外常磐村務塚 住所不明  
 ○秋山 操 同 同  
 ●秋本ミツコ 同 同 萩平安古(死亡)  
 ●田總イセコ 同 同吉田町  
 ○十杉 登志惠 同 同

○岡 ッチコ 同 同福川村  
 ○山内 ヒサ 同 同萩土原  
 安井 フユ 同 同川上村  
 村上 スエ 同 同萩  
 ○香川 マサ 同 同土原  
 ○杉山 梅尾、大島)同 同濱崎 門司市谷町一丁目 白水小學校在職  
 ○杉山 愛子 同 同川島  
 ○三輪 芳子(小島)同 同東村沼田ヶ原  
 ○音吉ノブコ 同 同萩濱崎  
 ○町原 シカ(小河)同 同小川村 京都市上京區粟田口島居町  
 ○+末永 梅尾(石川)同 同福川村 慶南區寧郡島末末吃里  
 ◎軒尻 幸代(渡邊)同 同萩江向  
 ●白石 壽子 同 同東田町(死亡)  
 ○笹尾智世子(屬)同 同萩江向 厚狭郡厚狭町厚狭縣錫線工事係詰所笹尾幸一内  
 ◎登藤 文(田所)同 同 大津郡深川村河原 朝鮮咸津本町  
 ○磯村 トミ 同 同河添  
 ○藤川キヨコ 同 同西田町  
 ○末武 愛子 同 同椿東村越ヶ濱  
 ●伊藤 花子 同 同萩江向(死亡)  
 ○佐方 敏子(阿座上)同川上村 阿武郡地福村  
 ●中山 壽子 同 同萩(死亡)

原 千代 同 同  
 伊藤ヒデ千(岡)同 同  
 ○長島 藤之(瀬戸)熊 勝間村 下關伊崎町利慶寺前伊藤廣太郎方 下關市京町二丁目三十九  
 杉戸 ユミ(殺重)美 大田町 (住所不明)  
 ○山縣 ヤス 同 同萩平安古  
 ○伊藤ユキヨ 同 同椿村 豊浦郡長府町金子圭介方  
 ◎金子 貞 同 同宇田郷村 東京本郷區菊坂六五  
 ○遠崎シツ子 同 同萩濱崎 吳市立高等女學校在職  
 平田 春江 同 同小川村  
 十山中 繁 同 同萩濱崎 東京府下長崎村大和田二一四六  
 ○下瀬 ミツ(内藤)同 同川島  
 ○井町ヒサコ 同 同濱崎  
 ○伊藤 ナヨ 同 同川上村  
 ○阿武フミオ 同 同萩川島 阿武郡萩町土原  
 ◎澄川 スミ(池田)同 同須佐村  
 ○後藤 ナフ 同 同萩濱崎  
 ◎横山ヒナ子(三島)同 同三見村 朝鮮江原道洪川郡洪川

實科第七回

(大正八年三月卒業) (年齡順)



○福田 和子(瀧口)都 福川村  
 ○十木村 サタ 阿 蕙美須町  
 ○井原 喜勢(金子)同 椿東村 上海寶山大街七十一號  
 ●松浦キミ子 同 萩濱崎(死亡)  
 ○中村ヤエ子 同 同江向  
 ○笠井 映子 同 椿村 長崎縣崎戸工業所秋山内  
 ○松井須磨子 美 赤郷村  
 ○竹内 マツ 阿 蕙美須町吳市城山町百十四  
 ○中村 花子 同 萩平安古  
 ○永田フシエ(植村)同 椿東村 大津郡深川村下郷  
 ○安田 清子 同 萩河添 阿武郡福川村二保谷  
 ○阿武ヤエ子(山川)同 椿東村  
 ○久保 操 同 萩土原  
 ○佐藤 壽子(井上)同 福川村 臺灣基隆市瑞芳局區内  
 ○今地タミ子(三戸)同 萩江向 阿武郡川上村  
 ○加藤 静江 同 同土原 東京市芝區二本榎西町ノ三  
 ○片岡 綾子(鈴川)吉 東岐波村 神戸市旗塚通一ノ六六  
 ○山田ユヅ子 阿 山田村 東京  
 來島マサヨ(原)同 同 東京  
 ○岡 安子(兼重)同 萩川島 臺灣高雄洲屏東街臺灣製糖社宅  
 ○神代 雪子 同 山田村 東京  
 ○中務 敏子(落合)同 萩吳服町 朝鮮公州本町

○楢村 文子 同 椿東村 朝鮮黃海道海州南本町一  
 ○阿武 竹子 同 椿東村 五二岩田隆一方  
 ○秋枝 イト(阿座上)同 福賀村 朝鮮釜山水昌洞  
 ○市原 安子 同 嘉年村 嘉年尋常高等小學校在職  
 ○原 スミ 同 紫福村 阿武郡篠生村三谷  
 ●大賀 ヒテ 同 萩鹽屋町(死亡)  
 ○三好 ウラ 熊 淺江村  
 ○+横山ヨシ子 阿 川上村 阿 篠目尋常小學校在職  
 ○木原 ヨシ 同 椿東村 阿 明倫小學校在職  
 ○杉山アサ子(久保)同 萩濱崎  
 ○宮原 千代 同 同土原  
 ○田中 マサ 美 共和村  
 ○+林 貞子 阿 萩平安古  
 ○内田 文子(堀)同 萩川島 東京市外上落合六三九  
 ○澄川 千里 阿 小川村  
 ●今地 ヒテ 同 川上村(死亡)  
 ○山崎 貞(和田)大阪府北河内郡住道村和田恭輔方  
 ○阿川 榮子 阿 地福村 東京本郷駒込込坂町一六  
 ○田中 セキ(兒玉)同 椿東村 東京市神田區表猿樂町二  
 厚東 美惠 同 同 四埋忠氏内  
 ●宮本 信子 同 福賀村 萩平安古(死亡)

○岡村 由枝 阿武郡福川村 島根縣鹿足郡津和野町  
 田中 基礎(植村)阿 椿東村 山口町鶴石橋側三八  
 ○西島 カツ(松永)大 向津具村 豐浦郡長府町宇古江小路  
 吉津 ツキ 阿 椿東村 東京市小石川區雜司ヶ谷  
 一六村田内  
 ○竹内 淑子 同 萩平安古  
 ○厚東 磯子(前田)同 山田村 東京府下大井町字山中口  
 三五四  
 ○+三隅田ノマ 同 萩平安古 神戸菊水町七ノ二三小島  
 ○有田 シツ(來島)同 椿村濁淵  
 ○藤田 トヨ 同 椿村  
 ○津田サダ子 同 萩江向  
 ○+山下 キヨ 同 山田村  
 ●+森田ミチ子 同 福川村(死亡)  
 ○岩武 綾子(藤田)同 紫福村  
 ○島田トメ子 同 川上村  
 ○河村 清子 同 椿東村  
 ○+佐田 初枝 美 大嶺村 萩唐橋村田方  
 同 椿東村  
 ○大野美智子 同 萩土原  
 ○倉田喜久代 大阪市 東京市外中森谷六〇三河  
 ○中村 ハナ 阿 萩土原 福岡市樹木屋町海岸  
 ○末益 マス 同 奈古村 吳市城山町中村醫院内

○波多野芳子 同 三見村  
 ○山本 輝子 同 萩吳服町 吳稻荷町十五ノ六山本清  
 方  
 ○田坂 文子 同 萩江向  
 ●漆部ツメ子 同 萩橋本(死亡)  
 ○+田中トシ子 同 椿村 川上小學校在職  
 ○+中井 嘉子 同 萩吉田町 大分市春日町七六〇ノ二  
 ○大田 春代 同 吉部村 下關壇ノ浦中尾崎郡内  
 ○伊佐トミコ 同 萩橋本 佐波郡田雲村  
 ○德田 英子(前田)同 地福村  
 ○+羽仁トミ子 同 萩平安古  
 ○+伊藤 桃代 同 椿東村  
 ○立野彌子 同 田万崎村 愛媛縣宇和郡日吉村  
 ○内藤 静子(大谷)阿 萩濱崎 大阪府東區森ノ宮西ノ町  
 六〇〇  
 ○齋藤ハナコ 同 同  
 ○森 松枝 同 川上村  
 其 他 東京市小石川區久堅町六九  
 ●十五峰ヨシヨ 阿 萩濱崎(死亡)

資料第八回

(大正九年三月卒業) (イロハ順)



石光 波子 同 同  
 飯田 テイ 東京本郷駒込追分三〇番地、札幌市南二條西三丁目  
 ●林 春枝 阿 萩川島(補)(死亡)  
 ○林 静子 同 同平安古  
 原 敏子 同 地福村  
 ●仁尾 玉 高知縣高岡郡(死亡)  
 ○堀江トミコ 阿 萩江向 熊毛郡室積町  
 ○村田 ナミ(堀) 同 同川島 在東京  
 ○堀本 トメ 同 同堀内  
 ○豊田喜代子 同 同河添  
 ○領家 文子 同 宇多郷村  
 ○岡本 照子(大津) 同 萩濱崎  
 ○十六谷 キク 同 椿村濁淵 門司市庄司小學校在職  
 ○渡邊 初子 同 萩濱崎  
 ○加藤シツコ 同 米岸町  
 ○金國テルコ 同 萩水車筋 萩江向  
 ●河野エキコ 同 同濱崎(死亡)  
 ○金子ヨシコ 同 同江向  
 ○中津江三知子(片山) 同 同濱崎  
 ○十横山ミチコ 同 萩河添  
 ○高村ミネコ 同 椿村  
 ●高洲ナヲコ 同 萩土原(死亡)

○若松 キサ(田中) 同 椿東村 萩東田町  
 ○富田 恒子(竹内) 同 萩濱崎 朝鮮京城大平通二丁目  
 村谷 キク(高橋) 同 同唐樋 下關市本町五  
 ○田村マサコ 同 山畝村 豊浦郡川中小學校在職  
 ○田坂アヤ子 都浪郡徳山町才ノ森通六二九七ノ十五田坂借介方  
 坪倉シゲ子 阿 萩石屋町  
 ○佐伯美代子(根來) 美 秋吉村 神戸市湊川町五丁目六ノ  
 ○岡江 澄(中原) 阿 萩江向 朝鮮釜山府富平町三ノ四  
 ○永田 シツ 同 椿東村 五  
 +村田 勝子 同 萩江向 沖繩縣那覇市大門前  
 ○若林 ウメ(井町) 同 同濱崎  
 ○十信常 壽子 同 同平安古  
 ○神原 幸(野村) 同 同同 椿東村雁島  
 ○小田 ナヨ 同 山田村 東京市麻布區三河臺町三  
 十八番地中御門公爵家内  
 官舎  
 ○小澤 ハツ 同 萩平安古 臺南市明治町二ノ一陸軍  
 ○小野 君子 同 田万崎村 在支那  
 ○小野 静子 同 椿村  
 ○山口 朝子 同 篠生村  
 ○十國重 淑子 同 椿東村  
 ○山本イトコ 同 椿東村

◎○矢島サカヘ 同 高俣村  
 ◎○山田 ミツ 同 奈古村  
 山中 照子 同 萩濱崎  
 ○河上 房子(八木) 同 同磯屋町  
 ○松浦マツ子 同 同橋本  
 ○松林 和子 同 椿東村  
 松本 恒子 同 萩  
 ○松浦 クラ 同 奈古村  
 ○佐々木仁子(福島) 同 椿東村  
 ○四尾 末子(古川) 同 田万崎村  
 ○兒玉 章子 同 明木村  
 笹井フサ子(兒玉) 同 萩堀内  
 ○十後藤かつよ 同 同御許町  
 ○小河 ッナ 同 小川村  
 ○稻田美智恵(小島) 同 萩春若町 大阪  
 ○十西村 繁子(小島) 同 椿東村 山口町後河原  
 ○瀧藤千代子 吉 小郡町柳井田 千葉縣千葉郡二宮村  
 ○寺山 豊子 阿 地福村 生雲小學校在職  
 ○十阿武 菊枝 同 川上村 朝鮮平安南道江東郡品湖  
 面石里  
 ○十秋山 佳重 同 萩町 双葉幼稚園  
 阿武 壽子 東京府下荏原郡六幡村八幡塚一四〇八田村内

○佐竹 昌子 美 岩永村 廣島縣廣島市尾長町七六  
 ○佐久間ユキ 阿 嘉年村 東京市本郷區元町二ノ六  
 三明華齒科醫學校  
 ○杉山キヨ子(木村) 同 萩淨國寺 朝鮮全南光州花園町光州  
 寺内  
 ○北野ツネ子 同 同平安古 茨城縣助川縣大雄院十六  
 ○十平嶋 縁(岸) 同 椿村  
 ○豊田 ヨシ(行本) 大坂市西區田中町二九八  
 ○瀨部 元妃 阿 椿東村 生雲小學校在職  
 ○西岡 爲子(光國) 福岡市渡邊通三丁目九水會宅  
 ○三浦 アヤ 阿 萩濱崎  
 ○三月 キヨ 阿 山田村  
 ○宮本マユエ 同 萩片河  
 ○十重岡 キヨ 同 同  
 白井 サタ 同 椿村 東京女子大學在學  
 進藤 秀 同 椿東村 明木小學校在職  
 ○十黒田 愛江(鏡見) 同 同  
 ○未成マメヨ(平田) 阿 柴福村  
 ○宗像 俊子(森永) 美 眞長田村  
 ○澄川 孝子 阿 萩  
 ○須子美登里 同 小川村 朝鮮忠北清洲城西町安井  
 三重縣四日市市濱一色館  
 ○山根 サト(水津) 同 大井村 東京本郷駒込神明町一六



○鈴木ヒサコ 同 山田村 深川高等女學校

實科第九回

(大正十年三月卒業) (五十音順)

- 赤木 ツチ 阿 萩濱町 在下ノ關
- 井本 捷子 同 須佐村本町中ノ町
- 森重 久子(砂) 同 萩堀内 東京市外大久保百人町一
- 十山本 タネ(上田) 同 萩熊谷町 山口町中讃井
- +植村 マサ 同 椿東村
- 上野ユキ子 同 萩平安古
- 江山タマコ 同 地福村
- 小野 時代 同 奈古村
- 小林ヨシコ(大島) 同 萩濱崎町
- 吉光野綾子(河村) 同 同橋本 島根縣津和野
- 河崎 一子 同 同堀内 神戸市再度筋三丁三七三
- 今田 マシ(來島) 朝鮮
- 小峠ヒサコ 同 山田村木間 木間小學校在職
- 齋藤 キミ 同 椿東村
- 島本ヨシコ 同 萩濱崎
- 水津 ヒデ 同 奈古村 在彦島
- 宗樂 ショ 同 萩橋本町

- 田中 君 同 同川島 阿 奈古村
- 田中 俊子 同 椿村 門司丸山清水谷藤田保忠
- 田中 清子 阿 萩片河 阿 萩川島
- 田坂 タリ 同 椿村河内 同 萩江向
- 高木フミコ 同 椿東村松本
- 田口 雪枝 同 椿村
- 河上ヨシ子(田村) 同 椿村河内 臺灣
- 時山 綾子(時山) 同 山田村
- 時山 トシ 同 山田村中渡
- 刀福 フユ 同 萩東田町
- 富川 ヨシ 同 同熊谷町
- 中村ツル子 同 福川村
- 中村フサ子 同 萩濱崎町
- 中村 シ 同 同北古萩 大連市外沙河口五區ノ三
- 野田 喜代 同 萩南古萩 臺北北泉町二ノ一鐵道部
- 波多野トミコ 同 同西田町(死亡) 官舎方七八號
- 長谷川久子 同 同濱崎町
- 弘兼 静子 同 椿東村
- 堀 コト 同 山田村王江中渡 阿 椿東村
- 増山喜久子 同 萩米屋町
- 町田 松子 同 椿村 豊前國長洲町木村方
- 松浦ヒサ子 同 椿東濱崎町 青森縣

實科第十回

(大正十一年三月卒業) (五十音順)

- 三上ヨシ子 同 山田村奥玉江(死亡)
- 德重 葛松尾 同 大井村 阿武郡藤生村渡川
- 御手洗峰子 同 川上村立野(死亡)
- 茂刈 チエ 同 宇田郷村 阿 萩南古萩
- 大和屋静子 同 萩濱崎
- 吉田 シ 同 山田村中渡
- 井上千代子 阿 福川村福井
- +岩崎ムメノ 同 山田村
- 岩崎サヨ子 同 萩東田町
- 植村 親 同 椿東村(死亡)
- 藤田イセコ(岡) 同 福川村福井 阿 椿西
- +岡 千歳 同 紫福村 阿 萩吉田町
- +岡 久代 同 田万崎村
- 大谷 久代 同 三見村
- 河村 綾江 同 椿東村
- 河村 操子 同 萩堀内 大阪市西區新池田町廿八
- 神田志都子 同 萩堀内 ノ廿五
- 河村スミ子 同 椿村
- 桐山ミツエ 同 萩平安古 朝鮮咸北鏡城

- 窪田ヨシ子 大 菱海村河原
- 黒瀬シズ子 阿 萩江向
- 十國重 米子 同 椿東村
- 品川 政子 同 萩熊谷町
- 未成 利子 同 同平安古
- 杉本スエ子 同 同
- 榎屋 菊子 同 同江向
- 田村富貴子 同 下關中之町 都 徳山町二番町藤井内
- 田中 文江 阿 椿東村
- 中村シズコ 同 萩橋本町
- 中津井節子 同 川越村 朝鮮木浦府常盤町二本本
- 中村百合子 阿 椿村
- 野村 キク 同 萩濱崎
- 林 菊香 同 熊 勝間村呼坂 平安古
- 年光 キヨ(長谷) 阿 萩熊谷町 福岡縣戸畑町錫物會社
- 林 房子 同 同平安古
- 廣 トミ子 同 萩濱崎
- 平田タキ子 同 椿村
- 平野 花子 同 萩平安古
- 末武千代子(藤田) 同 椿東村越ヶ濱
- +藤田トシコ 同 椿村



◎藤原 静子 同 同 神戸市船引町一丁目五九  
田上郷吉方

◎堀 幹子 同 梶東村

◎松本 ヒナ 同 三見村

◎松浦 八重 同 山田村

◎松本 秋子 同 東田町

◎松水 歌子 大 向津具村

◎村木カヅコ 阿 萩濱崎町

◎村木 勝子 同 同堀内

◎村田トメ子 同 同東田町

◎+安田 貞子 同 同河添

◎山根 ナセ 同 椿村

◎吉田ミホ子 大 三隅村

◎吉賀 キヨ 阿 萩土原

◎吉武 フジ 同 同唐樋町

◎渡邊 カツ 同 同細工町

◎若松 静子 同 同東田町

朝鮮釜山本町一小宮修一  
方

### 實科第十二回

(大正十二年三月卒業) (五十音順)

◎阿武 幹子 阿 椿東村

◎石光 明子 同 萩五間町

◎石井喜美子 同 同東田町

◎中本 静子(石川)同 椿村 朝鮮仁川濱町七ノ二

◎井上 幸江 岡山縣上高梁町下町 阿 萩平安古

◎井上 芳子 厚 小野村 阿 萩東田町

◎大石 ツヤ 阿 佐々並村 大正十二年九月一日死亡

◎岡本 初江 阿 萩濱崎

◎小方ヨシコ 同 同小橋筋

◎鹿島フジコ 美 共和村 阿 萩町山田字青長谷

◎増野フシコ(金子)阿 萩五間町 阿 萩濱崎

◎柁山 操子 同 同川島

◎岸 ステ 同 椿村

◎國吉喜代子 同 萩町

◎久保 正子 大 菱海村

◎小島 秀子 阿 椿東村

◎里川美智子 同 奈古村

◎坂本 勝子 同 明木村

◎下井志都子 美 大田町

◎杉山キクエ 阿 萩米屋町 神戸

◎安田 芳子 同 同御許町

◎田中 壽子 同 同濱崎

◎田中 フミ 同 椿東村 東京

地福小學校在職

名古屋市東區白壁町齋藤  
本邸内

◎坪井 多津 同 山田村

◎都野美代子 同 萩江向

◎時山マサコ 同 山田村

◎永安シズエ 同 奈古村

◎中原ハナコ 同 福賀村

◎藤本ヒサ子(中谷)同 萩熊谷町 朝鮮

◎西田 稔子 同 萩川島

◎長谷川菊代 同 萩濱崎

◎波多野シズ子 同 同

◎林 壽子 同 同

◎廣瀬 ツル 同 同

◎藤山マスコ 同 同川島

◎藤本 峰子 同 同米屋町

◎堀野富美子 同 須佐村

◎松浦ツギコ 同 大井村

◎松本登美惠 同 萩米屋町

◎松屋ヨシ子 阿 萩濱崎

◎宮川ヒデ子 同 同橋本町

◎三浦ミツ子 同 萩町

◎森重ハツ子 同 大井村

大阪府三島郡千里村千里  
山十九號尾園秀次内  
双葉幼稚園  
阿 萩濱崎  
平安古  
長崎市伊賀林町石川近之  
進方  
阿 萩五間町三上方

### 實科第十三回

(大正十三年三月卒業) (五十音順)

◎阿武フデ子 阿 水間

◎有吉 榮子 同 萩町東田町

◎有吉喜代子 同 同椿村

◎有田イシコ 同 同江向

◎阿川イチ子 同 同濱崎

◎東屋ヨシコ 同 同下五間町

◎池内登美子 同 同堀内 東京女子高等職業學校

◎植村キクヨ 同 同三見

◎岡 公子 同 紫福村

◎金子智恵子 同 宇田郷村 濱崎

◎河野タマコ 同 萩町椿村

◎河崎ユキ子 同 同堀内

◎河村ミヅ子 同 同越ヶ濱

◎佐伯フサ子 同 同福川村 修善女學校

◎久繼 美子(佐古)同 萩町河添 濱崎

阿 萩町  
大井村  
福賀村 廣島女子齒科醫學學校在學  
萩北古萩



○島本 ナヨ 同 濱崎  
 ○關屋 キヨコ 同 五町  
 ○田村 キタ 同 榑村  
 ○田村 ハナコ 同 河添  
 ○田村 芳子 美 大田町 山口野田女學校  
 ○田村 フミヨ 大 菱海村 阿 萩町越ヶ濱  
 ○友永 ヒナコ 美 大田町  
 ○内藤 敏子 阿 福川村 阿 萩玉江  
 ○中原 シズヨ 同 福川村 山口野田女學校  
 ○中本 初代 同 田万崎村  
 ○中村 キサ 同 大井村  
 ○西山 アキ子 同 萩町川島  
 ○原田 テル 同 江向  
 ○林 フヂ子 同 川島  
 ○林 アキ子 同 下五間町  
 ○波多野 フミ 同 三見村  
 ○福永 ミツ 同 堀内  
 ○福住 ミチコ 大 菱海村  
 ○藤田 ミサコ 阿 萩町土原 福岡縣  
 ○堀本 トキ子 同 堀内  
 ○松浦 タケ子 同 橋本町  
 ○松浦 ムメ 同 奈古村 阿 萩町越ヶ濱

本科第一回

○三輪 和子 同 榑町榑東  
 ○平岡 ハルヒ(池田)阿 萩土原 大阪府下東成郡古市村字南島百六十五  
 ○荒地 久子(石川)同 榑村沖原  
 ○板垣 龍子 同 榑東田町  
 ○宇多田 静子 同 榑東村 白水小學校在職  
 ○大山 千代子 同 榑村  
 ○小田 ユツ子 同 奈古村  
 ○三井 ナヨ(小野村)同 山田村 萩新川  
 ○竹村 キキ子(岡本)同 萩春若町 慶南全海郡進水面竹村醫院  
 ○大深 基 同 奈古村 釜山府草梁三五七小川百助内  
 ○大本 カヅノ 同 佐賀村 熊 佐賀小學校在職  
 ○桂 壽子 阿 萩松本 東光寺内  
 ○賀屋 ヒデ子 阿 萩土原 三見小學校  
 ○笠原 キク(河村)同 萩土原 福岡縣若松市仲割  
 ○國重 タツ子 同 同東田町  
 ○有馬 淑子(瀧弘)同 同川島 支那上海寶靈安路松堂里八號  
 ○柴田 シゲヨ 同 嘉年村 朝鮮京城大和町政務總監官邸

○倉重 フミヨ 同 榑東村  
 ○小池 キヨコ 同 生雲村(死亡)  
 ○小嶋 貞子 同 榑東村(死亡)  
 ○小枝 千代子 同 萩濱崎町  
 ○佐伯 清子 同 福川村  
 ○坂本 シツコ 同 明木村  
 ○佐久間 ユキ 同 嘉年村 東京市本郷區元市二ノ六三明華齒科醫學校  
 ○關山 ミサ子 大 向津具村 阿 萩明倫小學校在職  
 ○瀧川 愛子 阿 生雲村 同 萩明倫小學校在職  
 ○谷川 トラコ 同 三見村 同 三見小學校在職  
 ○榑 マスコ 同 佐々並村 大 三隅村  
 ○坪野 ノブコ 同 萩濱崎 阿 佐々並小學校在職  
 ○中村 サカエ 同 萩江向 阿 佐々並小學校在職  
 ○中村 テルコ 同 同八丁 同 明倫小學校在職  
 ○阿武 ツチコ(能美)同 川上村  
 ○原 ユキコ 同 萩御許町  
 ○原 光子 美 共和村  
 ○村岡 ミツ子(藤村)阿 萩熊谷町 下關入江町二村岡三九郎方  
 ○+藤山 於見子 同 萩川島  
 ○守水 フミ子(堀)同 同 阿 萩濱崎  
 ○有富 ミサ子(松浦)同 山田村 福岡縣川島

本科第二回

○+濱部 勝子 同 萩河添 同 明倫小學校在職  
 ○三原 アサヲ 同 島 萩川郡西濱崎 大三隅村  
 ○+近藤 マツ(三好)阿 同 山口重岩  
 ○榑木 里 大 三隅村  
 ○守永 節子 阿 生雲村  
 ○山本 キク 同 山田村 大阪市北區上福島北三丁目馬場旭地方  
 ○山根 静子 同 大井村(死亡)  
 ○吉村 キヨ 同 榑村 東京女子大學在學  
 ○白井 サダ 同 同  
 ○有吉 ノブ子 同 萩西田町  
 ○岡村 マス(有吉)同 同北古萩  
 ○阿武 菊子 阿 萩橋本町 神戸幼稚園  
 ○+阿武 實子 同 福川村  
 ○+石津 可子 同 萩町  
 ○+板谷 敏子 同 山田村 萩町立木岡小學校在職  
 ○字佐川 節子 同 萩堀内 阿 白水小學校在職  
 ○+高田 花子(小田)同 同藤谷町 下關驛前  
 ○+高田 克子 同 吉部村 吉部小學校在職

(大正十一年三月卒業) (五十音順)



○大田 キク 同 椿東村  
 ○大藤 アイ 大 向津且村川尻 阿 萩江向  
 ○金子シズコ 阿 椿東村堀江  
 ○兼重 龜子 同 萩町十日市筋 紫福小學校在職  
 ○河村千代子 同 同西田町  
 ○河村テルコ 同 明木村  
 ○木村 壽子 同 萩北古萩  
 ○口羽 龜子 同 篠生村  
 ○久保田チヨ 同 椿東村  
 ○久保田花子 同 同  
 ○兒玉 貞 同 田万崎村  
 ○吉原 ロナ(笹井)熊 同 熊 室積町北町  
 ○佐々木民子 大 三隅村 奈良市西笹井町河野鶴吉  
 ○齊藤 貞子(齊藤)同 阿 南古萩  
 ○齊藤 愛 同 阿 田万崎村 大阪市外天王寺公園御殿  
 ○末岡 眞子 同 紫福村 宮川内  
 ○能美フサ子(鈴木)同 同 山田村 川上村佐古  
 ○鈴木ヒナ子 同 須佐村 山口高等女學校高等科  
 ○末若ヨシコ 同 奈古村 東京麻布區霞町六  
 ○金子 静江(瀧口)同 同 明木村 萩唐樋  
 ○能美 能生(永田)同 同 大井村

○中原 春江 同 椿東村 朝鮮成鏡北道城津旭町  
 ○中村 静子 同 同 朝鮮  
 ○中村八千代(中村)同 同 萩江向 小倉市外三郎丸陸軍官舎  
 ○野上ヨシコ 同 椿東村 第十七號  
 ○蓮池八重子 同 福賀村 高俣  
 ○服部 貞子 同 萩町 阿 椿東小學校在職  
 ○平田チエ子 同 同江向  
 ○福富 朝子 同 同堀内 福岡八幡  
 ○松浦 コツ 同 奈古村 大阪  
 ○松田己知子 同 椿東村  
 ○前田ユキ子 同 同  
 ○安藤ヒサ子(三隅)同 同 萩下五間町 雜賀下  
 ○堀 ヨシコ(棟木)神奈川縣橋本郡川崎村久根崎四三八  
 ○村上 コト 同 萩東田町  
 ○矢島ミサヲ 同 高俣村 山口町霞井  
 ○山縣 カツ 同 同 山口高等女學校高等科  
 ○大和 直子 同 福川村 阿 萩椿東小學校在職  
 ○吉賀 ヒナ 同 萩濱崎  
 ○吉田シツコ 同 同平安古  
 ○吉村 ナス 同 同熊谷町

本科第三回

(大正十二年三月卒業) (五十音順)  
 ○秋山 京子 阿 萩南古萩 女子共立職業學校  
 ○安藤 クリ 同 椿東村  
 ○阿武 米子 同 萩川島  
 ○池上 キク 吉 萩二島村 椿西小學校在職  
 ○山根 フサ(石井)阿 同 椿東村 香川津  
 ○石川 ツル 同 萩濱崎  
 ○石津 存子 同 同河添  
 ○伊藤 菊子 同 大井村  
 ○井上ミツコ 同 萩河添 京城西小門町九八京城女子技藝學校内  
 ○小川ミツ子 同 宇田郷村  
 ○小野 フサ 同 奈古村 門司市丸山町三丁目  
 ○河内山穂子 同 萩堀内  
 ○柏木 晴子 同 同東田町  
 ○片山壽満子 同 椿東村  
 ○兼田マツコ 同 萩南片河  
 ○北野フシコ 同 同平安古  
 ○水原 花子 同 同川島 阿 明倫小學校在職  
 ○桑原 小春 同 鹿足郡津和野町 阿 萩平安古  
 ○桑原 サキ 同 萩平安古  
 ○桑原 節子 同 田万崎村 室積女子師範學校  
 ○小茅 マキ 同 萩濱崎 朝鮮

○新庄 信子 同 同新堀 三田尻毛利公爵邸  
 ○鈴木美代子 同 椿東村  
 ○助石アサ子 同 萩平安古  
 ○關田 テル 同 埼玉縣秩父郡影森村  
 ○田坂 孝子 阿 萩江向 室積女子師範學校  
 ○中村 ユキ 同 同平安古  
 ○中村 静子 同 同  
 ○中村 春子 同 椿村  
 ○中村 君代 阿 萩御許町  
 ○中原 豊子 同 堀川村 生雲  
 ○長嶺 光子 同 萩西田町  
 ○永安 静枝 同 椿東村  
 ○野村 静子 同 萩下五間町 朝鮮  
 ○羽仁 素子 同 山田村(在補) 平安古熊野方  
 ○林 アサ 同 萩江向  
 ○福水 梅子 同 同橋本町  
 ○藤田 カツ 同 椿村  
 ○堀 トキ子 同 萩川島 福川村半田尋常小學校在職  
 ○三浦 テル 同 同濱崎  
 ○木村夫久子(三島)同 同 同 臺北市下壺府町三丁目二番地  
 ○高部キクエ 同 萩東田町  
 ○三好 敏子 同 同



- 三村 ミサチ 同 福川村 室積女子師範學校
- 三輪 幾子 同 萩御許町
- + 椋木百合子 同 同樽屋町(在補)
- 村木 ヤス 同 樽東村 兵庫縣兵庫郡住吉村牛神齋藤様内
- 村橋 元子 同 萩唐樋町(在補)大正十二年十二月(死亡)
- 森田 壽子 同 三見村
- 安間アヤ子 同 福川村 高俣小學校在職
- 粟屋アサ子(山縣) 同 萩平安古 熊谷町
- 山中トキ子 同 同蕪美須町(在補)
- 矢野 ひさ 同 熊本市九品寺町一丁目
- + 齋藤 愛子 同 阿萩 玉江川屋敷

本科第四回

(大正十三年三月卒業) (五十音順)

- 赤崎 キク 同 萩町堀内 萩町榊西小學校
- 伊東 俊子 同 佐々並村 同町川添
- 伊藤壽美子 同 萩町土原 東京神田淡路町一ノ一坂本店
- 池永ハツ子 同 同 山田 阿萩土原
- 岩武千尋子 同 紫福村 阿萩土原
- 井町 スミ 同 萩町濱崎

- 惠學須屋ツル 同 同 山田村玉江 原田
- 桶谷ハツノ 同 大 三鷗村 阿萩濱崎
- 大田 貞子 同 萩町山田 京都女子專門學校
- 大田 ユク 同 同 熊谷町
- 岡田 滿枝 同 同 萩平安古 原田
- 神崎 清子 同 川上村 神奈川縣足柄下郡宇湯河原見附
- 香川 トヨ 同 萩町濱崎
- 金田 佳子 同 福川村 室積教員養成所
- 河村 信十 同 萩町西田町
- 河村ユキ子 同 同御許町
- 國光フキ子 同 同 同 吳市
- 齋藤 元子 同 同 東田町
- 品川 光子 同 彌富村
- 杉山 綾子 同 同 土原 女子共立職業學校
- 須子 紀子 同 小川村 室積女子師範學校
- 高洲サト子 同 萩町土原
- 田村ヒサヨ 同 須佐町
- 刀福 琴子 同 萩町東田町
- 富田ハル子 同 同 土原 室積女子師範學校
- 永田 綾子 同 萩町土原
- 永野 文子 同 同 橋本
- 中村 照子 同 同 川島

- 中村 政子 同 吉部村
- 野北トメ子 同 萩町河添 室積教員養成所
- 林 菊枝 同 同 榊 須佐町
- 弘 ヒサコ 同 同 津守町
- 藤井ナエ子 同 三見村
- 藤井 藤江 同 萩町土原 奈良女子高等師範學校
- 藤本マサコ 同 同 川島
- 藤原トモコ 同 同 榊東 東京
- 古川 愛子 同 同 田万崎村 阿山田村奥玉江
- 若松楠緒子(藤田) 同 萩町土原 兵庫縣武庫郡本山村村森若松八郎方
- 堀 テフ 同 同 東濱崎
- 松浦マサコ 同 同 東京市外下落合小島方
- 三好 榮子 同 同 東田町
- 元山 初子 同 同 德島市常三島町 吉部
- 森 光子 同 滋賀縣犬上郡曾波村 阿萩江向
- 森屋 春子 同 阿萩町米屋町 阿萩五町
- 山田 富子 同 大通村 東京北品川一本木四一五
- 山根 千代 同 同 大井村
- 山藤スエ子 同 同 山田村
- 吉村 コト 同 同 萩町熊谷町
- 渡邊 房江 同 同 榊雲谷
- 吉田 初枝 同 同 八丁川島 森脇

在校會員

本科第四學年

梅組 (五十音順)

- 村上 秀子 愛媛縣今治町 風早町三丁目
- 有吉 芳枝 同 阿萩町川島
- 阿武 スミ 同 同 福川村黒川 本校寄宿舎
- 阿武 將子 同 同 川上村 本校寄宿舎
- 石津 和子 同 同 萩町河添
- 江川 利子 同 同 山田
- 大岡 高子 同 同 須佐村 萩町今古町
- 大田 温子 同 同 須佐村 本校寄宿舎
- 同 トヨ 同 同 萩町熊谷町
- 大山アサ子 同 同 萩町榊町
- 河村メキエ 同 同 同 榊町
- 川上富貴子 同 同 同 御許町
- 河村登美子 同 同 同 川島
- 神代 照子 同 同 同 八丁
- 河野ウメ子 同 同 同 橋本
- 金川 露子 同 同 同 土原
- 木谷美藤子 同 同 同 堀内
- 久志アヤ子 同 同 佐波郡防府町宮市 萩江向



熊野ヒサ子 阿 萩町土原  
 熊谷 愛子 同 萩町今魚店町  
 後藤ミヨ子 同 御許町  
 佐伯 尚子 同 福川村 萩町江向  
 齋藤 貞子 同 萩町樺東  
 篠原 光 島根縣美濃郡小野村 本校寄宿舍  
 鈴木嬉美子 阿 萩町樺東  
 末成キクヨ 同 吉部村 本校寄宿舍  
 武居 榮子 都 下松 萩町川島  
 竹下ハナ子 阿 萩町樺東  
 高橋ミナ子 同 同 店樋町  
 内藤 静江 阿 明木村 本校寄宿舍  
 中村 トロ 同 萩町樺東松本  
 中村 信子 同 同 新堀  
 奈古屋イト 同 同 米屋町  
 西山 文子 同 同 山田  
 能美 チヨ 同 同 中津江  
 原田 ヲツ子 同 同 土原  
 原田 宣子 同 同 江向  
 福永ヒサ子 同 同 橋本町  
 堀 俊子 同 同 江向  
 松浦シツ子 大 俵山村 萩町平安古

三好 民子 阿 萩町 樺東  
 光井 泰子 同 同 濱崎町  
 村上フサ子 同 三見村 萩町平安古  
 村谷チヨコ 同 萩町山田  
 本永 繁子 同 同 堀内  
 森尾シゲ子 同 同 御許町  
 山田 文子 同 同 平安古  
 山本 房江 同 同 平安古  
 井本 義子 同 須佐村 本校寄宿舍  
 横山ミササ 同 同 同  
 松田ミササ 同 川上村 萩椿町  
 長井アヤ子 同 萩川島 萩土原  
 同 川上村 萩土原

**本科第四學年 菊組 (五十音順)**  
 秋山千代子 阿 萩町五間町  
 石川ナツ子 同 同 樺町  
 内田 恭子 同 吉部村 本校寄宿舍  
 岡本トシエ 同 萩町樺町  
 岡田 カツ 同 同 樺東香川津  
 小野 勝子 同 奈古村 本校寄宿舍  
 岡村興志子 同 萩町濱崎町  
 小川ナツ子 同 同 樺東松本

河邊 時子 大 三陽村 本校寄宿舍  
 金子 ヤハ 阿 萩町江向  
 木原 キヨ 同 同 樺東  
 窪田智恵子 大 菱海村 本校寄宿舍  
 岡重 節子 阿 萩町樺東松本  
 齋藤 春子 同 同 土原  
 磯見由久代 同 同 樺西  
 鈴木百合子 同 同 山田村  
 玉野富美子 同 同 樺東  
 高橋クニ子 同 同 唐穂  
 竹内 芳子 阿 萩町濱崎  
 田中 花子 同 同 五間町  
 種子千代子 同 同 吉部村 本校寄宿舍  
 種子シツ子 同 同 樺東松本 本校寄宿舍  
 飛田 久子 同 同 田万崎村 本校寄宿舍  
 中村 芳子 同 同 萩町土原  
 長井 龜代 同 同 樺西  
 長村 ウメ 同 同 同  
 林 シゲコ 同 同 御許町  
 林 吉子 同 同 樺西  
 林 露子 阿 川上村 本校寄宿舍  
 平井 君子 同 萩町熊谷町

福谷 政子 同 同 津守町 西田町  
 藤屋 春子 同 同 東田町  
 福山 壽 同 同 樺町  
 松林 英子 同 同 樺東松本  
 松岡アヤ子 同 同 北古萩  
 馬來富士枝 同 同 堀内  
 三戸 歌子 同 同 山田  
 宮内 松子 同 同 熊谷町  
 瀧部ミドリ 同 同 萩町樺東目代  
 宮内ツル子 同 同 熊谷町  
 村上キヨ子 同 同 五間町  
 柳田 眞子 同 同 樺町  
 山根 芳子 同 同 同  
 山田 ヤハ 同 同 樺東無出原  
 山本 繁子 同 同 御許町  
 山本 貞子 同 同 濱崎町  
 山本フニコ 同 同 樺東松本  
 芳野 和子 同 同 平安古

**本科第三學年 梅組 (五十音順)**  
 阿武 慎子 阿 川上村 本校寄宿舍  
 有吉 八重 同 萩町川島



石田 久子	同	福川村	本校寄宿舎
伊佐 貞子	同	萩町橋本町	
井町 梅子	同	生雲村	濱崎町
岩崎 鏡代	同	萩町橋東	
今津シズ子	同	萩町橋	
梅本 筆子	熊	光井村	橋東
植田 文子	阿	萩町橋東	
岡村 セツ	同	萩町土原	
岡崎マツ子	同	萩町橋東	
岡 里子	同	同 山田	
小野村サトリ	同	同 橋東	
金子スミ子	同	大井村	本校寄宿舎
金子 萩野	同	三見村	
河野マツ子	同	奈古村	本校寄宿舎
河野ミチ子	同	萩橋本町	
木村フジ子	同	川上村	本校寄宿舎
清須 イト	同	萩町橋	本校寄宿舎
百濟 萩江	同	萩町橋東	
久保ミヤ子	同	同 濱崎	
齋藤 節子	同	同 上五間町	
齋藤 政子	同	同 濱崎	
柴田シズ子	同	川上村	本校寄宿舎

末水 貞子	同	萩橋本町	
竹重壽美子	同	同 江向	
田村トミ子	同	同 橋	
田村千代子	同	同	
壺田 末子	同	同 橋東	
武田 トシ	同	同 山田	
多田 照子	同	同 橋東	
土井千鶴子	同	同	
中原 光子	同	同 江向	
服部クマ子	同	紫福村	本校寄宿舎
林 諒子	同	萩御許町	
長谷川政子	廣	豊田郡東野村	橋東
藤田 鶴子	阿	萩町平安古	
藤井オツギ	同	同 山田	
丸尾喜美子	同	下關市西細江町	土原
松本 菊野	阿	萩山田	
三原 真江	島	欲川郡西濱村	本校寄宿舎
宗貫千代子	阿	萩一嘉美須町	
村岡千代子	同	同 橋	
村田 幸子	同	同 唐樋町	
村上 玉子	東	豊多摩郡澁谷町	橋東
山本 照	阿	萩町川島	江向

本科第三學年

菊組 (五十音順)

吉見不二子	同	同河源	
吉屋ウメ子	同	同油屋町	
吉賀 芳子	同	同 橋東	
渡邊 愛子	同	同 川島	
阿武ヨシ子	阿	萩町橋東	
有吉 トロ	同	同 北古萩	
石川サマ子	同	同 濱崎	
井上 綾子	同	同 福川村	本校寄宿舎
井町アツ子	同	三見村	平安古
植木 イシ	同	同 山田村	
大谷 ハツ	同	同 橋東	本校寄宿舎
岡 派子	同	同 川上村	
岡村シズ子	同	同 萩江向	
桂 松子	同	同 萩町土原	
河野 厚子	同	同 橋東	
河野チエ子	同	同 美禰郡共和村	本校寄宿舎
柏原トミ子	同	同 魚店	
小池 幸子	同	同 堀内	
後藤 文子	同	同 橋東	
小松登喜江	同	同 橋村	

坂本 於橋	阿	同 熊谷町	
白井 律子	同	同 萩町江向	橋村金谷
杉山美壽子	同	同 萩町川島	
鈴木壽美子	同	同 橋東	
澄川 トク	同	同 土原	
高洲ミサコ	同	同	
高橋 芳子	同	同 明木 河添	
瀧口芳宜江	同	同 橋東	
田中 孝子	同	同 萩濱崎	
田中 正子	同	同 明木村	本校寄宿舎
律守 保子	同	同 萩町橋東	
寺田 達子	同	同 同 川島	
中島 壽子	同	同 同 山田	
中村マチ子	同	同 同 橋	
橋本 貞子	同	同 同 濱崎	
波多野チヨ子	同	同 同 橋	
羽島 壽子	同	同 同 山田	
原田マツ子	同	同 同 橋	
原 ティ子	美	赤塚村	本校寄宿舎
福島 靖子	阿	萩橋東	
藤田 厚子	同	同 橋	
三輪 慎子	同	同 橋本	



森重 貞子 大三隅村 本校寄宿舎  
 柳井 君子 阿 萩町椿東  
 山根 ナヲ 同 萩町椿東 本校寄宿舎  
 山根 敏子 同 大井村 本校寄宿舎  
 山本 節子 同 萩南古萩  
 山本 静子 同 萩町古萩 在阿萩江向  
 山本 ナヲ 長崎縣長崎市  
 安田百合子 同 同椿東  
 吉山ツツ子 同 同山田  
 居田 春子 阿 萩町八丁

本科第二學年 梅組 (五十音順)

阿武 英子 阿 萩町土原  
 池内 巴 同 同惠美須町  
 石津 里子 同 同椿町  
 伊勢島佐津子 同 同濱崎  
 伊藤 智子 同 宇田村 本校寄宿舎  
 伊藤 松枝 同 萩町濱崎  
 岩田美代子 同 同堀内  
 植村ヨシコ 大 日置村 濱崎  
 内山 愛子 部 久米村 本校寄宿舎  
 桐田 静子 阿 萩町鶴江

鬼村 露子 同 同橋本  
 大島スエ子 同 同濱崎  
 大谷チエ子 同 同中ノ倉  
 柁山 通子 同 同川島  
 象田 三子 同 同前小畑  
 黒川佐津子 同 同東田町  
 厚東 閑子 同 同松本  
 佐方 キミ 同 同倉江  
 品川 芳子 同 同萩町熊谷町  
 清水タミ子 同 同別院前  
 下井 美子 美 大田村 唐樋二ノ森  
 末岡 花子 阿 萩町今魚棚  
 杉山 文子 同 同川島  
 竹内ヤエ子 同 同渡ノ口  
 竹中 富尾 同 同松本  
 田總 ヨシ 同 同平安古  
 津守 松代 同 同堀内  
 中村ヨシ子 同 同香川津  
 能美ハル子 同 同萩町唐樋  
 長谷フミ子 同 同熊谷町  
 林 キヨ子 同 同中渡  
 原 文子 同 同明木村 本校寄宿舎

廣 文子 同 同萩町濱崎  
 福永 ウメ 同 同堀内  
 藤田 郁子 同 同土原  
 堀 賀代 同 同川島  
 堀 ヨシ子 同 同濱海  
 馬來壽美子 同 同堀内  
 宮原千代子 同 同鹽屋町  
 山下 悦子 同 同倉江  
 山田 ミナ 同 同土原  
 山中ヨエ 同 同東美須町  
 山本 千代 同 同江向  
 山本 ハナ 同 同椿町  
 山本 淑子 同 同土原  
 山本 貞子 同 同橋本  
 行本 貞子 同 同東田町  
 若松ツル子 同 同同  
 渡邊 豊子 同 同堀内  
 渡邊美知恵 同 同椿町  
 岩崎 文子 同 同會江

本科第二學年 菊組 (五十音順)

赤川 鉄子 阿 萩町土原 府古萩  
 安達ツツ子 同 同金谷 江向

荒川登喜江 同 同椿東  
 伊藤 基美 美 共和村嘉萬 唐樋  
 板垣 君代 阿 萩町平安古  
 伊東 浪子 同 同橋本  
 岩本 禮子 同 同萩町土原 萩奥玉江  
 上田ヨシ子 同 同大萩山田玉江  
 大田ミサコ 同 同萩町土原  
 大橋 トモ 同 同川島  
 岡本 芳江 同 同大谷  
 岡 千代 同 同大萩倉江  
 岡 キヨ子 同 同同椿東後小畑  
 小野キミ子 同 同同椿町  
 鹿島イツコ 美 共和村  
 金山 治子 阿 萩町下五間町  
 河野 夏子 同 同同橋本  
 河村 繁子 同 同大萩椿町  
 上石 玉子 同 同明水 本校寄宿舎  
 北出いく子 奈具市井上町 北古萩  
 紀野 耀子 金澤市  
 木村 壽子 阿 萩町御弓町  
 日羽美智子 同 同堀内  
 進藤美穂子 同 同萩町椿東舟津



杉山ナツコ	美 共和村
竹谷ハルコ	阿 萩町下五間町
張 倫子	同 川上村
津田智恵子	同 萩町東田町
仲子 キク	同 同 濱崎
中尾 春子	同 同 堀内
中村ナツ子	同 共和村
中村フシ子	阿 萩町前小畑
波多野ヒサ子	同 同 椿東中ノ倉
林 光子	大 菱海村
藤井 政子	阿 萩町椿東中ノ倉
堀 静子	同 同 江向
堀上 重	同 同 椿東無ケ原
松田 年子	同 同 上五間町
松村 トミ	同 同 東田町
村上 信子	同 三見明石
山中由喜子	同 大萩大海
山本壽美子	同 萩町吉田町
山根 秋	同 大萩倉江
山本 禮子	同 萩町江向八丁
横木 房子	同 大萩椿東
横山 藤江	

米山 立身	長野縣諏訪郡平野村 椿東舟津
和田 久	豊浦郡田耕村 江向

**本科第一學年 梅組 (五十音順)**

池上ヤス子	阿 萩町奥玉江
石井八重子	同 同 小畑
板谷富美子	同 同 山田
市川 フミ	同 同 川島
伊東 芳子	同 同 佐々並村
井上 久代	同 同 江向
梅下 松代	同 同 濱崎新町
梅木セキヨ	大島郡家室西方村 河添
江舟富美子	阿 川上村
大谷 ウメ	阿 萩町小畑
大津シン子	同 同 松本
小田アヤ子	同 同 奈古
柏木 敏子	同 同 萩町東田町
桂 淑子	同 同 川島
河村 ユク	同 同 椿東
金子 敏子	同 同 堀内
木下美恵子	同 同 熊谷町
北村二敏子	美 大田町

倉重千代子	阿 萩町松本
黒瀬田鶴子	同 萩町梅町
小林 雪子	同 同 中津江
佐伯 増榮	同 同 江向
島本サダ子	同 同 濱崎
鈴木 絶子	同 同 松本
高橋美智子	同 同 土原
竹内 静子	同 同 惠美須町
友水マサ子	美 大田町
中原ユキ子	阿 萩町土原
中村 貞子	同 同 平安古
中村 ミホ	美 田万崎
仁保 キク	阿 萩町土原
能美美都代	阿 同 中津江
野村 繁子	沖 瀨縣那覇市垣花町 南古萩
原 マツ代	阿 紫福
廣瀬ミヨ子	同 萩町濱崎
弘中 静	同 同 川島
藤田フミ子	同 同 南片河
松田 静	同 同 川島
松村 ハナ	同 同 上五間町
松野 君子	美 大田

瀧部百合子	阿 萩町松本
光國 榮	同 同 米屋町
村上 照子	同 同 東田町
村田 貞子	同 同 唐樋
森福サダ子	大 三隅
安光 親江	阿 萩町土原
山縣 ウメ	同 同 河内
山田 道子	同 同 平安古
山村 梅子	同 同 濱崎

**本科第一學年 菊組 (五十音順)**

岩武 正子	阿 紫福
植田 順子	同 同 椿東
上村 桃枝	美 赤郷
小田 文子	阿 萩町御許町
大岡 芳子	同 同 須佐
大田 好子	同 同 萩町熊谷町
大谷 好子	同 同 中ノ倉
大野 イホ	同 同 奈古
落合八重子	阿 川上村
笠井 清子	同 同 萩町椿東
金山 露子	同 同 萩町御弓町



河名 孝 同 同 椿町  
 河邊マズ子 大 三隅 本校寄宿舍  
 桑原 ヨシ 阿 萩町新堀  
 小橋伊楚子 同 同 同美堀  
 小原美代子 鳥根縣依川郡西濱 西田町  
 佐伯 文子 阿 徳佐 土原  
 静間 芳子 同 須佐 本校寄宿舍  
 下田智得子 大 仙崎 山田  
 助石フキ子 阿 萩町 平安古  
 須子 安子 同 同 同  
 高橋イネ子 同 同 五間町  
 高村 文子 同 同 平安古  
 瀧野 敦子 同 同 椿東  
 津森 茂子 同 同 熊谷町  
 土井 梅代 同 同 山田  
 時山 文子 同 同 橋本  
 富田 文子 同 同 同  
 長岡シズ子 同 紫福 本校寄宿舍  
 中村登美子 同 萩町東田町  
 永安ハナ子 同 同 川島  
 西村 政子 同 奈古 本校寄宿舍  
 西山 初枝 同 萩町川島

波田 幸世 同 同 椿東  
 花田 鏡子 同 萩町椿西  
 原 ミサヲ 美 赤郷 本校寄宿舍  
 堀本トシ子 阿 萩町堀内  
 三浦 綾子 同 同 御弓町  
 三隅 フサ 同 同 椿東  
 瀧部ウメ子 同 同 椿東  
 鶴 洪子 同 同 椿東  
 宮内千代子 同 萩町熊谷町  
 村上 智恵 同 同 椿東  
 村上 恒子 同 同 椿東  
 最上 綾子 同 同 椿東  
 本永 芳恵 同 同 椿東  
 守田トミ子 熊 勝間川 萩町江向  
 山田 鷹子 大 通村 本校寄宿舍  
 山根 勝子 阿 萩町濱崎  
 吉村多喜子 同 同 川島  
 伊藤シヅヨ 阿 萩町前小畑  
 伊藤 コト 同 同 濱崎  
 池田 キミ 同 同 古村 土原

實科二年 (五十音順)

井上 清子 阿 厚 小野村 井町  
 井町フク子 阿 萩町 濱崎 本校寄宿舍  
 沖野マズ子 大 菱海村 本校寄宿舍  
 岡田 ヒナ 同 深川村  
 大草 操 阿 須佐村 新堀 本校寄宿舍  
 小田 文子 同 同 同  
 小田マツ子 同 大井村 熊谷町  
 片山 政子 同 同 同  
 河崎 イト 同 萩町鶴式丁 本校寄宿舍  
 佐藤ヤス子 同 生雲村 江向  
 佐々木トキ子 同 吉部村 江向  
 末武キタノ 同 萩町越濱 本校寄宿舍  
 田中クマコ 同 名古村 本校寄宿舍  
 田中 末子 同 大井村 江向  
 谷村スミ子 大 菱海村 本校寄宿舍  
 高洲 ヴロ 阿 萩町金谷  
 鶴重 イツ 同 藤生村 中渡  
 永田 貞子 同 大井村 江向  
 深田宇多代 大 菱海村 本校寄宿舍  
 藤原サチコ 阿 萩町大谷  
 堀尾シズエ 同 同 堀内  
 松浦 千枝 同 大井村 江向

町田ヨシノ 阿 萩町江向  
 三浦 文子 同 萩町濱崎  
 山崎ヨシ子 同 同 熊谷町  
 八木 菊子 同 萩町西田町  
 吉永 久子 美 綾木村 濱崎  
 吉村 操 同 萩町青海  
 阿武トシ子 同 萩町川島  
 安藤 ツル 阿 萩町香川津  
 砂 キミ子 同 同 堀本 本校寄宿舍  
 岩本 雪代 同 明木 同  
 大野 清子 美 大田町 同  
 小田カメ子 阿 奈古 同  
 小田キシ子 同 田万崎村 同  
 大田キシ子 同 同 同  
 大田 和子 同 吉部村 同  
 金子 ツル 同 福川村 熊谷町  
 河村ミドリ 同 萩町松本  
 君谷 藤子 同 吉部村 本校寄宿舍  
 栗田 菊司 同 同 古萩  
 下瀬ヨシ子 同 紫福村 古萩

實科第一學年



末永 満子	同	本校寄宿舎
田村モミ子	同	渡り口
立野ハル子	同	御弓町
津田 幸子	同	本校寄宿舎
都野幾久子	同	堀内
土井 静子	同	萩町中小畑
中村キミ子	同	萩町松本
野田チエ子	同	大島村
波多野照子	同	萩町濱崎
原田シキア	同	同 山田
藤本ハルノ	同	紫福村
藤原キクノ	同	福川村
堀野 文子	同	田万崎村
松浦 愛子	同	大井村
三好フキ子	同	萩町吉田町
茂刈 菊代	同	宇田郷村
山下 綾子	同	萩町山田
山田モ、ヨ	同	同 松本
山根カメヨ	同	紫福
山本 絹子	同	萩町東濱崎
吉屋トキエ	同	大井村
渡邊スミコ	同	萩町濱崎

中屋マサ子 同 同 玉江浦

編輯だより

○ 早きものにて候よ。誠に光陰矢の如しとはよくぞ申し候ひつる。第十一號を發行せしは、つひ昨日の事の如存せられ候に、早くも一年を経たりとは、鳥兎早々と香氣の沙汰にてもすまされぬ候存せられ候。

○ 學校を卒へたるは昨日の如き心地もすなるにこそ、指折れば、はや二年、三年、五年、さても夢の如く過ぎつるよ、其の長き日を日れもす如何に暮しつらん。等思ひ合せばとて取りとめぬなき事ながら在學當時の思ひ出は、一際ははて、よきも悪しきも印象強からむと存せられ候。

○ 歳月の早きを聊ち、わがつかめぬならざるを聊つは世の人の常にて候。さりながら、なすべかりしをなまざりし怨み

を殘さざる様、なすべきを、なし遂げむてふ心掛こそ、いたくも尊しと覺はられ候に、後より〜と氣付く事の、さてもうたてき事に候。

○ 年々歳々幾人かの卒業生を出し、年々歳々幾人かの入學者をむかへて、わが南園のまごゐは、年々共に隆盛に向ひつゝ、ある事は、目出度くうれしく候。

○ さはれ、我會のこよなき發展は、たゞそれのみにては事足り申さず候はむ。母校に對する愛着の情、爾奥の如き同窓の親和を、うつてかためし博愛、互助の精神こそ、我園生に咲く花、結ぶ實の糧にても候べし。

○ 藍より出で、藍より青き背もあり、水より出で、水より冷き氷のあるは、たゆまず、そしてよそのうれしき歌にて候はむ。なす事限りなく、進みて止みなき

今の世に、更に尙、心すさびぬ、遺すたれぬ等の聲きくこきに、わかき婦人の、さてもつこめの重きよさは存せられず候や。

○ 限りある身の、限りなきつとめを負ひて生れ出でしこそ幸なれと覺は候、わが事のため、わが身のためと、思はず走る醜き希望の數々、はづかしき限りに候、われ世のため人のために盡さむとせば、小さくとも弱くとも、やがて人生の樂園にそぼふる慈雨ともなり申すべく、せめては、こゝにも心づきたきものに候。

秋としいひて哀めば、冬としくるゝ、日も間近く相成り候。今こゝに第十二號の編輯を了へたる日、省みればいふべき事、詭ぶべき事々々につきせぬとたゞ會員諸君の健康を祈りて筆を闕くべく候。

(大正一三、一一、二九)

標本室にて、みつば



きし出づる此日のもこの光より高麗唐土と春を知るらん (宣長)  
 若水を今朝くみあげて掬ふ手に乗るや千代の雫なるらん (清綱)  
 山高み出づる日影を待ちまじりてよもに匂へる朝がすみ哉 (眞淵)  
 少女子が袖ふる山に来て見れば花の袂は綻びにけり (清輔)  
 世の人の心を春になすものは野山に匂ふ櫻なりけり (千陰)  
 櫻花日ぐらし見つゝ今日も亦月待つ程になりけりかな (爲仲)  
 苦青し岩垣がたし水白しあなすがくし袖ひたさまし (繁里)  
 奥山の岩れのしみづ涼しきは夏のほかなや流れきぬらん (遊清)  
 思ふぞち再びさはん契まで掬ひてかへる山の井の水 (知紀)  
 吹く風に葉の戸ほそをたゝかせて葎のやぎに春は來にけり (靜賢)  
 見る人のなくて散りぬる奥山の紅葉はよるの錦なりけり (貫之)  
 等閑りに秋の山邊を越ゆれば散らぬ錦を着ぬ人そなき (讀人不知)  
 胸さめて袖うちらはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮 (定家)  
 すて果て、身はなきものと思へさも雪の降る日は寒く社あれ (一休)  
 照る月の影の散りくる心地してよるゆく袖にたまる雪かな (景樹)

大正十三年十二月十六日印刷  
 大正十三年十二月廿三日發行  
 山口縣阿武郡萩町大字平安古  
 發行兼編輯人 柳原良助  
 山口縣吉敷郡山口町道場門前  
 印刷人 平佐國介  
 全 上  
 印刷所 大同印刷舎  
 山口縣阿武郡萩町  
 發行所 山口縣立萩高等女學校南園會

ヲ御忘レナキ様ニ願ヒマス)

卒業生各位

- 一 卒業年月 本科第 實科第 回 大正 年三月卒業  
 二 現住所  
 三 現氏名  
 四 元ノ氏名  
 五 夫ノ職業  
 六 自己ノ職業  
 七 子女ノ數 男 人 女 人  
 八 其他 會報ニ住所不明トアル人ノ氏名住所)等テモ御通知下サレバ仕合セマス



